

夢遊という散策

旅に病みて 夢は枯野を駆け巡る

—松尾芭蕉

巻頭詩

今日はとても酷い天気なので、なんの意味も加えたくない。

今日があんまり酷い天気だから、意味ある事はしないでおう。

今日はとても酷い天気だから。

今日があんまり酷い天気だから。

バルコニーの下で、俺は項垂れている。

朦朧とした頭の中で、哀しげな音楽が鳴っている。はて、俺は一体何をしていたのだろう。手には小さな酒瓶―何の手がかりにもならない。手には小さな酒瓶―中身は空っぽ。行き交う人々は、みんなそれなりに幸せそう。と同時に、みんなそれなりに不幸せそう。

俺はできることならローマ帝国の貴族に生まれたかった。しかし、現実の俺はただの飲んだくれだ。

尻と膝と顔面が痛い。先程、俺の投げ出された足につまづいて転びかけた会社員が、激怒のあまり俺の首根っこを掴んで直立させ、尻を思いっきり蹴飛ばしやがったのだ。(それはアメリカの無声喜劇映画の1シーンのようだった)俺は顔面から道路に突っ込んだ。俺は折れた鼻の骨を慰撫しながら、これだけは声高に言っておかねばならない。

俺は尻を蹴飛ばされるために、この世に生を受けたのではない。

俺はくしゃみ一つする。さすがに、今晩は橋の下で眠るわけにはいかないようだ。

俺は昨日の夜、塩辛い冷気に耐えかねてコートを燃やしてしまったのだ。火はすぐに消えた―。俺はガチガチと歯と歯をぶつけ合いながら、炭化したポロ布に諦めもせず手をかざしていたものだ。あんな夜は二度と過ごしたくない。二度と。美しい思い出にすらなりやしない、あんな夜は。

てんでばらばらに存在している雑多なものが、不確かな関連性でもって有機体を構成している、わけのわからないこの世界を要約してみようとしたところで、骨が折れるだけだ。そんなことで骨を折ってはいは、もっと大切な仕事が出来なくなってしまうだろう。山のような問題は何一つ解決しないまま、夜が更け、そして朝が来る。誰もが、それなりの重みを背負ったまま、何処からかやって来て、何処かへと帰ってゆく。俺は飽きもせず、雑踏をたゆたい続ける。



第一章 日曜日の舞踏

インディアンだったら、すぐさま疾駆する馬にまたがり、ななめに空を切り、ふるえる大地高く、はげしくからだをふるわせ、ついには拍車を捨て、拍車など無用だからだし、手綱を投げ捨て、手綱なんぞ無用のきわみだからで、短く刈りとられた荒野もほとんど目にとまらず、もはや馬の首も消え失せている。

ーフランツ・カフカ

プロローグ：散策という夢遊

記念すべき最初の一文で、このような告白をするのもいかなものかと思うが、恥も外聞もかなぐり捨てて書いてしまおう、このままでは小説が始まりそうにない。

私は先程、食事を終えたところである。ルーム・サービスのクラブハウス・サンドイッチ。そのパンは砂漠よりも水気に乏しく、レタスは老婆の皮膚のように萎びきっており、チーズは解凍され損ねたせいで岩と同等の硬質さを誇り、ベーコンは水漬けにしたかの如くべしやべしやに濡れていた。その隣に行儀悪く胡坐をかいているポテトチップの山には満遍なく黴が生えており、酢漬けのオリーブは一口齧れば塩辛さの余り舌が捻じ曲がりそうな代物。私はこれらの退廃的な物体が盛られた皿を、狭いテーブルの真ん中に置き、ペシミスティックな空気の中に顔を埋めている。私は部屋の中を見渡す。剥がれかけた壁紙、金属製の脚が錆びにまみれているベッド、悪趣味な絵（婦人の肖像なのだが、私にはステゴザウルスに見える）、ヒビをセロハンテープで修繕した窓。私は立ち上がり、窓辺に歩み寄る。素晴らしい眺めだ―隣のビルの壁面がよく見えること。

思わず私はその窓から身を投げようかと思つたが、こんなことで死ぬのも癪なので中止し、ベッドの上に腰を下ろした。尻が痛い。横たわる。背中と腰が痛い。これはナチスが使用していた拷問台か？寝るのには不向きな寝台である。寝るのに不向きな寝台の上で、小説を書くのに不向きな小説家が虚脱している。成る程、素晴らしく調和が保たれているわけだ。

突然、咳の発作が襲ってきた。私は四つんばいになり、ゼイゼイと喘ぎながら渾身の力で唾を散らし続けた。酸素が欠乏した脳のせいで、私は空高くに浮かんでいる心地がした。私の気管は一体どうなってしまったのだろうか？三日前から、私の口腔の奥では第三次世界大戦が勃発している。

三日前の昼下がり、破滅的なスパゲッティ（パスタの生地には粘土を用い、トマトソースの代わりに赤インクを使い、そして仕上げに粉チーズではなく粉石鹼をふりかけたような、そんな素敵なスパゲッティ。それにしても私は、さつきからずっと食べ物文句ばかり言っている気がする。）を食べ終えた私は、このホテル中に沈殿している湿気た空気の重みに耐えかね、外へ出たのだ。蓋しこれは懸命な行動とは言えなかった。ホテルの内も外も、同じような空気が沈殿したのである。いや、というよりも、その空気は私の内部に沈殿していたのであろう。私は灰色の空を見上げた。次に、自分のつま先に目を落とした。擦り切れてぼろぼろの靴。その下に広がる、痛んだアスファルトの歩道（鳥の糞と吐き捨てられたガムが、アクセントを添えている）。けたたましいベルの音がして、自転車にまたがった子供が私を追い抜いて行った。私はまたぞろ空を見上げ、垂れ込めた雲を鑑賞する。行き交う車が吐き出す排気ガスが天に昇って、あんなにくだらな色でもって空を塗り上げたのだろうか。

このままでは小説が始まりそうにない。何だこのザマは、と私は誰に向けてでもなく悪態をついた。私は執筆に集中できる環境を確保すべく、あのホテルに缶詰になったのだ。それが、この有様である。私を取り巻くこの環境は、私を小説に追い立てるどころか引き離そうとしている（まあ、引き離す方が懸命な行為だというような気もするが）。私は足元の石を蹴りながら歩いた。その行為は私に小学校時代の思い出を想起させた。習字の時間、服にたっぷりと墨汁を付けてしまった私は、うまい言い訳を考えながら帰り道を歩いていた。無意識のうちに、足先で石を蹴りな

がら歩いていた。結局、何も思い浮かぶことはなく、石は家の前の溝川に落ちた。その後私がどんな風に家人に怒られたか、それは思い出せない。石と一緒に溝川の中に消えてしまったのかも知らない。

私はペットショップの前を通りかかった。店先には巨大な水槽が置いてあり、その中で一匹の醜いらんちゆうが泳いでいた。この背びれの無い哀れな金魚の末裔を、私も昔飼って見たことがある。十年ほど前の話だ。私は金魚が大好きだったのだ。縁日に行った折にも、貰った小遣いを全て金魚掬いに使ってしまうような子供だったのである。

らんちゆうを買ったあの日の私——まだ少年と言ってよい年齢だった——は、巨大な水槽を抱え、背中を丸めて固い石畳の歩道を歩いていた。靴擦れが痛かった。沈みかけた太陽が、私に向かって嘲りの笑いを浴びせかけた。らんちゆうの濁った目は、私の目に恐ろしいほどよく似ていた。とても少年のものとは思えない、老人のような節だらけの手に青筋を浮べ、埃まみれの靴を引き摺って、私はビルとビルの間を歩いていた。太陽がからからと笑った。不愉快だった。らんちゆうは私に向かって吐き捨てるように言った。革命でも勃発すれば、この憂鬱も粉碎され、俺も消滅してしまえるかもしれない、いっそ、そうなっちまえばいいのに。私はやり切れない気分になった。馬鹿笑いを続ける太陽を直視しようと顔を上げた私は、ビアガーデンで黒ビールを飲んでいる奇妙な男と目が合った。私はしばし立ち止まり、その男と睨めっこをした。実に奇妙な体験だった。あれは、一体誰だったのだろうか。

考えてみれば、私はそれ以来金魚を飼ったことが無い。そのらんちゆうは三日後に死んだ。私は彼の死体を植木鉢に埋めた。その後、私の母がその鉢にチューリップを植えた。チューリップはすくすくと育ち、恐ろしくけばけばしい赤色の花を咲かせた。

そんなことを思い出しながら通り過ぎ、私は次に古本屋の前で足を止めた。日焼けした背表紙がずらりと並び、古びた紙から生じた独特の甘い臭いが漂って来る。そして埃にまみれた老人達の後姿が、そびえ立つ本の山の前に立ちはだかっている。私は慎重に一冊を抜き取り（ジェンガーなるゲームをご存知だろうか。あの要領である。古本に押し潰されて窒息死するのは、なかなか乙な死に方ではあるが、御免蒙るよ）開いてみた。巨大な紙魚が、大慌てで逃げ出していた。

半時間ほど、書架の間を散策したが、収穫はゼロだった。足も疲弊してきたことであるし、そろそろ出るかと思ったその矢先、私の目に一冊の本が飛び込んできた。

エルンスト・エリアス・ベスラー著『語り得ぬ者たちの沈黙』

何故その本に目が留まったのか、自分でもよくわからない。私は冷やかし半分でその本を引き出し、中を読んでみた。

それは、自動人形やからくり人形の歴史について書かれた本であった。内容に関しては全く理解できそうにもなかったが、奇妙に惹きつけられる雰囲気を持った本であった。見返しに鉛筆で書かれた値段を見ると、百円玉二枚で買えることが判明した。このまま手ぶらで帰るのもなんだし、喫茶店でコーヒーを飲むのよりも安い出費で済むのだからと思い、私はその本を買うことにした。

そして私は無意味に歩き始める。散策という名の夢遊を再開する。どこへたどり着くのか知らないが、まあ大した処には行けないだろう。私は石を蹴りながら、彷徨い続ける。シャッターの

降りた自転車屋、準備中の札を掲げた（実際には、ずっと前に閉店してしまったと思われる）定食屋、青く変色したビールの広告を表に張ったスーパ―、壁一面に蔦を絡ませた小さな喫茶店、巡査が居眠りをしている交番、もはや内部が物置と化してしまっている雑貨店、そして……歩き続けるうちに、いつの間にかホテルの前に戻っていた。私は今まで蹴って来た石を、足元の溝川の中に蹴りこんだ。

部屋に帰って来た私は、耐え難い蒸し暑さを消し去るべしとクーラーに命令した後、ティッシュヤツを脱ぎ捨ててナチの拷問ベッドに横たわった。背骨の痛みを甘んじて堪えながら、私は先刻古本屋で購入した廉価本『語りえぬ者たちの沈黙』を読もうと思った。しかし突然に睡魔が襲ってきたので、読書は後回しにすることとし、しばし午睡をすべく目を閉じた。

そのまま、私は晩になるまで眠り続けた。

目を覚ました時、私は鼻が完全に詰まり、喉がひどく痛んでいることに気がついた。部屋の中はアイスランドのような極寒の寒さであった。クーラーは、私の命令に余りにも忠実に働いてしまったのである。くしゃみや咳が止まらなくなった上、頭痛までが襲って来た。こんなに寒い部屋に、よりによって半裸で寝ていたものだから、私は見事な風邪をひいてしまったわけである。

そして現在もお、私は腫れぼったい喉の痛みと格闘しているのである。

私は、すっかりこの安ホテルにうんざりしてしまった。私は思った、世界には小説を書くのに適した場所がいくらでもあるはず。こんな処に留まっている必要は無い。美しい空気と静寂、それに心のゆとりというものが是非とも必要だ。

その時、私の頭の中にひとつのアイデアが閃いた。私の遠縁に当たる家族が牧場を営んでいるのだが、そこへ遊びに行つて小説を書くというのはどうだろうか。よく考えてみれば、私は今まで一度も彼らの牧場を訪ねたことがない。

私には、牧場主の知人が二人いる。一人は大学で知り合い、もう一人は友達の友達であったことを契機として知り合った。私は何度か休暇を利用して彼らの農場に遊びに行ったことがある。それは素晴らしい経験だった。私は新鮮なミルクを心行くまで堪能し、牛たちと戯れて時を過ごした。私の脳裏に、その時の美しい思い出が次々と甦ってきた。

牧場へ行こう。私はそう決心した。田園を満たす清らかな空気を吸い込めば、気管支も癒されるに違いない。それに、如何に遠縁とは言え今まで一度も挨拶に行ったことがないというのは、私の不徳の致すところである。この機会を逃す手はない。是非行かねば、こんな安ホテルとはとっとおさらばして。私は立ち上がり、階下のフロントでチェックアウトの手続きをした。

久しぶりに満ち足りた気分になった私は（依然として喉の違和感に悩まされていたものの）、まだ読めていなかった『語りえぬ者たちの沈黙』を読み始めた。薄っぺらな本だったので、一時間ほどで読了した。すると、それに触発されたのか、突然私の頭の中に短編小説の構想が浮かび上がって来た。

やれやれ、これでこのホテルに泊まったのが全くの無意味にならずに済む。私はそう思いながら、パソコンを立ち上げた。タイトルは「日曜日の舞踏」、啓示を与えた書物の引用から始まる作品である。

日曜日の舞踏

※

十八世紀、世洋でからくり人形、自動人形の類いが次々と作られた。有名なところでは、エドガー・アラン・ポーの小説にも登場したというケンペレン作のチェス人形、(これは中に人が入っていたということが後年暴かれてしまったけれども)、ジャケ・ドロス(あまりに見事な自動人形を作るので悪魔に違いないと疑われ、宗教裁判にかけられた挙句死刑になりかけたという)の筆写人形など。

最も有名な人形職人は、解剖学の基礎を学んだジャック・ド・ヴォーカンソンという発明家である。彼の作った笛吹き人形は、オルゴールや蓄音機を内蔵して音を出すような誤魔化しはせず、実際にがするように息遣いと舌遣い、それに指遣いによって笛を奏でた。

彼の最高傑作と称される人形は「生きたアヒルと寸法違わぬものを目指す」というコンセプトのもとに制作されたアヒル型の自動人形である。この、運命の悪戯によって「卵からは「生まれなかった金属製のアヒルは、エサをついばみ、水を飲み、羽ばたき、ガーガーと鳴きわめき、そして食べた物を消化し排泄までしたという。(排泄に関しては、トリックであることが後年暴かれてしまったが)

産業革命が産声をはり上げ、実用的な機械が発達していくのにつれ、自動人形の文化は潮が引くように急速に消えてゆく。機械がいかにかに人間らしく字を書いても、ピアノを弾いても、誰も見向きもしなくなった。売れる商品を大量に生産する際の手助けとなる装置を作り出すことのみ、衆人の興味が集まった。まるで時代の波にさらわれたように、ヴォーカンソンが生んだ子供達は彼の手元を離れ、ドサ回りの芸人に売り飛ばされた。「笛を吹く少年」と「アヒル」はヨーロッパ中の見世物小屋を回り、旅が終わる頃にはほろほろになり、壊れ果て、捨てられた。そんなわけで、ヴォーカンソンの人形はほぼ全てが消失してしまった。しかも設計図も残っておらず、復元も不可能である。ただ、「このように動いた」「こんなふうな人形だった」という証言だけが、下世話な伝説のような形で今に伝えられているにすぎない。従って、笛吹き人形の実体がいかなるものであったか、本当のところは永遠の謎なのである。十七世紀と十八世紀の間のひずみに落ちこめてしまった寡黙なフルート奏者は、まるで白昼夢のような奇跡だった。

唯一、現存しているのが、鉄屑に成り果てた「アヒル」のスクラップである。「アヒル」は頸を項垂れたまま、錆付いた体を捻じ曲げるようにして、ガラスケースの中に閉じ込められている。このガラスケースは彼の棺であろう。もう一度と動き出すことの無いアヒル。

「生まれなかった」アヒルだというのに、どうして「死んで」しまったのだろう。

考えてみれば、自動人形の文化というものは、産業革命前夜の、急速に機械技術が発達していく過程があったからこそ生じたものであるのかもしれない。産業革命によって生まれ、産業革命によって粉碎された、どうしようもない文化だった。ヴォーカンソンが力織機のモデルを作り、産業革命の種子をまいていたこと考えるにつけ、産業革命と表裏一体で存在していた自動人形文

化が浮き彫りになってくる。産業革命があったから、自動人形文化が生まれた。産業革命があったから、自動人形文化が終わった。本当にどうしようもない文化だった。

必ずや、このように考える人もいるだろう。人間の生活を豊かにしてこそ、機械技術の進歩は意味を持つ。自動人形なぞは、生活と関係のない、全くのナンセンスな玩具に過ぎない。排泄するアヒルのオモチャが何の役に立とうか。実用的な機械機にこそ価値がある。従って、自動人形のごとき無意味な遊戯は歴史から消えて然るべきだった、と。

しかし、本当に意味のあるものとは何なのだろうか。そして、現実主義者と称する者たちが言うところの「意味」とは何なのだろうか。人はパンのみで生きていけるのだろうか。人は花を見る、小鳥の歌を聞く、そして星を眺める。そんなことを一切しなくても生きていけるというのに。花や小鳥の歌や星を愛すること、何の有用性があるのだろうか。けれども人は花を愛し、小鳥を愛し、星を愛し、そして美に様々なものを愛するのだ。

愛は究極の無意味。

ヘルンスト・エリアス・ベスラー『語り得ぬ者たちの沈黙』(1996年)より

※

何故日曜日はこんなにも憂鬱なのだろう。幸福な土曜日の夜はもうおしまい、たいして幸福でもなかった土曜日の夜ももうおしまい、僕の宿酔の頭の中では千の天使がバスケットボールをしている。今日はお休みの日なのだから、何もしなくてもよいのだけれども、何もせずに過ごす暇な一日は憔悴と絶望と後悔をもたらす。だから僕は取り合えず、何かを成す為の準備として布団から半身を起こした。続いて立ち上がり、この素晴らしき新世界に大いなる一步を踏み出さんとしたが失敗した。千の天使のドリブルが加速したからである。

ところで、現在の僕の悩みの種は、バスケット好きの天使たちだけではない。僕は、僕の隣で棒のように横たわっているA君Vを見やる。かけ布団がまくれ上って、A君Vの脚は朝の冷気に晒されている。僕は宿酔の頭を精一杯に気遣いながら、そっとその脚を布団で包んでやる。そして、宿酔の頭を精一杯に気遣いながら、そっと声を発する。「ねえ、まだ木偶人形のままなのかい」

「そーみたいね」哀しげにA君Vが答える。「ねえ、それはともかく朝ごはん食べない？」

「困ったなあ」僕は溜息をついた。「一体どうしたってんだ」

「わからないわよ」とても哀しげにA君Vが答える。「ねえ、冷蔵庫の中にベーコンある？」

「ベーコンでもなんでも食べりゃいいじゃないか!!」僕はすっかり呆れて大声を出した。その大声は僕の頭蓋骨の内側で、面白いぐらいに良く響いた。「まったくよくこんな時に食欲が湧くもんだ。」

「仕方がないじゃないの。だってどうしようもないじゃないの」

「どうしようもないのはわかってるけど、でも・・・」

「医者へでも行けって言うの？それともテレビ局に電話して、オカルト番組にでも出演してきましようか？そーだ、汚いモーターのお土産品売り場に、何食わぬ顔して並んでおくつてのでもいいかもね。それとも、残りの人生で民芸品店を開こうかしら。自分も商品のひとつになつてね。したらあなたも常連になつてよ。」

「わかった、飯にしよう。昨日夜はステーキを食いはぐれたことだし」僕は降参した。「でも僕は生憎、食欲も料理を作る気力も無いから、できればセルフサービスってことにして欲しいな。ベーコンはあるにはあるけど、何しろ種類が多いもんだからご期待に沿えるかどうかかわからないよ」

註：ひとくちにベーコンと言っても色々ある。例えば豚の肩肉で作ったシホルダー・ベーコンや、豚を半分にして作ったサイド・ベーコン、科学的研究方法を確立したロジャー・ベーコン、ロース肉で作ったロース・ベーコンなど。ちなみに、フランシス・ベーコンなるベーコンには、アイルランド人の画家であるフランシス・ベーコンと、帰納法を確立したフランシス・ベーコンの2タイプがある。

A君Vは立ち上がろうとする。しかし、まだ木製の膝には慣れていないらしく、ガクリとバランスを崩して倒れこんだ。僕は立ち上がって（嗚呼、千の天使がスリーポイントを決めた!）A君Vを起こし、台所まで慎重に運んだ。

「なんだかまるで模様替えをしているような気分だな」A君Vの手触り―木材そのものの質感―を

受け止めつつ、僕は歩みを進めた。「家具でも運んでるみたいだ」

「ステンレス製の人形でなくてよかった。木には温もりがある気がするものね」とΛ君Vはよくわからないことを言って、一人で納得している。

「ケチャップは？」「調味料が一式入ってるポケットがあるだろ」「このサラダ菜えらくしなびてるわよ」「ああ、そうかもね」「洗い場にお皿が山盛りよ」「宿酔が治ったら洗うよー!」「そう。絶対洗ったときなさいよ・・・でも、私たちって、生まれてから死ぬまで、ずっと宿酔みたいな人生よね。いつになったらあなたの宿酔が全快して、この山のようなお皿がピカピカになるのかしら？皿皿皿皿皿皿皿、倦怠・・・」。

まったくわけがわからないのだ。兎に角昨日は土曜日だった。太陽が山の後ろにその姿を仕舞い込んだ後、僕はソファに寝転がって読書に勤しんでおり、『ユリシイズ』の最後の方、あのえんえんとつづくおしゃべりのところを読んでいたのよそうよ投げだすこともなく従順ないち読者としてひたすら読書にいそしんでいたのよでもいつしかすつかりあきてしまったのよそしてきぶんもおちこんでしまったのよわたしは人生をむだに浪費しているんじゃないかしらとおもっちゃってだって土ようびの夜は家のソファで読書をするためにあるんじゃないわきらびやかな街でいっしょにおどってくれる女の子をさがしに行くためにあるのよええそうよイエス。僕は『ユリシイズ』を傍らのテーブルの上に放り投げ（もういい加減腕の方もだるくて折れそうになっていたのである）立ち上がり、それなりに身だしなみを整えて、冒険の旅に出たのである。

電飾看板だらけの繁華街は、雨季の後の川を思い出させる。チャンスを集めて来た人間達がひしめき合い、雄大かつ急な流れを作り出していた。さあ、この大きな川を泳ぎ回っている可愛い魚ちゃんを捕獲しましょう。僕は釣竿を振りかざし、一本釣りを試みた。しかし急な濁流はあつという間に僕の手から釣竿をもぎとってしまった。美しく薄っぺらな鱗で全身を覆った魚たちは僕に見向きもせず、嘲笑いしながら飛び跳ねているだけだった。手馴れた釣り人達はいとも簡単に愚鈍なヘラブナを釣り上げたり、数人で網を張り巡らせて雑魚を大量捕獲したりと大忙しだった。彼らはこれから釣ったばかりの魚を浪漫チックに酒に漬け、情熱の強火で焼き焦がし、そして歓びの声を高く上げながら味わうのだ。そう、彼らはこの神聖な儀式を遂行するためだけに生きており、他の事は一切考えないでいられる、恵まれた人々であった。そんな幸福な彼らに僕のような貧民が言えることは、せいぜい「明日朝、ウコンを飲むことを忘れるなよ」ということぐらいなものである。

僕なりにねばって見たものの、いつもの如く釣果はゼロだった。耐え難い空虚な気分が襲いかかって来た。こんなことならおとなしくじよいすさんのおしゃべりにつきあってあげてたほうがよかったかもねええそうよイエス。僕はもう釣りは止めにして、大河の中に飛び込み、流れに身を任せた。誰もが今夜を特別なものにしようと思気込んでいた。川の流れは途切れることなく続いていく。ネオンに彩られたビルとビルの間を流れる人間達の川。素敵な釣り人が投げつけてくれる甘美なルアーを待ちわびる魚達。空は眩しすぎて星は見えない。何と言う事！星が見えなければ、どうやって進むべき方向を知れと言うのか！

川は行く筋にも枝分かれしている。僕はその中の一本、お馴染みの溝川を選んで流れて行った。閑静な（すなわちうら寂しい）路地裏に、ひっそりと佇む小さな料理屋が僕の行き着く場所である。

「いらっしやいませ」Λ君Vが奥から出てくる。「何名様？」

「一人！」僕は案内される前に、いつもの席に着く。そして自分の惨めさを悪趣味な冗談にすり替えてしまおうと、大声で復唱する。「一人だよ一人！いつだって一人ぼっち！」

「今夜の釣果は？」メニューを持ってきたA君Vが問う。

「在ったら、此処にはいないよ。」「そりやあそよね。お気の毒様」「でもすごすご部屋に帰る気にもならなくてねえ。とりあえず黒ビールもらおうか」

注いでくれた黒ビールを（どんなん気が抜けてゆくのも意に介さずに）恐ろしくゆっくりと飲んでいくうちに、僕は饒舌になっていた。「ねえ！」と僕はA君Vに呼びかける。「哀しくないの？」
「どうして？」

「だって哀しいだろう。今夜なんか、世間の人はみんな遊びに出て、自分の世界を精一杯広げようと躍起になっているのに、君ときたらこんな汚いお店にずっと居なくちゃなんなくて、僕みたいな惨めつたらしい酔っ払いの愚痴をエンエン聞かなきゃなんないんだから！もつと人生を有意義に過ごす気にはならないの？酔っ払いの相手で貴重な夜を潰して平気なの？」

「別に哀しくはないわね」君はシェイカーの中にオレンジピールを入れつつ、答える。

「華やかな街の真ん中で思い切り楽しめる人もいれば、あなたみたいにあぶれちゃって路地に迷い込んでくる人もいる。ゲームの中で駆け引きを繰り返した挙句に、誰もがそれぞれの行き着く場所を知る。最後はみんな死んじゃうんだから、行き着いた場所が何処であろうときほど関係ないはずなんだけど、でも、みんな自分の行き場に不満を持って、自分が生きている人生をまるで偽もののように思ってしまう。」

でも、華やかな街には華やかな街の幸せがあつて、路地には路地の幸せがある。どっちがより秀でた幸せか、なんて誰にも決められないでしょう、たとえ神様にですら！だから自分の行き着かなかつた場所に恋をするよりも、自分の行き着いた場所の素敵な笑窪を見つけるが、どれだけ意味あることか！

そこでね、私はこの天性の美貌を生かしてね、（こういって彼女は笑い転げた）このじめじめして薄暗い場所の素敵な笑窪になってやろうと思ひ続けているのよ。それで、あなたみたいな惨めな酔っ払いがここに行き着いた時に、少しはマシな気分でいられるための手伝いをしようかと思つてね。華やかな街の真ん中で思い切り楽しめる人も、あぶれちゃって路地に迷い込んでくる人も、おんなじふうに明るい気分分でいられるようにね。

そのどっこが『哀しい』と言えるのかしら？」

僕は店がはけるまで、カウンターにへばりついてビールを飲んだ。A君Vが帰り支度をし始めると、どうせ帰って眠るだけなんだつたら僕の部屋で飲み直さないか、と提案した。そこでA君Vは心得たとばかりに、店の片隅に置かれた巨大な冷蔵庫からワインを2、3本出して来て、コートのポケットにするりするりと滑り込ませた。「ちよつと待て！」僕は驚愕して叫んだ。「ワインじやなくてウイスキーにする？」「そうじゃない、君のポケットに吃驚したんだよ。一体どんな構造をしているんだ」

「改造したのよ」とA君Vは胸を張った。「どれくらい入るか試してみる？」

最終的にA君Vは、ポケットに十二本ものワインを入れて店を出発した。さすがにコートの腰周りがほんの少し膨らみはしたが、一体あの十二本ものワインは何処へ行ってしまったのだろう、と訝しく思えるほど、A君Vのポケットは優秀だった。しかし、重みだけは誤魔化しようがなかったようで、A君Vは脚の関節を曲げることなく、ぎくしゃくと歩かなければならなかった。その

動きは、昔博物館で見た、十八世紀に作られた木製のからくり人形を思い出させた。

「まるで木偶人形だ」と僕は言った。

「おそらく木偶人形はワイン飲まないでしょうけどね」とA君Vは答えた。

部屋にたどり着くと、A君Vはテーブルに寄りかかって、ポケットから次々とワインの瓶を取り出した。中国に、何も無い空間から金魚鉢を取り出してみせる奇術師がいたが、恐らく彼もA君Vの芸当を見たら舌を巻いたことだろう。たちまちテーブルの上にワインの瓶の密林が出来上がった。僕は台所に行き、夜食の準備をした。突然耐え難い空腹に襲われたためである。(よく考えてみると、僕は夕食を食べておらず、レストランでも黒ビールにナッツを少々口にしただけだった。)虎の子のステーキ用サーロインを取り出して、ホットプレートのスイッチを入れる。僕はリビングに向かって怒鳴る。「ステーキ食べるかい!」「勿論!」程なくして、胃袋を愛撫するかのような、甘美な香りが漂いだす。僕は台所から出ると、突っ張ったような姿勢で椅子に座っているA君Vに(よっぽど重たかったのだろう。持ってやるべきだったと今更ながら後悔した)「ちよつとシャワー浴びてくるから、ステーキを見て」と告げて、浴室に向かった。

十五分後。火照った頬と湿った髪をタオルで撫で付けながら戻ってきた僕の鼻腔に流れ込んできたのは、焦げ臭い風だった。大慌てで僕は台所へ飛んでいった。あれ程までに魅力的だった愛しのサーロインは、汚い炭になっていた。使用方法があるとしたら、クリスマスを待ちわびる北欧の少年が、暖炉に投げ込んで火を強くするのに役立てられるぐらい……

「見といて言っただろう」僕は大いに腹を立てながら(減った腹は立ち易いのである)ホットプレートにへばりついた焦げかすを削げ落とした。「寝てたのか?」

「火を止めに行こうとはしたわよ。でも」とA君Vは許しを請うように言った。「足が動かなかつたの」

「ワインの運びすぎで?それとも飲みすぎで?」

「違うのよ」彼女は疲れ果てた声で言った。「私、ほんとうに人形になっちゃったみたい」

「今度は焦がすなよ」「勿論!」ベーコンの焼ける、素晴らしい香り。あまりにも芳しかったので、僕は自分の頭蓋骨内部の事情を忘れて起き上がった。部屋がぐるぐると回り出して、僕を打ちのめした。僕はそろそろと壁に身を寄せ付けるようにしつっ立ち上がり、数センチ単位で前進してキッチンを目指した。千の天使の、ダンクシュートが決まる。

「ねえ、見てみてよ」誇らしげなA君Vの声と、ベーコンが焼けるパチパチという音(それは昔祖父さんの家で聴いたアナログレコードが立てた音に似ていた)が耳に飛び込んできて、頭の中で反響した。「大声禁止!」と僕は嗚れ声で呟いた。

「だいぶ上手く動けるようになったのよ。やっぱりコツを掴むのが大切ね、ほら」A君Vはさかんに油の撥ねているフライパンを片手に、くるくると回転し出した。「踊りだつてこの通り!」

呆気にとられて僕は(さすがの千の天使も、呆然のあまりバスケを中断したようだ)くるくる回るA君Vを眺め続けた。数秒後には、そのあまりの滑稽さに吹き出し、笑い転げた。とんだ現代舞踏(モダン・ダンス)だ。しかし僕は朝の光に包まれながら踊り続けるA君Vから目を逸らすことも出来ぬまま、四肢の隅々まで染み渡った倦怠に身を委ねていた。A君Vも心からおかし気になっている。A君Vの舞踏に従って世界は踊り、地球も踊り、森羅万象が通り過ぎていく。万物流転。A君Vのフライパンは宇宙を引っ張りながら回っている。万物流転。「なかなかのもんでしょ!」

笑い転げながら、A君Vが言う。そんな木偶人形の笑い声を聞いていると、柔らかな朝の光が一層心地よく感じられ、今日は割合と素敵な日曜日になるのかもしれないな、という気がしてならなかった。

アシッド・クイーン

私は階下のバーで安いワインを飲んでいる。人形の物語を書き上げた後で、荷造りをし、風呂に入り、少しだけ満ち足りた気分になった。喉の痛みも、いくぶん和らいだようである。幸福な気分で見りにつけるよう、こうして醜態した葡萄を摂取している。私は明日になったら此処を出て、親戚の農場に向かうのだ。新しい環境で、新しい小説を！一人での乾杯は実に気が滅入る。

バーテンは少し太めの中国人である。何処かで見たことのある顔だ。私が記憶の網を手繰り寄せ、無関係な雑魚を捨てているところに、ドアが開き、一人の女性が入ってきた。

彼女は腰がひどく細いナイトドレスを着ていた。目じりの少し下った可愛い娘だったが、猥雑さの欠片も感じさせなかった。何よりも彼女の歩き方が私を不安にさせた。彼女はまるでそこに地面が存在していないかのような足取りで歩いていった。彼女の目は何処を見つめているのかわからなかった。ことによると、何処も見つめていなかったのかもしれない。

彼女は私のすぐそばに座った(何故なら、そこしか空いていなかったからである)。彼女はバーテンに向けていくつ古典的な(ウィットに富んだと思われる)ジョークを発してみたが(お愛想のつもりだったのだろう)、忙しいバーテンは耳を貸そうともしていなかった。(ここで改めてバーテンを見て、私は彼が誰に似ているのかにようやくと気がついた)。バーテンは李白にそっくりだったのである。(相手にされなかった彼女は多少傷ついたような面持ちでウィット合戦を中止し、矛先を私に向けた。「こんばんは」

作戦を変更して俗っぽい路線を狙ったのか、彼女はひきつった顔で、いくつか猥雑な冗談を口にして見せたが、私はどうも上手く切り返してやることが出来ずにいた。何故なら彼女は前述したとおり、全く猥雑さを感じさせない女性だったので、彼女の薄っぺらな唇から滑り出てくるダーティ・ジョークは、掴みどころもなく宙で消え去ってしまったからである。次第に私はワインの酔いが回って何もかもが面倒くさく感じられ、彼女の冗談も愛想悪く聞き流していた。しかし、しまいに彼女が独特なおいのする煙草の息とともに吐き出した台詞は、私の心を捉えた。「私は身長が10センチなの」

「なんだって？」私は思わずワイングラスを取り落としそうになり、激しく咳き込んだ。「時々10メートルを越えることもあるわよ」

「僕の見たところでは、君は160センチってところだけだな」

「公式には158」と言って彼女は肩をすくめた。「でもそんな数字には興味が無いわ。退屈で死にそうな数値よ！」

「だから10センチになったり、10メートルになったりするわけか」
「そう。魔法の粒を飲んでね」

私は、いささか彼女が安易な方法で変身をしていることに軽い失望を覚えた。と同時に、彼女のあの歩き方の原因や、彼女の息に感じた「独特な」煙草の匂いの正体もわかってしまった。「なんだ、くだらない。君は危ない錠剤だの巻きたバコだので遊んでるだけなのか」
「あら」気分を害したように、彼女が言った。「そのくだらない遊び道具を使って、私がどれだけ素敵な夢を見ているかご存知？脳が痺れる時の、あの何ともいえない快楽をご存知？」

「ご存じないよ。」私は肩をすくめた。「ただの夢見がちな女の子かと思ってた」

「あら。私はただの夢見がちな女の子よ。でも、あなたの夢は多分見ないだろうけど。H A H A H A H A !」

「それはともかく」やや無然として、私はワイングラスに手を伸ばした。「ねえ、君は、どうしてそんな遊びを覚えたんだい？」

「それを尋ねるなら、私にも質問させてよ」と彼女は言った。「ねえ、あなたは、どうしてワイン飲むことなんか覚えたの？」そしてしばらく考えてから、付け加えた。「ねえ、あなたは、どうして息することなんかおぼえたの？」

それから彼女は私に、楽しい夢のいくつかを語ってくれた。シナモンの代わりに、アシッドを「2滴シルクテューに垂らしてみた朝は、テーブルの上のスモモが木星に見えたこと。涙が止まらない寂しい夜は、素敵なおいのする液体を嗅いで、手のひらサイズのリオのカーニバルや大名行列が彼女の机にやって来るのを見物して過ごすこと。

楽しくない夢もある。

「時々、廢人になって死んだ自分自身を幻視することがあるのよ。腕に注射針を憑きたてたまんまで腐乱している、自分の死体をね。恐ろしくてたまらない、でもどうしても、私は目を逸らせられないの。私は死んだ私を見つめて、いつも言いようの無い哀しい気分がさいなまれる。私はこの人を救えなかったんだ、って思ってる。」

(彼女は不思議な香りの溜息をつく)「私はどうしたらいいかわからない。私の頭はもう、ものを考えることには使えないの。せいぜい、夢を見ることにしか使えないのよ。ああ、私は幸せなのか不幸せなのか！そんなこと、わかりやしないわよ」

もしこれが小説だったら、我々はこの退屈な掛け合い漫才の後で彼女の部屋に舞台を移し、「戦交えるところであろう。しかし、残念ながらそうはならなかった。彼女はこんな風にして退場したのである。」

「そろそろ行かなくちゃ。」彼女が出し抜けに立ち上がったので、私は拍子抜けして叫んだ。

「どうしたんだい？」

「約束の時間なのよ」彼女は謳うように言った。「今晚一緒に過ごす人との」

先客か。私は奇妙に損した気分になって、「そうかい」と言って、ワインを煽った。

「楽しかったわ。」彼女は踊るように別れの仕草をした。「お休みなさい」

彼女は私の傍らに伝票を残していったので、私は一段と損した気分になって、ワインのお代わりを注文した。また、忌々しい咳が始まった。あの子の相手ってどんな奴なのかな、と私はそっと頭をもたげて彼女の背中を目で追った。

彼女はドアのところ立って、しばらく宙を見つめていた。ふいに彼女は満面の笑みを浮かべ、何も無い空間に向かって優雅にお辞儀を一つした。すると、たちまちにして小さなパレードが現われ出て、その途端に彼女の背がすると縮み、見えなくなった。

あまりのことに私が呆気に取られていると、10センチになった彼女は、華麗な装飾を施した馬車のひとつに乗り込み、私に向かってハンカチを振った。そして小さなパレードは、物凄いスピードで私の視界を駆け抜けて行った。

第二章 鎮守の森

むかし、むかし、そのむかし、とても
たのしい ほんのほん、ほんのほんの
うさぎもうさぎが、
みちを、やってきました。

—ジキターターメ・ジキターメ

吐いては喰い

吐いては喰いする

牛のすがた。

夏の日ざしに照らされた

草いきれの昼下がり。

四つの胃袋を

回転する地球の上で支えながら

吐いては喰い

吐いては喰いする

牛のすがた。

窓の隙間から新鮮な太陽光線が差し込んで来て、五時に目が覚めた。いつもならまだ、浅い夢の中で遊んでいる時間である。私はのろのろと起き上がり、寝巻きを脱ぎ捨てた。空気が素晴らしく綺麗であることに、今更ながら気がついた。ひりひりとしていた喉の奥も、ようやくと潤いを取り戻しつつある。さあ、と私は伸びを一つした。小説の続きを書こうか。乱れた髪をクシヤクシヤに掻き回しながら、パソコンを立ち上げたが、何も湧き出てくるものがなかった。環境は安ホテルと比べ格段によいことは当然だが、とにかく田舎に居さえすれば幾らでも文章が書ける、というわけでもないのだ。今朝のように、こんなに清々しい気分であるのに、一字も書けない時もある。(いや、清々しい気分だからこそ、書けないのかもしれないが)そんな時は無理に意地を張ろうとはせず、牛の世話でもするのが良い。それでは、と私は立ち上がった。外へ出よう。

想像していたよりも、ずっと小ぢんまりとした牧場であった。私は凍りつくように冷たい水で顔を洗い、うがいを済ませ、そして牛舎に向かった。牛舎にはこの家の長男がおり、緩慢な動作で作業をしていた。「お早うございます！」私は彼の背中に向かって声を投げかけた。

彼は暫くの間、落ち着かない様子で辺りを見回していた。私がもう一度「お早うございます」と呼びかけると、ようやくと私の位置がわかったらしく、振り向いて会釈をした。

「いい天気ですね」と私はつとめて明るく言った。

「ええ」彼は漫然と返事をした。それっきり彼は(私の存在を全く無視して)作業に戻ってしまった。取り付く島もない。私はもう一度(今度はやや勢いに欠ける声で)「あの、すいません」と呼びかけた。

三度ぐらい「あの、すいません」と呼びかけた後で、ようやくと彼は「はい、なんですか」と答えて振り返った。「ちよっとお手伝いをさせてもらいたいんですが」と僕は(すっかり勢いをなくした声で)尋ねた。

「何ですか」

「あの、ちよっとお手伝いをしたいんですけどー」

「—何のです？」

「牛の世話をね、僕もちよつとやってみたいなあと思つて」私は、気紛れを起こして此処にやつて来たことを後悔していた。長男は顔をしかめ、懸命に私が言いたいのかを理解しようと努めているようだった。百年にも感じられる長い長い空白の後で、彼は（よくわからない奴だ、とても言いたげな表情をして）「じゃあ、こつち来てください」と言った。

牛舎の中は熱を帯びた牛の体臭で満ち満ちていた。私は思わずむせ返った。牛の濡れた鼻の先から漏れるおくびは、メタンが大量に含まれており、地球温暖化の要因の一つになると聞いたことがある。どうも本当らしいな、と私は重たい空気に押し潰されかけながら思った、この、とてつもなく息苦しく重たい空気、地球の温度を上げるのに一役買っていたとしてもおかしくない。

「それじゃあ、これで」と長男は私に、巨大なフォークのような器具を渡した。「干草を掃除してください」

牛の背中と背中の間をすり抜けるようにして、私は草を集めて回った。長男は、私が汚れた草を片付けている間、牛たちに新しい草を供給している。牛たちは長男が撒いた草を食み、四つの胃袋に行き渡らせている。

牛の囁き声が聞こえる。「見慣れない男だわ」「何をしに来たのよ」「さあね。知ったこつちやないわ」「ずいぶん顔色が悪いわね」「あのウスノロ（＝長男）とおんなじ、間抜けな顔してるわね」「そりゃニンゲンだもの、愚鈍なのは生まれつきよ」「あんなに魯鈍なのに、生きてて楽しいのかしら」「どうなのかしら。」「人生の意味なんか、考えたこともないでしょうね！」「そりゃそうよ、ニンゲンは哲学的思考ができる動物じゃあないわ。特技と云えば、傲慢になることと恩を忘れることだけ・・・」

牛舎の中が片付くと、次は乳搾りである。長男は何度もしくじりながら、牛たちを一列に整列させた。牛たちの乳房はミルクで肥大しきっており、今にも破裂しそうだった。長男は牛の乳首を掴み、ゆっくりと揉みしだいた。たちまちバケツの中が恵みの乳で溢れた。私は、貯蔵プールをなみなみと満たした生乳の美しさに陶然としていた。ロマンチックな処女雪の白さですらも、この純粋で濃厚な輝きの足元にも及ばないことだろう。私は唾が飛んだら困るので必死に咳を我慢しつつ、長男が、「どうです、絞りましたの牛乳を一杯いかがですか」と勧めてくれないだろうか、と祈るような気分で考えていた。しかし、長男は私の横に棒杭のように直立したなり、口を半開きにしたままで黙り込んでいた。

「あの」私は痺れを切らして言った。「美味そうですね！」

（十二秒の空白）

「は」と長男。「何がです」

「この絞りたて牛乳ですよ」

（五秒）

「消毒していないから、まだ売りものにはなりませんかね」

長男はのろのろと家に向かって歩き始めた。私はおあづけを指示された犬のごとく項垂れた。仕方がない、手伝いを申し出たのは私なのだから、報酬を要求することは図々しすぎることだ。

（しかし私は結局、この牧場で採れた牛乳を最後まで口にすることが出来なかった。この家の人間にとっては、牛乳はあくまで「売り物」であり、自らが消費することなど想像も

つかない愚挙だったのだろう。)

2

近い将来に、人口がゼロになってしまおうであろうこの村の救いようの無い倦怠の空気が、私をじわりじわりと蝕みつつあった。田舎に対して私が漠然と抱いていた美しい幻想は、気がついた時には空虚な音を立てて解体しきっていた。私は新鮮な空気と水を楽しむ一方で、あれほど嫌悪していた安ホテルでの生活を、懐古趣味的に思い出すようになっていた。

私のメランコリイに一層拍車をかけたのが、この牧場に住む私の遠縁にあたる一族である。到着してすぐ、私はこの一族にあまり歓迎されていないことに気がついた。しかしその時点での私は、気にすることは無い、そのうち打ち解けられるさとオプチミスティックに考えていた。一緒に牛の世話をするなどして、私なりにコミュニケーションを取ろうと努力しもした(とは言え、そうした出しゃばりな奉仕活動は、向こうにしてみればいい迷惑だったろうと思うが)。しかし今の時点で考えてみるに、私が彼らと親しくなることはほとんど絶望的だ。仕方の無いことである。人類はみな兄弟のはずだが、一切の理屈に関係なく、絶対に仲良くなれない兄弟は必ず存在するものなのだ。

先にも述べたが、私には他に二人、牧場を経営している知人がいて、彼らの家には何度も泊まりに行っている。それは本当に素晴らしい休暇の過ごし方であった。新しい場所に行ってみようなどと考えずに、大人しくいつも通り彼らの所へ行けばよかった、と私は今更ながら後悔した。彼らとこの一家には、明確な差異が存在した。前者は私同様、牛と田舎、そして農場を愛していた。後者は、牛と田舎、そして農場を嫌悪しきっていた。

私は、この一家との生活が日に日に重荷になって来ていた。何よりも食堂が憂鬱の種だった。立派な部屋だったが、その立派さ故に今では救いようも無く惨めな姿に変わり果てていた。というのも、この食堂は通常の家庭のそれに比して、広々としていた。(この広さが、この食堂が立派たる所以である。)しかし、その広さを大いに活用しようと考えたのか、この家に暮らす人たちは、壊れたピアノだの、古くなったソファだの、電化製品の入っていた段ボール箱だの、買ったものの使わなかった健康器具だのを置きまくり、せっかくの食堂は粗大ゴミ置き場のような有様になっていたのである。今ではこのゴミたちのせいで食堂はすっかり狭くなり、微妙な均衡を保って重なり合っている廃品の山は触れれば倒壊することは確実だった。

「君は文学をやっているんだね」

陰鬱な夕食の時間、クチャクチャと魚の骨をしゃぶりながら、祖父が言った。彼は私が傍にいる時は、必ずこの質問を投げかけてくる。理由は単純明快、私を愚弄するきっかけを生み出すためである。

私が「はあ」と返事をする、彼は得意げに胸を張り、口をへの字に捻じ曲げる。軽蔑の眼差しを変色した目の中に精一杯湛え、彼は鼻から笑い声を漏らす。そして、ニヒリステイックな態度を保つことに注意を払いつつ、発言する。「文学なんてものをやってるようじやあ、だめだよ」

「はあ、そうですか」私は、(私に要求されている、『人生経験に富んだ魅力的な老人の話

を拝聴する若者』という役柄を忠実に演じるべく）大げさな身振りと共に答える。

「そうとも」老人は満足げだ。「文学なんてものは、なんの役にも立たない。文学なんてもので、世のため人のためになるような仕事がね、できるわけがない。君もね、何不自由なく育って、せっかくご立派な大学まで行って、なんでそんなくだらないモノを勉強しちまったのかねえ」彼は鼻毛をいじくりながら続ける。「君の親御さんはどんな教育をしたのかねえ！甘やかしたんだな、文学をやりたくないなんていう息子、わたしなら性根を叩きなおすところだがな！！」

私は、私の斜め前で、夢見るような目つきで大根の漬物を凝視している長男をちらと見た。おじいさん、自分の孫の性根も叩き直しておくべきでしたな、と私は心の中でつぶやいた。

とは言え、この老人の言は正しい。仰る通り、文学は不毛なものなのだろう。我々の人生が不毛であるのと同様に――。

「まあ、自慢じゃないがわたしなんぞ、常日頃からこの国の未来についてね、実に真剣に考えているのだよ。言わば、憂国の士という奴だね（と言って彼は笑う）。君ももつとね、これからの社会のあり方についてね、よく考えておくべきだよ、文学なんてやってる暇があったらね（と言って彼は笑う）。なにしろ君の世代の若者が、これからの世界をね、担っていくんだからね。しかし心配だなあ、なんだか、これからやって来る時代はどれだけ酷いものになるのかねえ（心配することはない。何故なら彼は、年齢の面から考察すると、私のような無能な若者が担う時代が到来する前に亡くなるだろうからである）」

「おじいさんは憂国の士、ですか」私は人懐っこい笑い（苦笑いに砂糖をまぶした）を浮かべて言う。

「そうとも。わたしは実に真剣にね、この国の行方を憂いているんだ。わたしはね、毎日欠かさず新聞に投書をね、しているんだよ。三紙の新聞にね、毎日欠かさず投書をしているんだよ！（これは、夕食の席上で毎回披露される彼の一番の自慢の種である。もういい加減飽きやしないか、と思うのだが、彼はいつだってこれ以上ないぐらい顔を誇らしげに輝かせ、自らの偉業を叫ぶ。）社会の外れたタガをね、正すためにね。ブン屋の連中はわたしに一目置いているよ。言わば、わたしはご意見番でね」

そして彼は、ご意見番という言葉が持つ荘厳な響きに酔い痴れる。その陶酔した表情はまるで、初体験を済ませた後で恋人に添い寝をしている乙女の顔のようだ。こんな幸福な顔つきのできる老人に、いつかは私もなってみたいと思う。

「ところで君、わたしの投書を見てみるかね」老人はうきうきとした声で、私に話しかける。（とても、軽蔑する相手に対しての態度とは思えない）

「ええ、是非見てみたいですよ」私は目を無理やりに輝かせて答える。
祖父は食べ散らかした魚、演説が続くうちに冷め切ってしまった味噌汁、茶碗の底に残ったご飯を打つ遣って、立ち上がる。わたしは自分の投書が載った号の新聞はね、全部きちんとファイルして保存していてね、そのファイルはいつか市の図書館に寄贈するつもりだね、社会に役立つものだからね、と老人は切れ目なくしゃべり続けながら、曲がりきった腰を杖で支えて、自室まで続く長い道のりを歩き始める。

「ほんとに、すみませんねえ」疲れきった母親が、私の茶碗にお代わりを盛り付けながらお辞儀を繰り返す。「くだらないことばかり言って。おじいさん、寂しくてしょうがない

んですよ。あなたにお話を聞いてもらえて、もう舞い上がっちゃってるんですよ」

「ねえ、お兄さん」次男坊が私に話しかける。祖父が居ない間に、私と卑猥な話をしようという算段だ。「女の子と寝たりしたことある？」おやおや、何の婉曲もなく聞いて来たもんだ。

「これ！」母がたしなめるが、疲れきった彼女の警告は何の意味も成さない。お年頃である次男坊の頭の中は、異性への興味ではち切れんばかりなのだ。彼は、何の感慨もなく見てきた世界が、突然に今までとは全く異なる意味合いと色合いをさらけ出し、高速で回転し出したことに驚き、興奮が醒めずにいるのだ。しかし彼は、眼前に展開している新世界に、まだ足を踏み出せずにいる。せいぜい下品な質問を母親や私にぶついたり、学校の仲間と秘密の話を語り合ったり、隣町までいかがわしい本を買いに行くことが、彼の精一杯の新世界との接し方なのだ。

私は乾いた笑い声を立て、そつと彼に耳打ちする。「後でゆっくり話してやるよ」

次男坊は目を輝かしている。しかし、可哀想だが、これは嘘である。次男坊は、私がした秘密の話を、そつくりそのまま（もしくは、少々の脚色を加えて）他の家族に告げるに違いないからである。

次男はいくつか、マセた話を私のために披露してくれた。彼の友人たちが、どれほどよく女の子に熟知しているか、どれほど見事に女遊びをするかについてのレポート。（言外に、彼は自分もそうした友人たちと同類のやり手であることを匂わせようとしている。）「××なんか」次男坊は叫ぶ。「小三の時が初めてだったってさ！」

「そいつは早いなあ」私は笑って言った。「信じられないや」

「〇〇はもう三十人も制覇したってさ！」

「その子もすごいなあ」私は母の方を向いて、おどけて言った。「心配ですねえ、彼のお友達は誰も彼も、相当なプレイボーイですねえ」

「本当にもう、私は心配で心配で・・・」母は陰気な横顔を見せて、声を詰まらせてしまった。可哀想に、世界中でただ一人、彼女だけが子供らの法螺を信じている。

次男坊は女の子の話を飽きると、サッカーの話を延々と出した。私はサッカーの事は全然知らないが、次男坊は私が聞いていようといまいと喋り続ける。母が、溜息をついて言う。

「この子もそのうち受験でしょう。どうなるのかしら」

「まあ、本人の意思を尊重することですな」私は一般論を言った。

「この市の学校に行かせるべきか、それとも思い切って、都市部の学校にやるか。やはり都市部とここらでは教育水準がずいぶん違うといえますねえ、この子の将来のことを考えたらやっぱり、多少の無理をしても都市部へやったほうがいいですかねえ・・・。でも都市部にやらしたら、遠いですし、学費は高いですし、この子に一人暮らしができるのかも心配で・・・悪い友達ができやしないか・・・」

「ちゃんとした寮に入れば大丈夫ですよ」私は少々彼女の長話に辟易しながら答えた。「そんなもんですかねえ。それに、やっぱり都市部はレベルが高いですから、入学試験も難しく。この子の成績じゃあ難しいんです。塾に行かせなきゃならないでしょうか。でもこの辺りにはいい塾がなくて。隣町には評判のいい塾があるんですけど、そこに通わせるとなるとお金もかかるし、うちにはそんな余裕もないし、でもこの子の将来のことを考

えたらやつぱり、多少の無理をしてでも・・・」

と、ここで長女（読者諸君は、ここで唐突に新たな人物が登場したことにはささかの戸惑いを覚えられることであろう。ご参考までに申し上げておくと、今まで食堂にいた人物は私、祖父、母、長男、次男、長女の6人であったのである。では何故これまで一切、長女についての記述がなかったのかと言うと、彼女は誰とも話さず、ひとり黙々と食事をしており、これといって特に描写する余地が無かったのである）が椅子をガタリと乱暴に押しつけて立ち上がり、「ご馳走様」と言うなり食堂を飛び出していった。飛び出す前に、長女は私に向けて敵意に満ちた眼差しを向けた。その目に籠められた憎悪の念は、私を震え上がらせるのに十分だった。

痩せぎすの彼女の影が消えた後で、私はこっそりと次男坊の耳に口を寄せ小声で尋ねた。

「君の姉さん、なにか怒ってるのかい？」

「うん」と次男坊も小声で答えた。「たぶん兄さんのことが嫌いなんだよ。」

私が少なからず動揺しているのを見て、次男坊は付け足した。「気にしなくていいと思うよ。姉貴は、たいていのものは滅茶苦茶に嫌ってるんだ。意味もなくね。俺だってどれだけ嫌われてるかわかったもんじやないよ！」

そしてまた、サッカーの話が始まる。母親は溜息をついて、彼を眺めながら言った。

「この子もいずれ、この町を出て行っちゃうんですかねえ。私はねえ、この子にはねえ、外の世界で出世してほしいと思ってるんです。私らみんな、この寂しい寂しい田舎でただ生きて死んでいくだけ、そういう人生でしょう。この子は違う世界に生きさせてやりたいです。でもその反面、ここに居て農業してほしい気もしますねえ。この子（長男）はこの通り牧場を継いだんですけど、嫁の来てがなくなかなくて（ここで長男は少し嫌そうな顔つきをした）、それに、牧場の経営も年々厳しくなるし・・・村のみんなはどんどん出て行きます。それを見ると、やつぱり取り残された気分ですばいで・・・」

と、そこへ祖父が大きなスクラップ・ブックを何冊も抱えて戻ってきた。そして、慌しい手つきで食卓の上の食器を押しつけて、それを広げた。老人の顔には赤みが差していた。彼は息子嫁にビールを所望し（彼と、私の分である）、朗々とした声で説明を開始した。

私は、永遠と続くありふれた時事批評を適当に聞き流しながら、この老人について思いを巡らせた。誰からも愛されず、痛む腰をさすりながら、せつせと新聞投書を書いている老人の姿。どこまでも一人ぼっちな、哀しい世捨て人の後姿。

夕暮れになると激しさを増す咳に閉口しながら部屋に戻る途中、長女の部屋から金切り声が出た。続いて、何かを投げたり、蹴飛ばしたりする音も聞こえて来た。彼女はああやって世界と折り合いをつけているんだ、と私は思った。そして、殺される前に帰らないと、とも思った。

ある日の午後、私は町の郊外に散策に出かけた。空は相変わらずの青色だった。私は畦道を伝って田園地帯の中を歩き回り、朽ち果てかけた納屋だの、放置されている半壊したトラクターだの、牧草をいっばいにつめた白い袋の山だのを眺めて過ごした。いくら歩いても、何処にもたどり着けそうになかった。時間の流れすらもが止まっているように感じた。赤や青のペンキで塗られた家々の群れ、新興の団地を抜けると、景色は一層寂しさを増していた。一体何を栽培しているというのだろうか、砂埃ばかりが巻き上がっている荒れ果てた畑が広がり、絶望した表情の案山子がたらめに地面から生えている。家々は遙か遠くの山の裾に点々とあるのみ、今私が歩いている田舎道は人気と言うものがなかった。いったい私の前に、この道を歩いた人間は一人でもいたのだろうか。そしてこれから先、この道を通る人間は一人でもいるのだろうか。そろそろ引き返すかと思つたところへ、ぱらぱらと雨が降ってきた。

雨。私は空を見上げた。馬鹿馬鹿しいほど青かった。狐の嫁入りか。あつと言う間に雨はその激しさを増し、私の肩や頭を乱暴に殴りつけた。これは困つたと、雨宿りできそうな場所を探して辺りを見回すと、二百メートルばかり前方に小さな森が見えた。私はその森をめがけて駆け出した。

森の中に一歩足を踏み入れると、あれだけ激しく降っていた雨は、嘘のようにぴたりと止んでしまった。訝しく思つて外に出てみると、先刻と変わらぬ激しい雨。しかし引き返した森の中は、全く雨の気配すらしない。どうも、森の入り口を境として、森の外は雨、森の中は晴れになっているらしかった。それはまるで、目に見えない巨大な壁に仕切られているかのようだった。

私は森の奥へと歩みを進めた。見上げると、木々の枝葉の隙間から、底抜けに青い空が見えた。得体の知れぬ静けさが辺りに漂っていた。風すらもが凪いで、物音一つ立たなかった。自分の足音すらもが消失していた。私は言いようのない恐ろしさと懐かしさを感じながら、歩き続けた。

ある一本の木の根元に、大きな石が寄りかかっていた。近づいてみるとそれは石ではなく、人間だった。虚脱した一人の若者が、木を己の支えとして座り込んでいたのである。彼は痛々しいほどにやせ細っており、伸びた前髪が顔を覆い隠していた。彼は喻えようも無く美しかった。しかし、袖口から覗く腕には、何箇所もの切り傷が見えた。彼の投げ出された足―擦り切れたぼろ靴に包まれた足の先には、血がこびりついて錆付いたナイフが転がっていた。しかし一番私の目に焼きついたものは、彼が羽織っていた真っ黒いジャケットであった。その色は子供の頃、夜明け前に突然目を覚ましてしまった時に目にした、救いようのない闇の色とそっくりだった。私は彼の目を見ようとしたが、何も見えなかった。なぜだか急に、哀しさに襲われて、私はそこを立ち去った。

木々の間をすり抜けて歩くうち、私はこの森の巨大な静けさをかいくぐって聞こえてくる、かすかな水音を耳にした。知らず知らずのうちに私はその音のする方に足を向けていた。水音は、私の耳よりもむしろ心臓にその響きを伝えていた。腐って倒れた木をまたぎ、昔作られたらしい石垣をよじ登ったところで私の足元にあつたはずの地面は突如喪失し、私は急な斜面をずるずるとすべり落ちた。私は斜面の下で、生れ落ちたばかりの赤子のように横たわって、音の正体を突き止めるべく神経を研ぎ澄ました。直にそれはわかった。私は起き上がり、その方向にむかった。それは水が湧く音だった。

偶然にここを通りかかる、渴きを癒したがっている旅人のために設えたのだろうか、水が湧き

出ている場所は木の囲いで仕切られており、ひしゃくが置かれていた。私は流れ落ちてくる水に手をかざした。心地よい冷たさが私の手のひらの上をすべっていった。生き返る心地がした。

と、何か人の気配のようなものを感じて振り返ると、一人の少女が歩いてくるのが見えた。私は突然のことに少々驚きながら「今日は」と言った。少女は微笑んで私に会釈を返した。そしてぎこちなくひしゃくを手にとると水をすくい、ゆっくりと飲んだ。「この辺りに住んでらっしゃるんですか。」と私は少女に尋ねた。「ええ。私はこの森に住んでいるものです」とひしゃくを置いた少女は答えた。

「この森に、ですか」私は少し面食らって言った。

「ええ。私はずっとこの森の中に住んでいるのです。」と少女は言った。

肌の透き通るように白い、華奢な少女だった。彼女は純白のゆったりとした着物に身を包み、左手に何か布のようなものを抱えていた。

「私はこの森で幸せに暮らすことだけを、祈り続けていたのです。」

静かな森の中を、少女の透き通った声を通り抜けてゆく。

「私はこの森である方と幸せに暮らすことだけが夢だったのです。」少女は続けた。「その方は優しい方でした。しかし哀しい方でした。私はその哀しさを埋めてやることができなかつたのです」ふいに私は、彼女が左手に持っているものが、見覚えのある真つ黒いジャケットであることに気がついた。

「その方が死んでしまった時、私はこの鎮守の森の中で、永遠の迷子になってしまったように感じました。私は絶望しました。私はこの森で一番高い木のとっぺんまで登り、そして手を離しました。しかし、私は救われなかつたのです」彼女は、左手に持ったジャケットに目を落としました。「私はようやくと気付きました。私はその方と真に一つになり、夢見た幸福を体現するまでは救われないのだと。」

少女は顔を上げ、私を見た。「さぞ奇妙に思われたことでしょう。初対面のあなたに、長々と身の上話を語るなんて！でも、それは是非ともあなたにいきさつを知って欲しかったからなのです。そして、私の願いを聞いて欲しかったのです。」

どうか、どうかこの私の持っているジャケットを、私に着せてください。木から落ちて以来、私の両腕は不自由で、一人ではこれを着ることができなかつたのです。でも、私があの方とひとつになるためには、是非ともあの方の残した形見であるこの服を着なければなりません。だから私はずっとこの森の中で、私がこの服を着るのを手伝ってくださいる人を待っていたのです。」

言われるままに私は彼女から黒いジャケットを受け取り、彼女に羽織らせた。

静かな森の中に、風が舞い起こった。

少女の透き通った肌が燃え上がるのが見えた。彼女は、不自由だった両腕をゆっくりと空に掲げ、そして舞い始めた。風が、彼女が羽織った黒いジャケットを翻し、木漏れ陽が彼女の胸を貫いた。今、少女は夢でしかなかった幸福、本来あるべきだった幸福を、急ぎ足で駆け抜けているのだ―そんな風に思った。静かに吹き抜ける風を全身に受けながら、少女は舞い続けた。時が止まったかのようだった。世界と乖離した森の真ん中での、祈りにも似た儀式。邂逅―。そして少女は水の湧き出る場所へ歩み寄り、その囲いの中を覗きこんだ。風が凧いだ。少女は、かき消すようにいなくなつた。

しばらくの間、私は木々の間に立ち尽くしていた。ややあつて、私も同じように、水の湧き出る場所に歩み寄つた。そして、囲いの中を覗き込んでみた。

囲いの中には、雲ひとつない青空が広がっていた。ただ一つ不思議だったのは、その青空に無数の星々が散らばり、瞬いていたことだった。

私は天を仰いだ。木々の間から、囲いの中とおなじ空が見えた。雲ひとつない真昼の青空、そこに降るような星々が散らばり、瞬いていた。いわれのない胸の高まりが、私をとらえ、離そうとしなかった。覚めることのない静かな興奮が、私の体の中に渦巻いていた。

と、そこにヒヨドリの鳴き声があった。私はその甲高い音を聞いて、はっと我に返った。

もしあの時ヒヨドリが鳴かなかったら、私は永遠にあの森から出られなくなったことだろう。そんな気がした。

少し好転していた病気が、再び悪化しつつあった。私は腫れあがった気管支を持て余し、部屋に寝ていることが多くなつた。夢の中で、肥大した牛の乳房を思い出した。牧場の者は、最初の二日だけ食事を差し入れてくれた。しかし三日目からはそれも無くなつた。(もつとも、私は食欲が皆無だったので、別段憤りも嘆きもしなかつたが。)完璧に空っぽになつて萎れた胃袋を皮下脂肪の上からさすりながら、私はとりとめもなく物思いに耽つた。時折、何のために私はここに来たのだろう、と思ひながら。新鮮な空気の中で二、三日静養すれば腫れもひくだろう、そう高を括っていたのである。私はいつだつて漫然と休息することで風邪を治してきたし、殆ど医者に掛からないでここ数年をやり過ごしてきた。しかし、今回は少々勝手が違つた。私は喉の奥に走る激痛に耐えながら日々を過ごすようになっていた。ひよつとするとこれは、と私はすっかり弱気になりながら思つた、少々厄介な状況かもしれない。

ある夜のことだつた。私はいつものように喉の奥の激痛と、寝入り際に決まつて始まる喘息のような発作に苦しんでいた。汗だくになつて、ようよう満足がいくまで咳をし終えた時、ドタドタと部屋の外を誰かが走つていく物音がした。それとともに「火事だ、火事だ！」という声は何処から響いてきた。咳のせいで過呼吸になつてしまつた私は、頭が朦朧としていて、咄嗟には何をすべきなのかわからなかつた。しかし暫くしてサイレンの音が聞こえた時には、さすがの呆けた私も危険を感じ、寝巻き姿のまま外に(非常に危なげな足取りで)駆け出した。私が表に出た時には、(長女を除く)家族全員が一行に並んで、火事を見物していた。

私はてつきり自分のいる家が火事を出したと思つていたのだが、燃えているのは牛舎の横に建っている隣人の家だつた。私はしばらく喉の痛みも忘れ、この惨事を眺めていた。油か何かに引火したためか、家は轟々たる音を立てて炎を吹き上げていた。時々、ぼそつという音を立てて、柱や壁が崩れ落ちるのが分かつた。到着した消防隊が、ホースを振り回して消火活動を展開していたが、作業は難航していた。その家の主人は、燃え盛る家の前に座り込んだなり、虚脱していた。(消防員は彼を庇つて抱き起こし、安全な場所に連れて行かなければならなかつた。)そのすぐ横にある牛舎の中では、牛たちが炎の熱と眩い光に恐れおののいて、右へ左へ走り回つていた。ひきつった咆哮と重たい足音が、私の立つている場所まで地鳴りのように響いて来た。私は、あの出鱈目に揺れ動く炎の触手が、牛舎の屋根を捉えやしないかと思ひ、気が気ではなかつた。一家のうちで、母親が私と同じ感想を抱いているらしく、隣に立っている長男に「燃え移りやしないかしら、ねえ」と幾度も幾度も繰り返して尋ねていた。しかし長男は何の思考もしないままにただぼんやりと火事を眺めており、母親の心配事に対しては軽く相槌を打つただけだつた。次男は荒れ狂う炎に目を見張り、興奮の余りびよんびよんと飛び跳ねていた。「すげえよ！すごい燃えてるよ！ねえ、燃え移るかなあ、燃え移つたらどうするの！！」

祖父は怒り狂つてこの情景を見ていた。彼もまた長男と同じく、隣家の炎が牛舎に燃え移るのではないかという(ごく当たり前の)推測を立てられずにいた。老人の心配事はその他にあつた。(彼は走り回る牛たちを見て、すっかり逆上してしまつたのである。)
「なんてこつた、馬鹿！あんなに動揺させちまつたら、牛は**当分乳を出しやしないぞ！**あいつらは繊細な生き物なんだ、わかつてるのか！(彼は私の方を向いて、牛がいかに神経の細かい動物であるかということをととうと説明した。そして、昔市がこの村に鉄道を通す予定を立てた際に、彼は『汽車の音に驚いて牛が乳を出さなくなつては困る』という訴えを執拗に繰り返し、ついにその計画を潰すことに

成功したという栄光の思い出をまくし立てた。」

そこに風が吹き、大量のビーフ・ステーキが完成した。

第三章 A面の終わり

その他ぐぐぐ。

—カート・ヴォネガット

のんきな患者

牛は一頭も助からなかった。最早牧場には、私のような遊民を滞在させておく余裕は（経済的にも精神的にも）皆無だった。火事の翌日、私はさつさと荷造りを済ませ、疲弊した楽園を誰に見送られることも無く後にした。喉の痛みは耐えがたく、胸の苦しさも尋常ではなかった。何とか駅まで這うように歩いて行き、列車を待つてベンチに腰掛けている時、悪寒までが襲ってきた。上の歯と下の歯が激しくぶつかり合い、ジルバを踊っているのが感じられた。もう限界だ。私は出発を延期することにして、駅員に最寄の病院を尋ねた。

病院は駅からバスで三十分走った処にあった。バスが走行距離を増やしていくのに比例して、景色はどんどん哀愁を帯びていった。私は熱ゆえの寒さという、パラドキシカルな悪夢に蝕まれつつある肉体を慰めようと、ひんやりとして心地よい窓ガラスに左頬を押し当てた。時折、アスファルトで舗装された畦道や、折れ曲がったガードレール、大破したトラクターの残骸などが、行き詰るような緑の大自然の中に転がっているのが目に付いた。気の滅入る光景だった。一体どんな病院があるのやら、と私は不安に満ちた気分で、それを眺め続けていた。

私の不安は超現実的な裏切られ方をした。気の滅入る車窓の外に、光り輝く近代的なビルディングの一団が出現した。何だろうあれは、と思っていると、バスは速度を徐々に落とし、その前に停車した。停留所は「病院前」という表示を出していた。

そんなわけで到着したのは、腰が抜けるほど立派な総合病院であった。清潔感溢れる白い壁、モダンな建築、広い駐車場。その別棟にはサナトリウムのような施設もあり、バブルの勢いで作った遊園地のような趣があった。それはいいのだが、何故こんなにも寂しい山間にこれだけ巨大な病院が存在しているのか、腑に落ちなかった。私は千鳥足でバスを降り、玄関を探してしばらく彷徨した。

老人だらけの待合室で二時間待たされた後、私の番となった。医者は古いレーズンの臭いに似た体臭を持つ、マフィアのような男だった。ペンライトで私の口腔内を観察していたマフィアは、驚愕の声を上げた。

「こんなになるまで、どうして放っておいたんですか！」

「待っている間に、悪化したのかも」疲れ果てた私は軽口を叩いた。

数分後、私は黄ばんだカーテンで仕切られた病室の一区画を割り当てられ、垂れ下がった点滴の管が揺れるのをぼんやりと眺めていた。私は副鼻腔炎と気管支炎、そして肺炎を患っているそうである。出来ればサナトリウムで療養が望ましかった、そうすれば私小説を一本ものに出来たかもしれないのに。

その日は投与された咳止めのお蔭でぐっすりと眠れ、私は随分気分がよくなった（と、その時点では思っていた）。私の隣のベッドには、リュウマチの老人が寝ていた。直に我々は仲良くなった。老人は信心深い人で、枕元に小さな数珠を何個も置いていた。彼はそのうちの一つを私にくれた。私は、手のひらの上でそれを弄んでいるうちに、数珠の形状と、結びのすっきり魅せられてしまった。独立した粒と粒とが、非常に細かい糸でもって結び付けられている、神秘的な形状に。私が今取り組んでいるこの本も、このような形態に

したいものだと考えた。独立とした話と話が、べったりと連結しあうのではなく、極細の糸を介して、繋がっていないような繋がり方をしているという、そんな形態――。

老人は退屈していたのだろう、新入りの私に興味を示し、あれやこれやとたわいない質問をしてきた。喉の調子もよく、機嫌のよかった私は、彼の（時に下世話になる）質問に嫌な顔一つせず答えていった。やがて、尋ねることの無くなった老人が黙ってしまうと、今度は私が質問をした。「何か、小説になりそうな、変な話がないでしょうかねえ。できれば、この辺りに伝わっている、昔話とか言い伝えのようなものが望ましいんですが」

老人はいくつか昔話をしてくれたが、いずれも傘地藏やアズキアライ伝説といった、有名な民話の亜種に過ぎず、取るに足らないものばかりだった。私は質問を変えた。

「あなたの村でかつて評判になっていた、どろどろした痴話ばなしのようなのはありませんかね」

老人は、暫く思索した後、かすかに手を揺らして（彼がリュウマチに冒されていないければ、ここで両手をポンと打って見せたはずである）「それなら、とっておきの話があるよ。今から十五年、二十年くらい前のことだと思うが・・・」

老人が語ったのは、実に酷い話だったが、これは使えるかもしれないと思った。私は老人に言った。「すいません、何か書くものを貸して頂けませんか。その話を書きとめておきたいので」

老人は枕もとのレターセットを貸してくれた。私は注射針のせいで不自由な片腕を気遣いながらペンを取り、彼の話を記録した。こんな具合に。

これは私がある老人から聞いた物語であり、絵を描くのが好きな平凡な少女が主人公である。多くの物語は、何人かの人間の口から口へと伝えられるうちに、彩色が施され、憶測が付け加えられ、陳腐な解釈によって汚され、やがて忘れ去られてしまうものだ。この物語もまたそうした運命を背負ったものである。恐らく、私が今まさに開始したばかりの△紙に書き付ける△という行為が、この物語にとつての最後の再現となることであろう。

その少女は恋に落ちたことがなかった。もともと、彼女自身はその事実を知らなかった。心地よい微熱のような憧憬は幾度も経験したことがあり、それが愛情が見せる夢の全部だと無邪気にも信じていた。しかし、彼女の澄んだ瞳は常に空高くを見つめており、足元に広がる泥濘に気付く事はなかったのである。

ある日、少女は川岸で一人の男と出会った。男は常に紳士的な態度を崩さず、憂いを含んだ横顔は見る者に高貴な印象を抱かせた。少女は初めて彼を見た時、意味も無く心臓が激しく揺れ動くのを感じた。その日以来、少女は別に川遊びが好きならなくても、興味も無いにも関わらず、頻繁に川へ出かけるようになった。また彼女は絵を描くことが大好きで、しよつちゅう部屋中に絵の具の入った瓶を散らかしながら作品制作に取り組んでいたが、川に通うようになってからというもの、キャンバスの上に描かれるのはあの男だけになった。

一週間経ち、進展があった。驚いたことに、男の方から声をかけてきたのである。少女は天にも昇るような心地になった。夢だと思えなかった。二人は同じボートに乗り、出航した。少女は、これほどまでに光輝いた午後は、今までになかったと思った。

しかし、川の中ほどまでボートが進んだ時、男がとつた実際的な行為が、この幸福な時

間をぶち壊しにした。少女は、早熟な友人たちから、そのような行いについて断片的な知識を得ていた。しかし、そうした知識はどれもこれもサッカリンをまぶしたオブラートに包まれていた。彼女は、今まで自分が（多少の罪悪感を感じつつ）夢想していた陶酔の瞬間と、現実に展開されているおぞましい格闘技との間に広がる深い溝をどうにかして埋めようとして、必死に唇を噛んだ。およそ甘美とは言い難い痛み、血、汗・・・これは美ではなく暴力かもしれない、少女はそう思った。

この出来事の後しばらくして、少女は自分の身体に変化が起こったことに気づく。トイシにうずくまって懸命に嘔吐している最中、彼女は自分が赤子を宿していることを確信した。

これを聞いた男は大いに狼狽し、いとも軽々と自分の秘密を暴いた。男には妻がいたのである。しかも男は、自分は深く妻を愛しているのだと言った。少女は当然のごとく激怒した。奥さんを愛しているのなら、何故私にあんなことをしたの。男は答えられなかった。（そのような難しい問いに答えられるような男ではなかったのである。）半狂乱になって詰め寄る少女の手を取って、男は（目に涙を浮かべて）頼むからおろしてくれ、と何度も哀願した。しまいに、額を地べたにこすりつけ、少女の靴に接吻さえした。

翌日、少女は村外れの病院にいた。少女は余りにも男を愛しすぎていたのである。手術が終わった後、少女は流す涙も無くなっていることに気がついた。汚れたベッドの上で、少女は体を貫く痛みを抱いてまどろんでいた。拭い去ることの出来ない、鋭い痛みが彼女を支配していた。―私はわが子を殺してしまった―

少女はそれから、画材が散らばった薄暗い部屋で、絵筆を取ることもなく塞ぎこんだまま日々を送るようになる。程なくして彼女の両親は、娘の様子を訝しく思い出す。また彼らは、彼女が男に夢中であった時に描いた、何枚もの男の肖像画を見つけしてしまう。問い詰めると、娘は真つ青な顔をして、男のことを打ち明けた。（この際、娘は一点の事実を伏せた。それは言うまでもなく、ボートの上で男と行なった行為の結果を村外れの病院で処理したことである）

両親は男を追い詰める。両親は娘がまだ「若い」と言うよりも「若い」年齢であり、このような関係になってしまった以上は責任を取っていただきたいと、強い調子で迫った。今度ばかりは男は土下座では済まされなかった。男は悲しみにくれないながら、妻に家を出るように言い渡す（他人の気持ちを考慮しないこと、他人を不幸にすること、自分が何をしているのかを理解しないことの3点は、彼の専売特許であった）。

妻は悲しみにくれないながらも、素直に出て行った。男は、そんな妻のことを、言いようも無いじらしいと思った。こんなにじらしくて貞淑な女を手放してしまったとは、俺はなんて馬鹿なのだろう、と彼は悲嘆した。

男は妻をあきらめきれない。少女と愛し合っていた時の妻は、耐え難い老婆に見えた。けれども妻を失ってからというもの、彼には少女が何の魅力もない小娘にしか見えなくなっていた。彼は毎日妻のことを思い出しては、涙に暮れた。

しかし男と少女は夫婦になることはなかった。破局は結婚式の最中に起こった。盛大な宴が催され、村中の人間が集って葡萄酒に酔い痴れていた時のことである。娘は慣れない化粧をして、歩けないほどに重たい花嫁衣裳を身にまとっていた。娘は、顔に塗った練り白粉ののりが悪いのではないかということを、病的なまでに心配していた。結婚式という

大舞台に臨んでいることが、いつそうその神経症的な不安を増大させていた。娘は式が始まるまでに、納得のいく化粧をすることが出来なかった。式の直前まで少女は部屋にこもりきり、半狂乱になりながら延々と鏡台の前で試行錯誤を繰り返していたが、うまくいかなかった。とうとう母親が呼びに来た。追いつめられた少女は、大慌てで練り白粉の瓶と鏡を袂に隠し、そして宴の席へ向かった。人目をしのんで化粧直しをするつもりでいたのである。

少女は雛壇の上で、手の内に隠した鏡に自分の顔を映した。頬の辺りの仕上がりが悪い（と彼女は思った）。彼女はもう片方の手に瓶の中身を出し、頬を撫でるふりをしてこっそりと塗りつけようとした。ところが、鏡に映った自分の顔を見て、彼女は髪の毛が逆立った。彼女が慌てて掴んだ瓶は練り白粉ではなく、緑の絵の具が入った瓶だったのである。

少女はパニックに陥った。急いで拭おうとして滅茶苦茶に顔を掻き回し、結果として顔一面に毒々しいポスターカラーが広がった。花嫁が不審な行動をとっていることに気付いた男は、そっと彼女の顔を覗き込んだ―そして、驚きの叫び声を上げ、その場に居合わせた者全員の視線を集めた。

大仰な衣装に身を包んだ上に緑の絵の具を顔中に塗りたくった少女は、とてつもなく不気味かつ滑稽だった。いい加減に酔いの回っていた会場の客たちは、腹を抱えてのたうち回った。爆発する笑い声に包まれた男は突然インスピレーションを受け、一世一代の大芝居を打つために立ち上がる。顔を怒りで真っ赤にし、怒号に似た声で演説を始める。このような侮辱は初めてだ。この娘は神聖なる儀式において、私の名誉を著しく傷つけた。公衆の面前で笑いにされることは、私には耐えられない。そして、顔一面に緑の絵の具を塗るような女とは、とてもやっていけない。荒々しい風の如く、男はその場から立ち去る。何処へ―？愛する妻の元へ。

部屋中に散らばっていた画材をすっかり捨ててしまうと、再び少女は塞ぎこんで暮らすようになった。しかしある日彼女は、（これを一番捨てたかったのに、何故だか最後まで捨てられなかった）緑の絵の具をあの日と同じように顔一面に塗りたくり、誰にも行き先を告げることなく家を出た。そしてそのまま、忘れ去られた。

老人の話を書き取り終えた私は、それが刺激になったせいか創作意欲が湧いてきたような心地がして、久々に小説を書いてみようという気になった。取り合えず頭にあったのは、あの木偶人形を恋人に持つ男（と書いたら、まるで倒錯した性的嗜好を持つ男のようだ）の物語の続きを書こう、というアイディア。そう、あれは悪夢の安ホテルで書かれたものだった。

私の意識下から、当時の状況を物語る幾つかの映像が現れ出て来た。殺人的に不味いサンドイッチ、拷問台のようなベッド、最悪の眺め、そして・・・そして、階下のバーにいた李白そっくりのバーテン。

本当に李白によく似ていた。いや、似ているどころか、あれは李白その人だったのでなかるうか。考えれば考えるほど、あの古びたカウンターの向こうで水割りを作っていたのは、李白にちがいないという（ある種信仰にも誓いのような）確信が湧き上がってきた。そうだ、あれは李白だったんだ。李白じゃなけりゃあ、誰だって言うんだ。そんな阿呆ら

しい夢想を許すほどに、私は参ってしまった。頭がどうかしている、咳のしすぎで脳の酸素が足りなくなったに違いない。さあ、それよりも、木偶人形の物語を（こちらの夢想も十分に阿呆らしいが）書こう。

ところが、ペンは動かなかった。

直に私は降参した。よし、わかった。木偶人形は後回しにしよう。李白の物語を書いた後で、ゆっくり執筆することしよう。

やっときさ、ペンが動き出した。激しい咳に乱されながら。

ヴェルサイユの卵剥き人

国境線の近く、荒野原が広がっている。山は遠く灰色に霞んで、時折吹く風は枯れかけの木を気紛れに揺さぶっている。そこに一軒の居酒屋が（置き忘れたかばんのように）ひっそりと在った。ルイ15世はカツラを片手でくしゃくしゃと掻き回しながら、その灯を指して歩いていた。

居酒屋のカウンターには老人が一人座って、石版に図形だの数式だのを書きつけては思索している。彼はアルキメデスで、「私の冠に、純金以外の金属が混じっているかどうかを調べよ」と王に命じられて、大いに苦悩しているのである。老人の手に従って石版には美しい幾何学模様が現われ、そして消えた。

「ちよつと、じいさん」と彼に呼びかけるのは、肥った中国人のバーテンで、名は李白という。

「お前さん、そこへ座ってからもう二時間になるが、いい加減何か注文したらどうだ」

「酒を飲んでるどころじゃないんだ」アルキメデスは頭をこんこん叩きながら言った。

「飲まないなら表へ出ればいいのに」

「表で研究をしていたら、ローマ人兵士が侵攻してくるんでね。」

李白は肩をすくめ、アルキメデスのために用意したグラスにガポガポとウキスキーを注いで、自分で飲み干した。彼は客に酒を出すよりも自分で飲む方を好んだのである。

そこにチリンチリンと鈴の音がして、ドアが開いた。ルイ15世が入って来た。

「へいらつしやい」李白はエプロンで口をぬぐいぬぐい、お辞儀をした。「なんにしましょ」

ルイ15世はアルキメデスの横に座り、「ワインを」と言った。そして、大きく溜息をついた。アルキメデスはちよつとの間石版から目を離して、ルイ15世の方を見ていった。

「見慣れない顔だね。いっしょに飲むかい」

「飲んでないだろう、あんたは」李白が言った。「数字で酔っ払ってんだ」

「宮殿の庭園を散策していたら、急に頭が真っ白になり、気付いたらこの辺りを歩いていた。」そう言ってルイ15世はカツラを外し、傍らに置いた。「まあいい。今日の職務は午前中に終わっているし、夜だってゴマを擦るしか能の無い貴族達といっしょに退屈な晩餐会だ。特に気にする予定も無い。此処が何処だか知らないが、時間は気にせずのんびりワインを楽しむことにしよう。」

「頭が真っ白になった、か」とアルキメデス。「空間の歪に落ちる時は、そんな気分になるものさ。」

「空間の歪・・・？」とルイ15世。

「へえ。この居酒屋は、空間の歪にあるんです。」と李白。

「空間の歪などというものがあるのか？」

「へえ。空間も歪むことがあるんだそうで。うちの常連客のインシュタインさんって方が、そうおっしゃってました。」

「彼はなかなか面白い男だよ」アルキメデスが言った。

「ところで」李白はコルクを抜くのに手間取りつつ、ルイ15世に問うた。「さつき宮殿の庭を散策なすってた、とおっしゃってましたが、ご職業は皇帝さんで？」

「いかにも。」

「ほう、そりゃあ結講！」李白はニカつと笑った。彼は以前皇帝に仕えた経験があった（酒癖のせいで首になったが）。李白は樽から酒を盗み飲みながら、ルイ15世の気に入りそうな詩を立て続けに即興で詠み始めた。そして彼が一升を飲み終える頃には、詠まれた詩は100篇にもものば

った。ルイ15世は李白が一篇の詩を詠むごとに金貨を与え、金貨がなくなると自分の身にまとっていた豪華な衣装を与えた。そのため、李白が一升飲み終える頃には、彼はすっかりみずばらしい身なりになってしまった。

「マスター、いい加減に静かにしろ！」アルキメデスが怒ったので李白はやっと朗詠を止め、ルイ15世はひそかに安堵した。そこでルイ15世はしゃんと背筋を伸ばして、李白に聞いた。「ゆで卵はできるかね？」

「へえ」きよとんとして、李白は答えた。「メニューにはございませんが、なんでしたらお作りしますよ。皇帝様の御要望に応えぬわけにもいきません」

「頼む」

しばらくして、李白がゆで卵を持ってくると、ルイ15世は優雅な身振りでそれを受け取った。そして、これ以上無いほどに滑らかな手つきで殻を剥き、口に放り込んだ。この一連の動作は一分の隙も無く、まさに完成された芸術品と称しても過言ではないものであった。(何しろアルキメデスの目を石版から離させたほどである！)

「おったまげた」アルキメデスは感動を隠せない声で言った。「私は割合長い間生きてきたが、こんなに美しく卵を食べる人には始めて会ったよ！」

「おかわりをゆでて来ましょう！！」李白も興奮して、厨房にひっこんだ。

「朕の卵の食べっぷりは有名でね」とルイ15世。「朕は宮廷での食事風景を下々の者たちに公開しているのだが、みな一様に朕が卵を食べる姿を見ると歓声をあげるね」

「そりやそうだろう。料金を払ってでも見たいと思えるほど、見事なもんだよ」

「下々の者たちは、朕の威厳よりもむしろ卵の食べ方の方に敬意を表しているのかも知れぬな！」ルイ15世は自虐的に笑って言った。「フランス史上、いや、世界史上最も偉大な指導者であるこのルイ15世の一番の業績が、美しく卵を食べることだと見なされているとは！！」

ルイ15世は大きくかぶりを振って、続けた。「いや、朕は最も偉大な指導者とは言えぬな。最も偉大な指導者は父上だ。そう、父上は偉大な方だった。フランスの権威を世界最高に高めたのだから。朕と言えば、ゆで卵を剥いているだけだ。」

「親父さんは、陛下ほどにはうまく卵を食うことはできなかったでしょうよ。」李白がよくわからないお世辞を言い、店で一番大きな鍋をコンロの上に載せた。「さあ、今に卵をどっさり持って参りますからな！！」

と、そこにドアが開いて、奇妙な帽子を頭に載せ、軍服に身を包んだ小男が入ってきた。彼は目玉をギョロギョロさせて店内を一瞥し、カウンターの隅に座った。

「これはこれはナポレオンさん」李白がエプロンで手を拭いながら出てきた。「お久しぶりです。最近はこちらもお顔をお見せにならないもんだから、どうしたんだろうと思ってたんですよ」

「ちよっとエジプトの方へ遠出をしておってね」ナポレオンは胸を張って言った。「素晴らしい戦果を収めた。その上、面白い石も見つかったな。今調査中だが、学術的に価値のあるものかもしれないのだ。」

「その石とやらは、計算式を書くのには適しているのかい」石と見ると数式を書かずにおれないアルキメデスが質問した。

ナポレオンは笑って答えた。「生憎だが爺さん、その石はもうすでに文字でいっぱいなんだ。計算式を書けるスペースは無いよ」

「どんなことが書いてあるんで？」鍋から大量のゆで卵をすくい上げつつ、李白が問うた。

「それがわからんぞ」とナポレオンは肩をすくめる。「だが、いざれわかることだ。余の辞書に不可能という言葉は無い。」そして溜息をひとつついて、「では、ブランデーをもらおうか。」

なんという嫌味な奴だろう。ルイ15世は今しがたやつて来た男に、言いよりの無い不快感を覚えた。どうやら朕と同じフランス人のようだ。だが、あのように醜く尊大な下司野郎が、最高の民族であるフランス人の一員であるとは到底信じがたい！胸が悪くなる。ルイ15世は苛々しながら、李白が運んできたゆで卵の山に手を伸ばした。(ルイ15世の妙技は、彼の苛立ちの影響を受けることもなく、やはり優雅さそのものであった) ゆで卵の山はすぐに丘になり、そして更地になろうとしていた。(嗚呼、またアルキメデスが石版から目を離している！) 腹が膨れてきたせいか、少し落ち着きを取り戻したルイ15世は、それにしても何故あの男にこれほどまで嫌悪感を抱いてしまうのだろうか、と考えてみることにした。答えは出なかった。ただ、漠然とした恐怖感とその根底にあるような気がして、思わずかぶりを振った。何を恐れている。神から王権を授かった朕が、何故あんなネズミ男を恐れねばならぬのだ！しかし、自分の卵剥きの見事さを見るにつけ、もしかして朕は権威の象徴ではなく国家の道化なのではないか・・・という思いが頭をもたげて来るのであった。

最終的にルイ15世は何百個という卵を剥き、(さすがに彼一人では食べきれないので李白、アルキメデス、ナポレオンも手伝った) 床には殻が10センチ以上積もった。ナポレオンは卵で一杯になった腹を抱えて、さかんにげっぷを漏らしながら帰って行った。意外なことに、李白よりもアルキメデスの方が多く卵を食べた。「研究に没頭していたもんで、ここ2ヶ月ぐらい飯を食う暇もなくてね。腹ぺこだったんだ」というのがその理由であった。

「いやあ、楽しかった」硫黄のような臭いを漂わせて、李白が言った。「それにしても、見事でした。」

「また今度来た時も頼むぞ」アルキメデスが驚異的な速さで数式を書き連ねつつ言った。

ルイ15世は優雅に右手を振り、笑顔で声援に答えた。しかしすぐさま暗い表情に戻って言った。

「最近、時々変な考えにとり憑かれるのだ。朕はずっと、自分が選ばれた人間であり、誰も成し得なかった奇跡を起こした人間であると信じていた。全能の神から王権を授けられた、神に愛された人間だと思っていた。しかし、朕はひよっとして、単に卵の殻剥きがうまいというだけの人間に過ぎず、朕の掌中にある強大な権力も、結局は上手な卵の割り方と同じ程度にしか賞賛され得られぬものなのかもしれない。」

「俗世に生きるってのは、そんなもんなんだよ。たったひとつでも褒められる得意があれば、それでいいじゃないか」アルキメデスはそう言うと、石版を床にほうり捨てた。「駄目だ！煮詰まってきた。腹が一杯でものが考えられない。今日はもう帰って風呂にでも入るとするよ。お勘定」

「あんた何も飲んでやしないよ」と李白。「でも座席料金くらいは請求したいところだね」

「卵代の一部を払うよ」アルキメデスは小銭をカウンターに投げて、席を立った。「それじゃ、お休み。」

「朕も帰るとするか」卵ではち切れそうになっている腹を抱え上げ、ルイ15世が立ち上がった。「つけといてくれ」

立ち上がったルイ15世は深呼吸をひとつし、しばらくの間黙想していた。そして彼はドアを開き、薄暗い荒野に出て行った。

後には李白と、大量の卵の殻が残された。今日はもう店じまいにするか。李白は店の奥から箒

と袋を持ってきて（卵で膨れた腹をあちこちにぶつけながら）、片付けを開始した。これが、英雄の偉業というやつなんだろうな。割れた卵の殻をかき集めながら、李白は少し寂しい気分になった。山のような卵の殻。肝心の中身はどうの昔に食べられてしまった。後に残った卵の殻。純白であるそれもいつかは汚く変色し、そして塵と化して消えてしまう―。

李白は殻を箒でしゃくって、すっかり袋に移し終えてしまうと、その袋を引き摺って外に出た。外には宵の口の暗い空が広がっていた。李白は袋の口を開けると、二、三回勢いをつけて中身を空にぶちまけた。卵の殻の欠片は瞬く間に星に変わって、光を放ち始めた。

「おや！」李白は袋の中に、手付かずの卵を発見した。彼は嗚呼勿体ないとそれを食べかけたが、思い直して空に投げつけた。卵は月になって、一際明るい光で李白を照らした。

「頭を挙げて明月を眺め、頭を垂れて故郷を想う、か」と李白は呟いた。

先刻までの薄暗さが嘘であるかのように、降るような星空が広がっていた。その満天の星空の下を、ずぶ濡れで素っ裸のアルキメデスが「ユリイカ！」と叫びながら駆け抜けていった。

幕間狂言

人物

ロメオ

死神

幕開く。ロメオ、舞台中央に立っている。時折、ポケットに入れているウキスキーの瓶を取り出しては、ちびちび飲んでいる。

ロメオ「(空を仰ぎ見て) 満天の星空だな」

舞台左手より「ユリイカ!」という叫び声が聞こえてくる。

ロメオ「(左手を向いて) 何がわかったんだが知らないが・・・(飲む)」

ロメオ、辺りを(何かを探しているような素振り)で、きよろきよろと見回す。その後、舞台左手の方を見つめる。

(間。「ユリイカ!」の絶叫が何度も聞こえてくる。)

ロメオ、首をふりながら、正面に向き直る。そして、肩をすくめて溜息をつき、その場にしゃがみ込む。

舞台右手より死神登場。大鎌を重たそうに引きずって歩いて来る。ロメオの横まで来ると立ち止まる。

死神「おい」

ロメオ、死神の方を向いて、軽く会釈する。

ロメオ「こんにちは」

死神「お前、酒のにおいがする」

ロメオ「ああ(と言って、ウキスキーの瓶を取り出す) これっすね」

死神「まったく、この飲んだくれめ!(決まり悪そうに、左右に目をやって) どうだろう、その・・・

(数回、指を鳴らす) 俺はすごく喉が渴いていてね」

ロメオ「一杯いかがです」

死神「一杯いかがです、だと！(哄笑する) えらく大胆な坊やだ」

ロメオ「いらぬいんすか」

死神「いる、ものすごく要る(死神、ロメオから瓶を受け取る。大鎌を投げ捨て、ラッパ飲みする) ああ、これで人心地つい・・・(フラフラと左右に揺れる。) よし、休憩時間だ(どっかと座り込む)」

(間。時折二人は目を合わせる)

死神「あんたは何者だ」

ロメオ「俺はロメオです」

死神「ロメオ？(首をかしげる) あの、シェイクスピア劇に出て来る？」

ロメオ「仰るとおり。」

死神「彼は架空の人物じゃないのか？」

ロメオ「(笑う) 正確に言うと、俺は役者なんです。シェイクスピア役者なんですよ。今やってる公演では、ロメオの役を演じていますね」

死神「成る程(頷く) じゃあ、偽ロメオってわけか」

ロメオ「へんな言い方ですね。(暫くして) それなら『本物ロメオ』も何処かにいるはずですよね」

死神「(暫く考えて) そういう哲学命題は苦手だ」

(間。「ユリイカ！」の絶叫が聞こえてくる)

ロメオ「あなたは？」

死神「俺は死神だよ」

ロメオ「俺を連れて行くとしたって無駄ですよ」

死神「何故」

ロメオ「俺はもうすでに舞台の上で、何百回となく死んだことがありますからね」

(間)

死神「今日連れてゆくのはあんたじゃない」

ロメオ「それは残念」

死神「おうとも」

ロメオ「で、どんな奴なんです、今日あなたが連れてゆく人って」

死神「肺炎で倒れている間抜けな男だ。暢気にベッドの上で小説なんぞ書いている、それも開いた口の塞がらないほど阿呆らしい小説を――実に不埒な態度だ！腹立たしいから連れて行って、性根を叩きなおしてやる」

ロメオ「おやおや」

(二人、黙り込む。死神、ロメオにもらったウキスキーを再び飲み始める。)

死神「辺りを見回して」ところでジュリエットは？」

ロメオ「それが、俺もさつきから探してるんですけど、見つからないんですよ」

死神「何だそれは。ロメオにはジュリエットが付き物だろう」

ロメオ「まあ、その通りなんですがね」

死神「早く見つけないと」

ロメオ「ええ。」

(間。死神、何か言いたそうにモジモジする)

死神「(ためらいがちに)なあ、なんの根拠も無いんだが・・・」

(間)

死神「君は、ジュリエットには会えない気がするな」

(間)

ロメオ「(うつむいていた顔を上げて)やっぱりそう思いますか」

(間)

死神「ああ。」

(間)

死神「誤解するなよ。俺は連れて行ってないからな」

ロメオ「はあ。」

(間)

死神「(とってつけたような、明るい声で)さてと。もう行かなけりや。仕事、仕事。美味しいウ

キスキーありがとよ」

ロメオ「どうも。」

死神「くよくよすんなよ」

死神、鼻歌を歌いながら左手に退場。ロメオ、その後姿を目で追う。暫くして立ち上がり、空を仰ぎ見る。

暗転。

電飾で、次の文章が舞台上に浮かび上がる。

パスポートがしわくちゃになったところで、地中海に行ってみようかと思う。

パスポートがしわくちやになったところで、地中海に行ってみようかと思う。

昼夜問わず降り続く雨のせいで陰気な気分になるのか、それとも僕の陰気な気分が空に映るから雨が降り続くのか、今ひとつ判然としない。部屋の隅に置いて、時折小腹がすいた時に齧っていた長大なフランスパンは救いような無いまでに湿気て、そしてカビまみれになってしまった（哀しいことに僕はペニシリンの作り方を知らない）。

僕は生活を変えなければならぬ！（確信と共にそう思った。それは今朝、部屋の隅に奇妙なキノコがひよろひよろと自生しているのを発見した瞬間のことであった。）雨は苦手だ。僕は全国で最も降水量の少ない都市で生まれ育った。太陽が是非とも必要なのだ。雲の裏側に引きこもった陰気な太陽ではない。どこまでも青い空の真ん中で大笑いしている、陽気な太陽が必要なのだ。そう、太陽。だから僕は地中海にでも行ってみようか、と考えているのである。地中海。僕はその土地に関して何も知らない。ただ、オリーブオイルで炒めたシーフード・スパゲッティと明るい味のワイン、活気溢れる港町、そして海辺で寝そべり皮膚癌の危機に晒されている女の子たち、そんな素晴らしいものが僕を待っていてくれる（のだから）と僕は一方的に信じている。）海においても肌においても全部混ざり合って、夏を塗り上げるのだ。そうすれば変わるかもしれない——僕の人生が。

僕は重たい雨戸を押し上げた。雨は少し小降りになってきたようだ。僕は小さな窓から身を乗り出し、体の節々に無理な負担をかけながら裏庭に降り立った。庭に生えている草は降り続いた雨のせいでしっとりとして湿っていた。灰色の空をバックに、複翼飛行機が低空飛行している。たばこをのむ事もままならぬまま、僕は真冬の蚊のように弱々しく飛び続ける飛行機を眺めていた。このしっとり湿った裏庭から、飛行場までは何万マイルなのか。そんなことを考えながら僕は煙を吐き出した（真似をした）。

開かれた雨戸から△君▽が身を乗り出す。「芝刈には適さない天気よ」

「きみもついてくればいいよ」と僕はつま先で草を擦りながら言った。

「何処に？芝刈に？」

「芝刈じゃないよ。地中海だよ。」

「でも私のパスポートはしわくちやだからねえ」

と言って△君▽が取り出したパスポートは、なるほどしわくちやで、判読できる文字が一つも無かった。おまけに顔写真も人間の時に撮ったもので、これを持っていても飛行機には乗れるはずもあるまい、と僕は結論を下した。

「大使館に行かなくちゃならないかも」と△君▽は余所行きの服を選びながら言った。

「大使館なんか行っても、どうしようもないさ。」僕は伸びをして言った。「きみは木偶人形だぜ？」

「じゃあ、どうするのさ」△君▽は出し抜けに振り返って言った。

「そうさな」僕は少し思案して言った。「僕が替えの下着を持っていかずに、向こうで買うことにしたら、万事問題は解決さ。おいで、ロザルバ」

というわけで僕は木偶人形の△君▽を一旦ばらばらに解体して、愛用の頑丈なトランクの

中に丁寧に詰め込んだ。「宿に着いたら、さっさと組み立ててよ」トランクの中から、A君Vの声がする。「頼むから、空港についてからはしゃべるなよ」と言つて僕は帽子を手にする。

十分後、僕はタクシーを拾わんとして、大通りに立ち片手を高く挙げている。さぞかし間抜けな様子であろう。地中海での生活を夢想してみたりもする。A君Vがブドウを踏んでいるのが見える。美味しいワインをこしらえているんだらう、ヨーロッパの欠片の上で。

あるいは僕らは中欧のほうに足を伸ばして、美術館に行くべきなのかもしれない。絵の具が塗りたくられたキャンバスが壁一面に張り巡らされ、アクリル製の前衛彫刻が出鱈目に腕を差し伸べている、そんな素敵な場所に行つて今後の展望を考えてみるのも一興かもしれない。ルーブル美術館、オルセー美術館、他にも色々、選りどり見どりだが、観光ガイドブックにも載っていないような、小さな美術館に入つてみるのはどうだろう。有名画家の絵は見られないだろうが、その代わりに無名画家（その地域の出身者で芽が出ずに終わったが、郷土の人々の間では拔群の知名度を誇る画家）の絵が山のようにあり、休日の退屈さを追い払いに来た老婆や子供たちがぶらぶらしている、そんな美術館。昼過ぎに宿を出発して、散策の途中に立ち寄つてみるのだ。いつぞやの時みたいに、ポケットにワインの瓶を何本も入れて。

「落ち着くわね」A君Vは、館内に響き渡る自分の靴音を楽しむように、ぎくしゃくと歩きながら言う。「なによりも、この素晴らしい静けさ！宿よりもここの方がよく寝られそう」「寝るなよ」と僕。「展示品と勘違いされるから」

ふと傍らを見てみると、A君Vがいなくなっている。辺りを見回しても、何処にもいない。訝しく思っている。「ここよ、ここよ」と真上から声がした。見上げて、驚愕した。なんとA君Vがキャンバスの中に入りこんで、絵になつてしまっている！

「何をやってるんだ！」僕は腰を抜かささんばかりに驚いて叫んだ。

「これこそが芸術と言うものよ」キャンバスの中から、クスクス笑う声が聞こえる。

「まったく」僕は溜息をついた。「人が来たらどうする」

言つたそばから、老人が一人やつて来た。老人はまず入り口付近の風景画を見、その隣の裸婦像を見、そして僕のほうへ近づいてきて、A君Vがへばりついているキャンバスを見始めた。

風景画と裸婦像は、ちらと見ただけですぐに通り過ぎてしまったのに、何故よりによつてA君Vの真下では立ち止まつてしまったのだろうか、この老人は。でっぷりと肥つた老人は感に耐えぬといった表情でキャンバスを眺め、「ほほう」と賛美の声を上げた。「これは美しい婦人の肖像画ですな」

「そうですね」僕ははらはらしつつも、少々嬉しさを感じて返事をした。

「まあ！ありがとうございます」キャンバスの中から声がしたので、僕は慌ててそれを打ち消す大声で言った。「実に美しいですな。」

「美術館で大声はなりませんよ」老人はびっくりしたように言った。「ま、無理もない。大声で感嘆の思いを評したくなるような作品だ。さっきの裸婦より余程いい……。ところで、これがその、印象派絵画というやつですか」

「まあ、そうですね」と僕は答え、キャンバスに目を戻し、またも腰を抜かささんばかりに驚

愕した。A君Vは自分を解体できるという木偶人形ゆえの特技を遺憾なく發揮し、自分の体を無数の立方体に分解して、自らを婦人の肖像画からキュビズム絵画へと変貌させていたのだ！！

「いえ、これはもう印象派ではありません。キュビズムです。」僕は気絶しそうになる自分を必死に励ましつつ言った。

「おや！」老人もキャンバス上の変化に気付いて、驚きと共に叫んだ。「美しいご婦人の絵が、凸凹だらけの抽象画になってしまった！！一体これはどういうことですか」

「たぶん、このキャンバスは近代美術史を再現しているのでしょうか。」僕はやけくそになりながら言った。「印象派への反動として芸術上の革命が起こり、キュビズムが生まれた、という絵画の歴史をね」

「ほほう。しかしキュビズムというのは、こういうペイズリー柄が特徴なのですか」

A君Vのクスクス笑いが、一段と大きくなった。(A君Vはその日、ペイズリー柄のドレスを着ていたのである)

「いえ、私の知る限り、あまりペイズリーのキュビズム絵画はないようです」

僕は笑わせる気など毛頭なかったのに、A君Vはついに吹き出してしまった。「いまの音はなんですか」と老人。「確かにこの絵の中から聞こえてきたように思いますが」

「ええ？そうですか」と僕。ひきつった顔面にとぼけた愛想笑いを浮べる。

「聞こえるではありませんか！今もほれ、クスクスと忍び笑う声がキャンバスの中から聞こえてきますぞ。どうもへんだ、大体が印象派の絵画からキュビズム絵画に変身してしまっただけでも驚きなのに、その上笑い声まで立てるとは、この絵は妖怪がとり憑いているに違いない！！」

A君Vのクスクス笑いが、また激しさを増す。老人は威厳を保ちつつ「よろしい！そんなに笑いたいなら、笑わせてさしあげよう」

老人はキャンバスに向かって百面相をし始めた。この芸で毎日孫をあやしているのだろうか、彼の百面相は絶品だった。苦しそうなA君Vの笑い声が聞こえる。もう限界のようだ。僕は慌てて老人の前に立ちふさがり、煙に巻こうと試みた。

「おそらくキャンバスの中に小型のスピーカーでも仕込んであるんでしょう。センサーに反応して音を出すスピーカーがね。現代芸術、モダン・アートというものは視覚のみならず聴覚にも訴えようとする作品が多いのですよ。私も昔美術館でいくつかそんな作品を見たことがありますよ。正確に言うと『聴きましたよ』というところですか。スピーカーが内蔵してある彫刻だとか、絵画の真下にCDプレイヤーが置いてあって現代音楽が再生されていたりだとか、まあ音や音楽というものは何かしらの雰囲気を作り出すには最適な道具ですから・・・」

と僕が冷や汗をぬぐいぬぐい話していると、突然けたたましい悲鳴がして、バラバラと無数のペイズリー柄の立法体が落ちてきた。落ちてきた立方体はパタパタと一箇所に集まり、あつという間にA君Vが組み立てあがった。

「足を滑らせちゃって」とA君Vは照れながら言っつて、大笑いした。「ああ苦しかった。とつてもおかしいのよ、あのお爺さんの百面相！お腹がよじれて死ぬかと思ったわ。」

かわいそうに老人は気を失って、床にへたりこんでしまった。その静かな佇まいは、ロダンの彫刻を思わせた。

美術館を出ると、雨が降りしきっていた。「来た時はあんなにいい天気だったのに」と、つぶやいて、僕は困り果ててしまった。傘を持って来なかったのだ。仕方がないので僕は美術館の正面玄関に座り込んで、雨が止むのを待ちつつ持参したワインを飲み始めた。夕刻になって、ようやく雨が止んだ。そして気づいた時には、僕とA君Vは何本ものワインをあけてしまっていた。さあ行こうと思いい立ち上がるうとしても、足が言うことを聞かなくなっていた。

「ワインを飲みすぎると、頭ははつきりしていても足が虚脱するのさ」と僕は言った。

「じゃあどうするの」

「足の酔いが醒めるまで、しばらくこのままかな」

そして僕は雨上がりの美術館の前で、足が素面に戻るのを待っている。町並みを照らす赤い夕日は、さつき見た誰かの油絵を思い出させた。僕は空っぽのボトルを空にかざして、雨上がりの風を集めてみようとした。A君Vは、足元に駆け寄って来たびしょ濡れの犬ころを抱えて、何か物思いに耽っていた。

「せつかくのドレスが台無しになるよ」と僕。

「かまやしないわよ。」とA君V。

ようやくと足が素面に戻り、なんとか歩けそうな具合になると、僕は恐る恐る立ち上がった。そして僕は危なげな足取りで帰途に着いた。途中、路傍のホットドック屋が目にとまった。

ホットドッグ屋の親爺は気さくな人だった。何だかんだとお世辞を言いながら、フランパンに栓抜きのような器具で穴を開け、そこへ細いソーセージを突っ込んだ。こんなシーンを、チャップリンの映画で見たことがあったな、と僕は相変わらず阿呆になったままの足を撫でさすりながら思った。チャップリンが殺人的に固いパンにドリルで穴をあけ、ホットドッグを作らんとするシーン。この雨上がりの町は、彼の寂しげな横顔を思い出させるような哀愁でいっぱいだ。美術館を後にした僕は、チャップリンの食べていた奴ほどではないが、非常に硬いホットドッグを齧りながら歩いた。時折足が歩くことを失念してしまうため、何度も僕は転びそうになった。A君Vは犬ころにホットドッグを食べさせている。ドッグに、ドッグを。そして無事食べ終わり、ついでに買ったレモネードも飲み干した僕は、その空き瓶を高く高くかざして歩く。僕はレモネードの空き瓶の中に、雨のにおいのする風を集めて回る。ホットドッグもいいが（と僕は思う）こんな肌寒い宵には、温かいスープが一番なんだけれどな。僕がスープを煮込んでいる間の余興に、A君VとA君Vの犬ころは、覚えたてのシャンソンを披露してくれるかもしれない。ヨーロッパの欠片の上で。

やがて太陽は疲れ果てて、海の中へと真つ逆さまに墜落する。毒々しい色のキャンドルに火を灯して、僕は威厳に満ちた食事をする。威厳に満ちた食事とは即ち滑稽な猿芝居のことである。このレストランはすぐ近くに海があるというのに、その海で獲れた魚や貝をひとつも利用していないし、利用しようとしてもしていない。空輸したエスカルゴが名物だ。

△君Vの真後ろのテーブルに座っている金満家が先刻「威厳に満ち満ちた態度」で注文したキャビアは、安物の缶詰を開けて皿いっぱいにぶちまけた（そしてこの上なく臭い玉葱を添えて、夏の夕暮れにふさわしい絶望を完成させた！）だけの代物であるし、一体そんなものをどうして窮屈な思いをしつつ食べねばならないのだろう。なんて滑稽な猿芝居！

明日は潮干狩りだな、と僕は窓から見える真つ赤な海（この海だけは絶品だ）を眺めながら思った。鍋一杯のムール貝を拾って、ちよつとしたパーティーをやるでしょう。今夜は宿で留守番を余儀なくされている、△君Vの新しい同志たる犬ころも、明日は腹いっぱい海の幸が食べられることだろう。楽しみだ。

△君Vは子羊の脳を食べながら、話し始める。

「チエスをやっているといつも嫌になるのよ」（ソムリエがワインリストを持って来たが、△君Vはおかまいなしに話し続ける。）「熟慮の挙句、駒を動かす。あんまり熟慮したもんだから、世界で一番の静かさが部屋を通り抜けて行って、お相手はこっくりこっくり、船を漕いでいる。とうとう決心して、駒を動かそうと手を伸ばした私は、いつだってなんとも言えない気分になるの。私の心の中で声がする。『お前が駒を何処へ動かそうと、それよりももっといい手が他にいくらでもあるんだ』」

△君Vはそこで言葉を切り、ようやくと哀れなソムリエに仕事を与えてやり、溜息をひとつつく。そしてナイフとフォークを置き、ついでに七面鳥の羽根で作った特製のカツラも外して傍らに置き、話を続ける。

「色んなことが過ぎ去ってしまった。私は少し思慮深くないとね。朝、半分まどろみながらスクランブルエッグを作っていると、私の人生から何もかもがこぼれ落ちてゆくのが見えるのよ。過ぎ去ったものはもう戻りはしないし、私もあなたも、もうそんなに若いとは言えない。もし老いぼれていくことがたまらなく不安になるのだったら、行き先を見極める努力を逃れるわけにはいかないようね」

ソムリエがワインとグラスを持ってくる。乾杯の後で、△君Vは笑いながら話をしめくくる。

「でも、私たちは喜劇に生きる人間なのよ！どんなに行き先を見極めてみたところで、結局は同じところをぐるぐる回るだけ。気付いたらまたぞろここへたどり着いて、あなたとブドウを踏んでるのかもね」

ヨーロッパの欠片（かけら）！僕らは巨大な時計の中で生きている。いっだって長針と短針に追い立てられて走っている。そのゼンマイが捻じ曲がっていたなら、いつまで経っても抜け出せないかもね。

ヨーロッパの欠片（かけら）！僕は生活を変えなければならぬ。殺風景な部屋に光を集めて、良質な人生を送らなければ。だから、安い絵の具を買ってきて、薄汚れたキャンバスいっぱい△君Vの絵でも描いてみようかと思う。

ヨーロッパの欠片（かけら）！そんな取りとめもない計画に取り囲まれて、毎日壁紙を取り替えている。その神聖なる儀式の進行に従って、僕の部屋にはちよつとした変化が生まれている。目下のところ僕は、今から何百年も経った後で僕の部屋を訪れた旅人が、東の間の平穏を感じながら眺めてくれるような、素敵な壁紙を探している。

ヨーロッパの欠片（かけら）。

その上でぐるぐると踊り出す。

さて、我が小説の作中人物である**「僕」**はヨーロッパ旅行を夢想しているが、**「私」**の方にはとてもそんな余裕は無い！ヨーロッパへ行くどころか、この部屋の外に出ることすら、いや、もっと正確に言えば、このベッドから出ることをすら出来ないでいる。私はほとんど失神状態にあり、呼吸が出来ない苦しみでのたうち回っている。咳のし過ぎで酸素が欠乏し、私の脳髄はいつにも増して阿呆になっている。そして何よりも恐ろしいのは、私の全身を蝕み、骨をしゃぶりつくそうとしている悪寒である。調子に乗って、病床で小説など書かなければよかった！思ったよりずっと重く圧し掛かる疲労。夏、暑苦しい病院の一角で、私は悪寒に苦しみぬいている。肺炎というものは、こんなに激しい悪寒をともなうものであったっけ？なんてこった、熱に浮かされているのに、こんなに寒いなんて！？サントラさんでもやってくるのか！？私一人、夏の日差しの中で、冬に生きている。絶望と過呼吸とに打ちのめされて、一層厳しさを増す悪寒に苦しめられるうち、私は今の季節が厳寒の冬に違いないと確信する。意識が遠のく。私の頭の中をイメージの断片が飛び交っていく。寒さが私の脳髄を蝕み、クリスマスを幻視させる。肺炎は、ここ二十年間の死因順位の第四位であると聞いた事がある。第四位というところが非常に微妙だ。ああ。私はもう死ぬのかもしれない。ああ。もっとまじな生き方をしてくればよかった。

第四章 クリスマス・キヤロット

私の上に降る雪は
いとせめかになりました

A面の終わり

その一家にとって、石炭はなくてはならない燃料であった。石炭を運ぶ役目は長男に課せられていた。若者が石炭の係りを務めることは、この地方では昔からの慣わしなのである。この慣わしは非常に妥当なものに思える。ゴツゴツしてひどく重い、神聖かつ厄介な代物は、力の有り余った若者が運ぶのにもってこいだ。

しかし、その一家に関して言えば、余りそうだとも言い切れない。長男は愚鈍で、不器用で、腑抜けであった。彼は家の脇に積み上げられた石炭の山をシャベルですくい、薄汚れたバケツを一杯にし、そして家の中に持って入るのだが、このプロセスがどれだけ多くの失敗を孕みつつ進行することか！彼はまず玄関で躓き、敷居で躓き、ドアの上部に頭をぶつけ、テーブルにひっかかり、椅子にひっかかり、歩いた後に石炭の足跡を残すのが常であった。彼はいつも石炭まみれで、家全体もまた石炭まみれであった。

長男の仕事ぶりを全く輝きの無い目で凝視しているのは、残りの家族たちである。ソファに座っている痩せぎすの女性が彼の妹である。彼女はものを食べるという行為に並々ならぬ嫌悪感を抱いていた。他の家族は四六時中林檎を齧っており、その腹は林檎の持つ水分でダブダブに膨れ上がっていた。しかし彼女は林檎を食べることを頑なに拒んでいた。彼女が何を嫌悪して林檎を拒否しているのかは、よくわからない。しかし確実に言えるのは、彼女が嫌悪している対象は林檎のみならず、この世に存在するもの全てであるということだった。彼女の黄色く濁った目玉は、痩せ細った皺だらけの顔面から飛び出すような格好になっており、彼女はそこから全世界に向けて軽蔑の念と敵意を発し続けていた。時折彼女は金切り声を上げたが、それが喜怒哀楽のいずれかを表しているのかは知る術もなく、また他の家族たちはそれを知ろうという努力を毛の先ほどもしようとしないのであった。

テーブルについているのは二人。一人は次男坊で、まるまると肥った腹へ林檎を詰め込むのに余念が無かった。彼は唇についた果汁を拭おうともせず、ひたすらガツガツと貪り食い、下世話な冗談を際限なくまくしたて続けている。彼の関心ごとは、快樂を得られる方法。彼は（一人の例外を別にすると、家族全員の大好物であるところの）林檎の美味に中毒していて、空腹時であろうがお構いなしで食べ続けている。彼の腹の中は、林檎が持っている水分で膨れ上がっている。彼の頭の中も同様なかもしれない。

しかし彼には、林檎よりも遙かに魅力を感じ、崇拜しているものがある。それは兄の寝台の下にあった、一冊の薄っぺらな本であった。初めてその本を開いた時、彼の目に飛び込んできたのは（少々くたびれた面持ちの）年増女たちの肖像である。彼は彼女らのけだるげな身振りとオレンジ色の色彩の中に、この上なく穢れた美しさを読み取って慄然とした。今まで退屈に見えていたこの世界の中に、まだ見ぬ背徳の悦楽が隠されているということに愕然とした。彼女たちは彼の耳に吐息を吹きかけ、彼が知らなかったものを全て見せた。それは奇跡にも似た出来事であった。彼はこの荘厳な儀式を、実に懸命な行為で締め括った―その本を、今度は自分の寝台の下に隠したのである。

次男坊の横に座っているのは、彼の母親である。母親は、実年齢よりも三十歳ばかり老けて見えた。もう何年も手入れしたことが無い、みすばらしい白髪の色である。かつて

の彼女は豊かな黒髪を持つ女であった。しかし少女時代が終わってしまふと、心配事が一つ増えるたびに白髪が一本増えるようになった。総白髪になるのに、さほど時間は掛からなかった。

母親は次男坊の横で、ぶつぶつと独り言を漏らしながらせつせと林檎を剥いていた。しかし、彼女の作業はまるつきり不毛であった。何故なら、家の者達は皮ごと丸齧りにするのを何よりも好んでいたからである。家族たちは何度も母親にその旨を説明したのだが、彼女は驚くべき強靱な意志で皮剥きを続行した。いつしか誰もが彼女を説き伏せることを諦め、無視を決め込むようになった。かくして彼女の傍らには、誰も食べることの無い剥かれた林檎とその皮が積み重なり、山が出来ていた。彼女の口からこぼれる日々の不満や心配事のシャンソンは、次男の下卑たジョークと混ざり合い、不思議なハーモニーを響かせていた。

母親の横に座っているのは、祖父である。彼は呼吸をするように文句を言っていた。天気の悪さ、空調の悪さ、家族の林檎の食べ方、孫たちの愚鈍さ、彼の批評すべき対象はそこら中に転がっていた。彼は、口をへの字に捻じ曲げ、軽蔑の眼差しを変色した目の中に精一杯湛え、鼻から笑い声を漏らしながら、小言を言い続ける。誰一人として彼の言うことを聞く者はいない。いや、それどころか、他の家族たちは、彼の存在を認識することすらしていないのではなからうか。言うなれば、彼は存在自体が不毛であった。生きていようが死んでいようが、気にも留められない人間であった。

祖父がここ何十年もかかって取り組んでいる一大事業は、一族の歴史を書くことであった。それはこの上なく素晴らしい計画であったが、彼の老いがその歯車を少しづつ狂わしつづつあった。何でもない文法や字がいつまで経っても思い出せないことや、同じ記述を二度も三度も繰り返してしまうこと、客観的省察の中にとめどもなく彼の妄想が入り込んでしまうことなどが頻発するようになった。彼はそんな自分の失態に絶望し、幾度と無く偏執狂的な推敲を実施したが、やがてそれもしなくなつた。最近では、自分が今何を書いているのかすら覚束なくなることもしばしばだった。彼自身が生きた時代に近づくにつれ、彼の書く歴史は狂気と夢幻に満ち溢れたものになっていた。まるで、本物の歴史がそうであるように。

レコードのA面が終わり、針が内周をなぞり始めた。「ホラ、レコードが終わったぞ！」と祖父は言ったが、誰もその声を聞かなかつた。しばらくして、長男が（祖父の忠告とは無関係に）音楽が止まってしまったことに気がついて、立ち上がった。彼はまず針を上げ、そして蓄音機の石炭が少なくなりかけていることを確認した（この蓄音機は蒸気機関を動力源としている）。長男はあちこちに体をぶつけながら石炭の入ったバケツを取って来て、その中身を蓄音機の中に注ぎ込んだ。

長男の後姿を見ているうちに少しばかり頭の混濁がましになったので、祖父は小言を中止し物思いに沈んだ。一家はもうずいぶんと長い間、このような生活を続けている。レコードをかけ、林檎を齧る、ただそれだけの生活を。いつからこうしているのか、全くわからない。わしらはこれからもずっと、レコードをひっくり返し、ひっくり返し、ひっくり返し、ひっくり返すのだろうか。世界が終わるまで。

いや、世界が終わるまで、というのとは間違いかもしれない。なぜなら、世界はもうすでに終わっているのかもしれないのだ。家の横の石炭も、食卓の林檎もいつまで経ってもな

くならず、裏返し続けているレコードも擦り切れない。わしらのレコードには、傷がついてしまったのに違いはない。永遠に、同じ文句を繰り返すのだろう。

再び、靄のようなものが老人の頭の中を包み込み、彼は思考を放棄した。

一家は永遠にレコードを聴き続ける。A面が終わればひっくり返してB面をかけ、B面が終わればひっくり返してA面をかける。そんな作業を（もはや時間の単位が何の意味も持たなくなった世界の片隅で）ひたすら続けてゆく。もしかすると、祖父が件の歴史書を完成させた時に、この円環は終わりを告げるのかも知れない。しかし疲弊したこの老人がいつそれを書き上げられるのか、現時点では全くわからない。

長男がレコードを裏返し、針を落とした。季節という概念のなくなった世界に、クリスマス・ソングが響き始める。

クリスマスの人参——三つの物語

メリー・クリスマス！
メリー・クリスマス！
誰も大騒ぎするものはない・・・私以外には。
HOHOHOHOHOHO！

1 村外れの物語

少年ベゴは、今朝はいつもよりも早く目が覚めた。彼は布団の中で心臓が早鐘のように鳴り、はだしの足の裏が歓びで燃え上がっているように感じた。今日がクリスマスだったからである。

ベゴは溢れ出る生命の活力を抑えきれず、寢床の中ではたばたと両足を動かした。しかし、興奮は容易におさまらず、一層その度合いを増すばかりであった。ベゴは、こんな素晴らしい朝を横たわって過ごすなど拷問以外の何者でもない、とても言いた気に低く唸り声を上げた。ついに辛抱できなくなった彼は布団を思いつき蹴飛ばして、力強く起き上がった。表で、父が立ち働いている物音がしていた。父もまたベゴと同じく、浮き足立っているに違いない（なにしろ今夜は好きだけ葡萄酒が飲めるのだから！）。

ベゴは上着を羽織ると、部屋の外に飛び出した。今日も寒い一日のようだった。玄関まで全速力で走って行き、擦り切れた泥まみれの靴に両足を突っ込んだ。表へ出たベゴは辺りを見回し、父の姿を探した。父は鶏小屋の前にいた。

「お早う父さん」ベゴは父に向かって声をかけた。「何をしてるの」

「ああ、ベゴか、お早う」と父は振り返って言った。彼は小脇に鶏を抱えていた。「もう起きたのか」鶏は何とか彼の腕から逃れようとして、じたばたともがき苦しんでいた。

「うん」ベゴは父の行為が理解できず、しゃがみこんで言った。「ねえ、何してるの」

「鶏の準備だ」と父は応えた。「お前の大好きな、チキンの丸焼きの準備だよ」

ベゴが首をかしげているので、父は鶏との格闘を続けながら言った。「お前は、オーブンを開けば丸焼きが出てくるのも思ってるかもしれないが、あれは中々面倒くさい料理なんだぞ。まずは何をさておき、鶏をシメなきゃならない。今父さんがやってることだ。次に、羽根をむしらないとな。羽根がついたままで焼いたら、口の中がモゴモゴして気色悪いぞ！（ここで父は「口の中がモゴモゴする」という状態を表現した顔つきをしてみせ、ベゴを大いに笑わせた）それから下拵えだ。塩コショウを振りかけたり、詰め物を詰めたり。その後でようやくとオーブンの中に入れて、焼き上げて、出来上がりだ。くそっ！畜生奴（この悪態は、するりと彼の腕をすり抜けた鶏に向けて発せられた。）」

ベゴは、食卓の真ん中に鎮座する素晴らしい料理と、今現在目の前で展開している父と鶏とのレスリングに本当に関係があるのか、説明を聞いた後でも今ひとつ納得がいかなかった。でっぷり肥った父に組み伏せられた鶏は哀れみを誘った。『シメ』ちゃうの？』とベゴは今しがた覚えたばかりの表現を使って父に尋ねた。

「ああ、そうだ。でも大丈夫だ、こいつはもう、卵を産まないんだからな。えいくそ！畜

生め！」父は渾身の力で、鶏の首をひねっていた。鶏の頭は出鱈目な方角を指し示し、玉が裏返っていた。まるで凍りついた蛇口をひねってるみたいだ、とベゴは思った。鶏は存外にしぶとかった。なんでこんなに弱いのに、中々死なないんだろう。ベゴはしゃがみこんで、瞬きひとつしないで父親の手の内をじっと覗き込んでいた。父親の手の動きに従って、鶏のトサカがぐるぐると回転している。抜け落ちた羽根がそこら中に散らばっていた。しまいにベゴは目を離したくても離せなくなり、少しづつ心の中に染み出して来た嫌悪感を追い払うべく、早く死ねばいいのに、早く死んでしまえばいいのにと念じ続けた。

数分間の格闘の末、ようやくと勝利の女神が父に対して微笑んだ。「やったぞ。」と父は溜息と共に言った。鶏は、父に首を掴まれたまま、全身を弛緩させ切っていた。動かなくなった鶏は、鶏ではない何か別の物体であるかのようにだった。

朝食の後で、ベゴが皿を洗い場に運んでゆくと、「ベゴ、ベゴ！」と母親が呼び止めた。母親はエプロンのポケットから数枚の銅貨を取出すと、「ちよっとお使いにいつてらっしゃい」と言った。「今晚のご馳走の材料ですよ」

ベゴは母親からもらった銅貨をポケットに突っ込むと、足早に村はずれの雑貨店へ向かった。普段なら単調でうんざりする道程も、今日は足取りも軽く進んだ。通りがかりの村人たちが声をかけてくる。「メリークリスマス、ベゴ！」ベゴは腕をぶんぶん振ってそれに応える。村人たちは精一杯のおめかしをして、来るべき祝宴に胸躍らせていた。粗末なつくりの家々も美しく飾り付けられ、世界が変わったようにすら見えた。

クリスマス——この神聖な祭典は、日々の生活に何の楽しみも見出すことの出来ない寂しい山間の村にとつて、ある種の奇跡とも言える行事であった。実際のところ、村人のほとんどは在家仏教の信徒であったのだが、四半世紀前に都会帰りの村長の息子が持ち込んだこの風習は、いつしか村人たちの間にすっかり浸透していたのだ。彼らはキリスト教について何も知らなかったが、葡萄酒を飲んで七面鳥料理を食べる楽しみはすぐに理解した。村のはずれには大きな僧院があったが、そこに暮らす僧侶たちはこの異郷の祭典を特に弾圧することもなかった。異教の祭りとは言え、村人たちにとってはいわば忘年会のようなもの、せっかく楽しげに盛り上がっている彼らに目くじらを立てて横槍を入れるのは、慈悲深い御仏の望むことではなからう、ということであった。また僧侶たちには、自分たちが身を捧げている仏教にしたって、歳月を経るうちにさまざまな異教の要素が混じりこんでいるわけで、人のことは言えない、という思いもあった。というわけで毎年この季節になると村人たちは宴を開き、ベゴは七面鳥の詰め物を買いに雑貨屋に走るわけである。

数分間の疾走の後、ベゴは無事に目的地に到着した。その雑貨店の横にはちよつとした居酒屋があり、猟師や木こりたちが集まっていた。彼らは今日は仕事を休んで、なんだかと理由をつけて一日中酒を飲んでいるのである。

「詰め物をちょうだい。それからサーモンの缶詰と、シャンパンと・・・」

店主は背後の棚から、ベゴの注文した品々を取出しては次々とカウンターの上に置いていった。店主の手の動きに従って、カウンターのの上に小高い丘が出現した。「おや！」彼は

突然困惑した声を上げた。「弱ったなあ、詰め物がねえや」

「詰め物が無いの!？」ベゴは絶望して叫んだ。

「昨日から飛ぶように売れてたからなあ。」店主は額を掻きながら言った。「でも心配は無用さ。たしか地下室にはまだ在庫があったはずだから、ちよつと見てくる」

店主は奥の扉の中に消えた。ベゴはほつと胸を撫で下ろした。ブラウン・ライスを詰めたチキンの丸焼きは、彼の大好物だったのである。あれがなけりやあ、クリスマスじゃない。何があっても詰め物が必要だよ。そう、何があってもね!

ベゴは店主が帰ってくるまでの退屈しのぎに、横の居酒屋で盛上っている男たちの話を立ち聞きしてみることにした。男たちは凍ったウサギの生肉を肴に、喉が焼けるほど強い酒を飲んでいた。

「つたくそれにしてもだな、ムタの野郎はどうしちまったんだろうな」中の一人が言った。

「あいつはおかしくなっちゃったんだよ。今日だって家の前に座り込んで独り考え事してたぜ。折角のクリスマスだつてのに!」(と言って彼はグラスの中身を一息で飲み干した)

俺は誘ってやったんだがね、一応。『よおムタ、何しけた面してるんだ。一杯やりに行こうぜ!みんな待つてるから早く来いよ』とな。しかしあいつ、立ち上がる素振りもない」

「昔から大人しい奴だったがな。最近の鬱病ぶりはちよつと異常だな」

「いつからああなんだっけ」

「あん時だよ(と言って彼はウサギの肉を食い千切った)。あん時からさ。ほら、奴が山へ行ったつきり、三日三晩帰ってこなかった時」

「ああ、あん時からか!」(と言って彼もウサギの肉を食い千切った)多分、山の中で迷って、余程恐ろしい思いをしたんだろう。」

「崖から落つちかけたのか、腹を空かせたけだものに襲われたのか、それとも山に住む化け物に取り憑かれちゃったのか——」

「あれ以来奴は山に行かなくなっちゃった」

「山へ行くどころか、何もしなくなっちゃったよ!一日中、椅子に座ったつきり、寝てんだか起きてんだかわからない眼をして、考え事だからな。」

「あの日の奴は、山へ行く前から変だったよ。(と言って彼はウサギのお代わりを注文した)俺は朝、道でばったり奴に会ったんだ。奴は背中を丸めて、逃げるような早足で歩いてた。俺は挨拶した『よおムタじゃないか!これから仕事に行くのかい?』すると奴は俺に気づくなりサツと青ざめて、がたがた震え出した。俺は奴の怯えた様子を見て、すっかり戸惑っちゃまったよ。一体どうしちまったってんだ?奴は震えるばかりで返事もしないし、何を言ってもいいのかわからなくなった俺は、奴が持つてる袋に目を留めた。たぶん弁当を入れた袋なんだが、不恰好に膨らんでいた。俺はその袋を目で指して言った。『おや、今日のお前の弁当箱は、なんだか変てこな形だな!』すると奴は二言三言当たり障りのないことを口にして『ええ、まあ』とか何とか、そして『急いでるんで』と言い残すなり、走って行っちゃったよ。(ここでウサギのお代わりが出てきたので、しばらく男たちは無言で飲み食い続けた。)それから三日間、奴は帰ってこなかった。四日目に帰ってきて以来、あのだまだ」

「喜べ、ベゴ!詰め物があつたぞ」誇らしげな笑顔を浮かべた店主が、詰め物の箱を抱えて戻って来た。

大きな包みを抱えたベゴは、ちよつと遠回りをして帰ってみることにした。無論、ムタの家に行くためである。男たちの会話が心に引つかかっていた。家の前に座り込んだなりのムタは、一体何を考え日々を過ごしているのだろうか。ベゴはムタを励まし、椅子から立ち上がらせ、村人たちの催す舞踏会に連れて行ってやろう、と心に決めた。それは至極素晴らしい考えに思えた。ベゴの周りの大人たちは、みな彼にこのような訓示を垂れたものだった―思いやりのある人間になるんだぞ。ベゴは、今日こそ思いやりのある人間として、立派な仕事を成し遂げられるだろうと確信していた。光を失った哀れな羊に、道を示してやるのだ。ベゴは胸の高鳴りに合わせて足を早めた。ムタはどれだけ惨めな姿をしているんだろう。間抜けな顔で空を眺めているんだろうな。無精ひげが顔一面に散らばって・・・それはそれは汚らしいだろう。見ようによつては、酷く恐ろしい化け物に見えるかも。ああ、一体、ムタはどんなに不気味で哀れな様子でいるんだろう、どきどきするや。

ムタの家は町外れにあった。トタン屋根とバナナの木を使って建てられた小さな家で、隣にある牧場の牛舎に寄り添うようにして建っていた。あれだ、とベゴは駆け出した。家の前に、薄ぼんやりとした影が見えた。やあ、ムタ、と声をかけようとしたベゴは、突然沸き起こってきた不安な気分のせいで立ち止まった。高揚した気分は瞬間に消え去り、遠くまでやって来てしまったことが悔やまれた。

ムタは膝と腕の間に頭を深くうずめ、汚れた頸筋を太陽に晒していた。道を吹き抜ける風で舞い上がった砂埃が体中に付着し、嫌なおいを放っていた。ベゴがどう声をかけるべきか分からずにもじもじとしていると、気配を感じたのか、ゆっくりと顔を上げた。生きてる、とベゴは思わず唾を飲み込んだ。生きてた、死んでるのかと思った・・・。

「やあ、ベゴ」とムタは言った。

「やあ、ムタ」とベゴ。「メリー・クリスマス」

暫くしてから、ムタは返事した。「そうか。今日はクリスマスか」

「そうだよ」とベゴ。「美味しいご馳走やお酒もいっぱいあるし、村のみんなは浮かれて踊ってるよ。」

「そうかい」ムタは、気のなさそうな返事をした。

「ムタもお祭りに行こうよ。」

「誘ってくれてありがとう。でも遠慮しとくよ。気分が悪いんだ」

「楽しいお祭だよ。気分なんかすぐよくなるよ」

「いや、ならないね」ムタは出鱈目な方向に目を定めて答えた。

「なんでそんなに嫌な気分なのさ」

ベゴがそう聞くなり、ムタの顔色が変わった。目は完全に輝きを無くし、顔面は蒼白になった。しまった、とベゴは思った。悪い質問だったんだ、答えられない質問だったんだ。なにか恐ろしい理由があるんだ。ムタは、真つ暗な目をベゴに向けた。ムタは精神の限界を超えてしまったのだろうか、もう秘密を隠し通す力が無くなっていったのだろうか、いや、誰にも知られたくないと思う一方で、誰かに洗いざらい自分の罪をぶちまけたいと願っているに違いない、腹の底から絞り出すような声で答えた。

「俺は赤ん坊を捨てに行っただよ」

ベゴは答えの意味がわからなかった。二人の間を、沈黙の空気が流れた。ずいぶん経っ

てから、ムタは「内緒だぞ」と言った。ベゴはうなずいた。それからさらに間があつてから、ベゴは「どうして捨てたの？」と問うた。

「要らなかつたからさ」

ベゴは、さらに理解に苦しんだ。「どうして？」

「好きでもない女に産ませたからだよ。」とムタ。

ベゴが黙っているの、ムタは早口でまくし立てた。「いいかい、ベゴ。お前のような子供にこういう話をするのもどうかと思うが……。皆が皆、赤ん坊が欲しいから赤ん坊を作るわけじゃないんだ。赤ん坊が要らないのに赤ん坊を作りたがる奴は、世界に数え切れないぐらい居て、ベゴ、お前だって大きくなったらそうなるかもしれないんだぞ（この予言にベゴは慄然とした）世の中には、愛されなくて生まれてくる赤ん坊が山のように居るんだ。世の中の恋人たちは、どうにかして赤ん坊が出来ずに済むよう、あれこれ努力をするもんだ。なあ、不思議なもんだろ」

ベゴは黙っていた。そんなこと、初耳だった。ムタは嘘をついているに違いない、と思つた。その一方で、ムタの言う通りなのかもしれない、とも思つた。

ムタは溜息をついて、項垂れた。「ともかく、俺の赤ん坊を生んだ女は、俺に責任を取るように迫つたわけだ。そこで俺は渋々ながら、赤ん坊を捨てることに同意して、山に行つたんだ。ザラメン山を知ってるか？」

「知ってる」とベゴ。「でも、行ったことはない。お父さんに危ないから行くなつて言われたから」

「ああ。お前の親爺の忠告は正しいよ。」とムタ。「欲しくもない赤ん坊が出来ちまつた連中は、みんなザラメン山に捨てに行くんだ。別に掟や法で決まってるんじゃないが、いつの間にか、そういう習慣が出来上がつちまつたんだ。俺も話に聞いていたんで、ある日、山仕事に行く振りをして、ザラメン山に向かつたんだ。」

風が吹いて、砂埃が巻き上がった。隣の牛舎から、ムツとするような臭いが漂つてきた。

「俺はザラメン山の険しい山道を必死で登つて、山頂付近まで辿りついた。なるべく、頂上に近いところで捨てようと思つたんだ。俺は弁当を入れる袋を開いて、弁当じゃない肉の塊を取出した。そして、そつと地面に降ろそうとしたら、そいつが手から離れないことに気付いた。」

俺はパニックになりながら、なんとかしてそいつを手から離そう、離そうとして努力した。腕をぶんぶん振り回しさえした。しかしうまくいかなかった。そいつが離れようとしなにか、俺が離そうとしないのか、それすらも判然としなくなつていた。そして、俺はあんまり暴れたものだから、足をすべらせて、山の斜面を30メートルばかり転げ落ちた。ぐるぐると回転する景色を見ながら、死ぬかもしれない、俺はそう思つた。仕舞いに俺は折れた木にひっかかつて、ようやくと止まつた。

混濁した意識の中で、俺は注意深く手足を動かしてみた。幸いにも、何処も折れていなかった。次に頸をそろそろと捻つて、手の先を見た。赤ん坊は無くなつていた。よかつた。俺は安堵の溜息を漏らした。

暫く俺はそこに横たわつたままで、体が回復するのを待つた。だんだんと意識もはつきりとしてきて、目もよく見えるようになった。俺は恐る恐る、辺りを見回してみた。すぐ目の前に、酷く薄暗い洞窟が口を開けているのが見えた。そして奇妙なことに、その洞窟

の中から、泣き声のような音が微かに聞こえてきて、灯りのような、火のようなものがチラチラと虚空を漂っているのがわかった。何だろうあれは、俺は全身の鈍い痛みを我慢しながら目を凝らした。

その時、何か、得体の知れない力が、俺の背中を強く押した。俺はつんのめるようにして洞窟の中に這って行った。俺は朦朧とする頭の中で、嫌だ、いやだ、と繰り返して叫んでいた。この穴の中に入るのはいやだ！——しかし、俺の意に反し、俺の手足は俺の胴体を洞窟の中へ運び込んでしまった。

洞窟の中は、石ころでいっぱいだった。こんなに大量の石ころは見たことがなかった。俺は思わず息を飲んだ。俺は不穏な胸騒ぎを覚えながら、その石ころの山をまんじりともせず眺めていた。暫くそうやって金縛りにあったように動かないで居ると、突然、血の気が引いた。これは、石ころじゃない。

石ころのような物体は、何百、いや何千もの赤ん坊の死体だった。痩せぎすの猿のような赤ん坊もあった。まるまる肥ったのもいた。もうすでに白骨になっているものも、朽ち果てたものも、腐り始めたばかりの生々しいのもあった。何十年、何百年にも渡って、血塗られた親どもがこの山に投げ捨ててきた、何千もの赤ん坊たちが折り重なって、山となり、俺を見つめていたんだ。

遠のいていく意識の中で、俺ははっきりと聞いたんだ。洞窟中にこだまする、何千、何万もの嗚れ声が、一斉に俺を『オトウサン』と呼んだのを——

語り終えると、ムタは、最初していたのと同じように、膝と腕の間に頭を深くうずめ、汚れた頸筋を太陽に晒した。暫く経ってもベゴが動かないでいると、突然顔を上げて、叫んだ。「話は終わりだ！——さっさと消えちまえ、ウスノロが——」

「遅かったわね、ベゴ！あら、どうしたの？浮かない顔して」台所から母親が出てきたが、玄關口に立ったベゴは一瞥を加えただけで、物思いに沈んだまま自分の部屋に戻った。時折、忙しく立ち働く家人たちとすれ違った。彼は今までと違った眼差しで彼らを眺めた。この人たちも、ひよっとすると、影ではおぞましい罪を犯しているのだろうか。人知れず山の窪地に子供を捨て去るような、おぞましい罪を。彼らが見せる素朴な愛情の裏には、一体何があるのだろうか、それはもしかしたら、背筋が凍りつくような暗黒の世界なのだろうか。陽気な母親も、たくましい父親も、優しい娘たちも、飄々とした老人たちも、燃えたぎる背徳の炎を押し隠して生きているのだろうか。人間は誰しも、救いようの無い存在なのだろうか。そして、自分の生きているこの世界、今までは幸せな世界だと信じて疑わなかったこの世界は、本当は血に塗れたものではないのだろうか。この世界には、何千、何万という数の、信じられないくらいに残酷な出来事が起こり続けているのではなからうか。あの山の、赤ん坊の死体でいっぱい洞窟のような場所が、いくつもいくつも、口を開いて、からからと哄笑しているのではないだろうか——

祭典は夜を徹して行なわれた。真昼の太陽のごとく眩しい光を放つ装飾の下で、着飾った村人たちは酔い痴れ、踊り、幸せに浸っていた——たった二人の人間を除いては。12時を回ると、子供たちは帰らされ、ベッドに寝かされた。サンタさんが来てくれるからね、いい子にしないとプレゼントがもらえないわよと、と親たちはむずがる子供たちを宥め

すかして、家に連れて帰るのだった。ベゴは毎年、僕はまだ寝ないんだ、僕も父さん母さんと一緒に、この後大人たちだけで催される舞踏会に出るんだと駄々をこねては母親を手こずらせたものだが、今年は大人しく母の手に引かれて家に帰った。ベゴの部屋は、色とりどりの紙で作ったモビールが飾り付けられ、家で一番大きな靴下が壁に吊るされていた。ベゴは柔らかな布団に身を埋めて、眠りに落ちる瞬間を待った。今年は、モビールが揺れ動くさまを飽きることなく眺めたり、サンタを待っていつまでも起きていようと頑張ったりすることもなかった。彼の心を別のものが捉えていた。世界は、愛されない子供たちで溢れかえっているのだろうか。誰の愛も受けないで死ぬということは、どれだけ悲惨なことなのだろうか。そして、今日ムタが予言した通りに、遠い未来のいつの日か、自分もまた、愛せない子供を産み落とす残忍な親の一人になってしまうのだろうか――。

2 英雄の物語

国境線の近く、荒野原が広がっている。山は遠く灰色に霞んで、時折吹く風は枯れかけの木を気紛れに揺さぶっている。そこに一軒の居酒屋が（置き忘れたかばんのように）ひっそりと在った。

空の彼方からシャンガラン、シャンガランと鈴の音を響かせて、奇妙な一団がやって来た。その団体は十数頭に及ぶトナカイと、赤くて間抜けな衣装に身を包んだ老人によって構成されていた。彼らは徐々に旋回しながら着陸し、着陸すると点呼を済ませた。「よし。全員いるな」と老人は満足げに言っつて、真っ白いアゴヒゲを撫で付けた。「それでは前夜祭を始めるが、お行儀よくするんだぞ」そして彼らは居酒屋のドアを開くと、威勢よく鈴を振り回して、がやがや騒ぎながら中に入って行った。

店内には中国人マスターの李白、そして悩める数学者アルキメデス。（この二人がやっていることはいつも同じである。李白は客そつちのけで樽酒を盗み飲み、アルキメデスはお冷も口にせずひたすら石板と戦っている。ちなみに今宵のアルキメデスは最初から最後までひたすら計算に明け暮れていただけで、特に何も目立ったことをしなかったため、描写は割愛する）それから一人の気難しそうな男が、カウンターの隅でブランデーを飲んでいた。「これはこれは、セント・ニコラスさん！」李白がいそいそと厨房から出てきた。

「お久しぶりですなあ」

「一年ぶりだからなあ」老人は、真っ赤な三角帽子を取って、どっかりと腰を下ろした。

「今日はゆっくり飲んで行かれるんで？」

「いや、この後でちよつと仕事があるんでね、運送業の。あんまり酔っ払うわけにいいい」

「それは残念」李白はパン、パンと手を打ち鳴らしながら言った。「それじゃ、何にしましよう」

「私はリキュールを。お前らは何を飲む？」（と、老人は背後にずらりと並んだトナカイたちに尋ねた。）「シャンペンと草をいただきます」（とトナカイは異口同音に言った）

「少々お待ちを」李白はエプロンの下でもみ手をしながら、奥に引込んだ。老人はカウンターにトナカイを一列に座らせ、自身は長椅子に悠々と腰掛けた。「しまった。葉巻を切らした。誰か持ってないか？」トナカイのうちの一头が、望みの品を差し出した。老人は礼を言っつて受け取り、肺一杯に汚れた煙を吸い込んで、しばし幸福そうな表情を浮かべた。そして彼は、カウンターの隅で酔いつぶれている、悲哀に満ちた男に呼びかけた。「よお、大将！なんだつてそんな不景気そうにしてるんだい」

男はうな垂れたままで答えた。「余は、祖国を追われたのだ」

「一体どうして？赤狩りかい？」

「いや。赤狩りではない。男が着ている軍服は、酒と泪と涙にまみれていた。

「確かにあんたは、コミュニケーションには見えないな」と老人は頷いた。

「草は生で？それとも干したやつ？」厨房の奥から、李白の声。トナカイたちは点でバラバラに希望を述べ立てた。「生！」「干し！」

「スペインの潰瘍が、余を破滅に追い込んだのだ」男は押し殺した声で言った。

「胃潰瘍やったのかい。そりゃあお気の毒に。わしも昔やったよ。手術の痕、見てみるかい？」

「いや、結講」

「潰瘍を患ったんだったら、そんなに飲んじや体に毒だよ」

「潰瘍と言うのは言葉のあやだ！」男は力任せにカウンターを殴りつけた。

「これは失礼」と老人は肩をすくめた。「どうもウィットに富んだ会話は苦手なもので」

「お待たせしやした」とそこに、李白がリキュールの入ったグラス、山のようなシャンペンの瓶、それに草が詰め込まれた袋を抱えてやって来た。「景気よくやりましょう！」そして袋の中身を床一面にぶちまけた。

「それでは・・・こらこら、まだ食うな」リキュールを高く掲げて長椅子の上に立ち上がった老人は、年甲斐にもない興奮とともに乾杯の音頭を取らんとした。「メリー・クリスマス！世界中のろくでなしに愛を！地には平和を！グラスにはリキュールを！その他いろいろおめでとう！」そしてトナカイたちの盛大な拍手（蹄のぶつかり合う、不思議な響き）と鈴の喧しい音色に包まれながら、一息でグラスを空にした。熱狂したトナカイたちは一斉にシャンパンを開け、コルク栓が四方八方に飛び散った。トナカイは床を埋め尽くしている草の山に鼻面を突っ込み、お互いにシャンペンをかけ合った。李白は半ば呆れながらも拍手喝采した。どうせなら配達の後で盛上ればいいのに・・・。

彼らの輝かしいパーティーは、大盛況のうちにお開きとなった。（トナカイたちの素晴らしい食欲によって、床の草はきれいさっぱり無くなっていった）「それでは、お勘定。」老人は銀貨を数枚カウンターに置き、「それから」と背中に背負っていた袋から、ロマネコンテイを取り出して言った。「クリスマス・プレゼントだよ」

喜びと感謝の念を表す即興詩を立て続けに詠んでいる李白を無視し、老人はカウンターの隅で虚脱している男の背中を見つめていた。可哀想に。彼は余程大きな夢を見たのだろう。そして、それに押し潰されてしまったのだろう。彼もまた、歴史に弄ばれた、一人の道化であったのだ。何か励ましの言葉をかけたかったが、何も思いつかなかった。そこで老人は袋から一冊の本を取り出した。いいかい、（と老人は心の中で呟いた）今後あんたが人生に絶望した時は、この本のことを思い出せ。あんたは、自分が死んだ後も生き続ける仕事をしたんだってことをね。か細い寝息を立てている男の傍らにその本を置くと、老人は店を後にした。

この一冊の本はその後、近代的法典の基礎となり、世界中に多大な影響を及ぼすことになるのだが、それはまた別の話である。

3 浮浪者の物語

クリスマスの街は輝いていた。余りに眩く輝いていたために、全ての不幸せが見えなくなっていた。俺は空腹が高じての胃の痛みを抱えて、のろのろと道路を横断していた。街角には、真綿で作った付け髭を付けたサンタ・クロースが、屈託の無い笑顔を浮かべてガラガラとベルを振り回していた。「メリー・クリスマス！ホー、ホー、ホー！」彼は道行く人間たちにそう呼びかけていた。俺が彼の前を通りかかった時、彼は一際大きくベルの音を立てて、その文句を言ってくれた。「メリー・クリスマス、お爺さん！ホー、ホー、ホー！」

—俺はまだ二十過ぎだ。お爺さんではない。しかし、仕方のないことだ。空腹に敗れた胃を抱えて背中を丸めた俺の足取り、そして、ゴミ箱をはしごするうちにすっかり汚れてしまった俺のアゴヒゲは、確かに老いぼれた山羊そのものに見えたことだろう。ポケットには、空っぽのウキスキーの瓶。この瓶に開いていた穴は、買った時からあったもののだろうか。

シャツ一丁の我が身に、塩辛い寒風が染み渡った。さすがに、今晩は橋の下で眠るわけにはいかないようだった。あの騒々しく心地よい夏が、こんなにも遠くに去って行ってしまったのは思ってもみなかった。俺は昨日の夜、あまりの寒さに耐えかねてコートを燃やしてしまったのだ。火はすぐに消えた。俺はガチガチと歯と歯をぶつけ合いながら、炭化したボロ布に諦めもせず手をかざしていたものだ。あんな夜は二度と過ごしたくない。二度と。美しい思い出にすらなりやしない。

復員兵と傷痍軍人の一団が、道端で管楽器を演奏していた。ひどく陳腐で、涙が出るほど懐かしい曲をやっていた。俺は自分がぼろぼろと涙をこぼしていることに、暫くは気付かないでいた。俺は想像上のコントラバスを担いで、喘ぐようにして道を歩き始めた。まるでジェリー・ルイスのような、滑稽な歩き方をしながら。

「メリー・クリスマス、ホー、ホー、ホー！今夜はとくべつ寒い夜だから、ウオッカが美味しいわよ！」前方で若い女の声がしたので、俺は顔をあげた。その女は安い火酒を売る屋台の前で、大きな看板を体の前後にぶら下げて声を張り上げていた。「ちょっと、おじいさん！」と彼女は俺を呼び止めた。「一杯どう？」

「俺はおじいさんじゃないよ」俺はいい加減うんざりして言った。

「じゃあ、お兄さん」と彼女はグラスを俺の目の前に突き出して、言った。「半端ないほど、暖まるわよ」

俺は懐を寒くして、彼女のグラスを受け取った。燃えるように熱い『神様の涙』が俺の喉をつたい、四肢の隅々にまで染み込んだ。最高だ、と俺は思った。これで、もう暫くは生きていられる。

サンドイツ・ウーマンは、先刻とは毛色が変わった目つきをしながら、俺の耳元で囁いた。甘ったるくて、ほんの少しだけネギくさい息が俺の顔にかかった。「別料金、払う気がある？」

「払う価値があればね。」

「払える額だったら、でしょ」女は鼻で笑って、値段を告げた。珍しいくらいに安い額であることは確かだったが、俺の残りの所持金（全財産）とぴったりだった。

暫く考えた後、「オーケー」と俺は答えた。「これで、本当の文無しになっちまうけど、もういい

や。今夜はとくべつ寒いようだしな」

女は俺を連れて裏通りに入った。ひんやりとしていて、同時に生暖かくもある奇妙な風が、路地を通り抜けて行った。彼女は、汚い宿の腐りかかったドアの前で立ち止まり、振り返った。

「いいこと」女が囁いた。「30分、きっかりよ」

言葉通り、8時半に始まって、9時に終わった。俺はラフレシアの形に似た壁のしみを見つめながら、追加料金を払わないでもう30分間ここに居てもいいか、と尋ねた。彼女は肩をすくめて答えた。「しょうがないわね。まあ、いいわよ。」そして、煙草に火をつけながら付け足した。「あたしも思ったより疲れちゃったしね。でも、もう何もなしよ」

彼女は立ち上がって、隣の部屋に消えた。俺は彼女の後姿をぼんやりと眺めた。街角に立っている時には気付かなかったが、彼女はひどく痩せこけた体をしていた。何百人もの人間が、何も残すことなく彼女を通り抜けて行ったのだなあ、と俺は思った。

戻ってきた彼女の手には、野菜のスティックが入った容器が握られていた。彼女は再び布団の中に滑り込み、俺に「食べる？」と尋ねた。

「種類は？」

「人参があるわよ」

「他のものは？」

「大根が少し」

「じゃあ、人参をもらおうか」

彼女は容器から一本抜き取り、俺に啜えさせた。鼻に抜ける、ツンとした辛さ。「これ、大根だよ」

「ああ、ごめんごめん」彼女は（今度こそ本当に人参をつまみ上げ）俺に渡した。

「何だか、こういうやり取りを何処かで見ることがある気がするな」人参を齧りながら（それは実に甘くて美味しい人参だった）俺は独り言のように言った。

「ベケットよ」と彼女。

「そうだ、『ゴドーを待ちながら』の中にこんなシーンがあったな」そう言い終わって五秒後、俺は彼女の口からベケットの名前が飛び出したこと意外性によろやと気がついた。「よく知っているな！」

「まあね」彼女は大根を齧り、その辛さのために鼻を抑えた。「ねえ、仕事はなにやってるの？・・・というか、仕事はあるの？」

「あるさ。家は無いが」と俺。

「どんな仕事？」

「つまらない仕事だよ、ゲイジツ関係のね。」俺は（再び挑戦した）大根の辛さに辟易しつつ答えた。「給料は全部酒に変わっちゃうよ。本当に全部そっくり、酒になっちゃうんだ。さっきあんたに払った金も、全部ワインにする予定だったんだ。おかげで下宿も追い出されて、今ではホームレスだよ。まあ、それでも、職があるだけマシなんだろうけどね。本当はローマ帝国の貴族になりたかったんだがね」

「あんたに貴族なんて似合わないわよ」彼女は腹を抱えた。

「似合わない者になりたがるのさ、誰しもね」

俺は溜息をひとつついた。

「なあ、なんのために生きてる？」と俺は尋ねた。

「看板を背負うためかしらね」

「なんのために看板を背負うんだ」

「生きるためによ」彼女は咳き込みながら答えた。「生きることの意味、なんてくそくらえよ。なんでもかんでも理由付けができるってもんじゃないわよ。どんなうまい説明を持ち出して来ても、私は絶対に納得しないからね。生きることって、ただただ理不尽なだけよ！私はそんな理不尽な人生を、ありのままに受け入れていくだけよ」

俺は肩をすくめて、新しい大根を口にした。今度のは、我慢できないほどの辛さだった。涙が出た。「もう人参はないの？」「残念ながら。」

俺は彼女に、「悪いけど、水もらえるかな」と頼んだ。

冷たい水を飲むと、生き返る心地がした。俺は胸の中に広がる素晴らしい爽快感を味わいながら、先ほど30分に渡って展開していた「情熱的な」行為の思い出に浸った。この痩せぎすの女が、あれほどのエネルギーを隠し持っているとは。「V2ロケットでも落ちてくるかと思ったよ。」

「トマス・ピンチョン著『重力の虹』より引用」彼女は笑いながら言った。「ねえ、あんた、引用するのはいいけどちゃんと読めたの？あの難しい本を」

「君はえらく文学のことにくわしいんだね」俺は半ば呆れて言った。

「ベケットもピンチョンも常識でしょう」と彼女。

「図書館に勤めたらどうだ」

「その必要はないわね」彼女はするりと布団から抜けると、立ち上がってガウンを羽織った。「ついでいらっしやい」

階段は地下室に続いていた。彼女は重たい扉を、ゆっくりと時間をかけて開いた。開かれた扉の間から、古びた紙とインクの匂いが溢れ出てきた。「さあ、お入りくださいませ」と彼女はおどけてお辞儀をした。

俺は息を呑んだ。その広大な地下室には何千個という本棚が整然と置かれ、古今東西の書物がずらりと並んでいた。誰もが知っている名著もあれば、不遇な無名作家が残した廉価本もあった。

俺は震える足取りで、憑かれたように本棚の間を歩き続けた。

「すごいよ」ほとんど失語症に近い状態に陥っていた俺は、そう繰り返すのがやっとだった。「すごいよ、本当にすごいよ」

「私はこれらの本を全部読んだわ」俺の後ろで彼女が言った。「いくら読んでも、どんな答えも得られなかったし、それどころか、読めば読むほど色んな疑問が増えてゆくばかりだった。」彼女はここで目を閉じ、夢見るような口調で言った。「でも、それはすごく楽しい作業だったわ。不毛な作業かもしれない、でも私にとっては、この上なく素晴らしい遊戯だった。このかび臭い、紙切れを束ねただけのがらくたの向こう側に、どれだけ飲みに満ちた世界が広がっていることか！」そして彼女は目を開いて、言った。

「毎晩、たくさんの人たちが私の中を通り過ぎてゆく。そして毎晩、たくさんの本が私の中を通り過ぎてゆく。そう、そんな風にして私は生きているのよ。」

（俺は、本棚から一冊の本を取り出した。書名には『夢遊という散策』とあった。見慣れぬ本だった。）

約束の時間が過ぎた。俺は再び通りに戻って、艶やかに飾り付けられた街を行く当ても無くさまよった。たくさんの人々が行き交っていた。みんな、それなりの重みを背負ったまま、何処から来て、何処へ帰ってゆくのだろう。俺は飽きもせず、雑踏をたゆたい続けた。

青白い顔をした男が、子供らを集めて人形劇をやっていた。空腹を友人にしてしまった貧しい天使たちは、目を輝かせて救済劇に見いつていた。小さな舞台の上に身をかがめた男は無気力な目をしていたが、人形はいきいきと跳躍していた。俺は石畳の上に胡坐を描いて、子供らの頭越しに奇跡の一部始終を見守っていた。

やがて、主人公の少年が天に召され、幕となった。子供らは興奮冷めやらぬ様子で、ちりぢりに帰って行った。俺は拍手をしながら男に歩み寄って、言った。「ブラボー。いい芝居だったよ」男は、神様の人形に目を落としながら、つぶやく。「神様なんか、いやしないよ。あんた、どう思う？」

「多くの人が気の無いクリシエを投げつける、荘厳で、滑稽で、退屈な飾り付けの中には、いないだろうね」俺は言った。「しかし、あんたの客の子供たちには、ちゃんと神様が見えてただろうよ。」

男は、静かに言った。

「俺は神様なんか信じちゃいないんだ。教会も賛美歌も大嫌いだよ。でも、俺は時々、ひどく困った時だとか、心配でたまらない時、やりきれない時には、我知らず祈ったり、お願い事したりするんだ。一体誰に向けてそれをやってるのか、自分でもわからないんだ。そのわけのわからん相手、でも、俺の躁言を黙って聞いてくれる相手、ひよっとすると、それが神様と呼べるものなのかもしれないな」

「あんたは立派な信徒だよ」と俺は言った。「メリー・クリスマス」

俺は一体どれだけのものを、ちっぽけな焚き火の中に捨ててしまったのだろう。出鱈目に歩くうち、何かにぶつかった。見てみると、それはみすばらしい飾り付けをされたクリスマス・ツリーだった。俺はそれを背もたれにして座り込んだ。

上を向くと、冷たい風が肺の中に入ってきて、呼吸が楽になった。夜空いっばいにトナカイの絵が、下手くそな筆遣いで殴り描かれていた。子供たちが眠りについたんだ、と俺は思った。夜空いっばいのトナカイを夢見ながら。

ああ、サンタさんよ、俺にも何かくれよ。俺はよい子じゃないんだけれども。俺は、あんたが昔くれたはずのものを全部、何処かに無くしちゃったんだ。靴下に、大きな穴が開いてたんだ。

ああ、神様、俺を見てるのかい？俺はあんたに何もあげられやしないんだ。酒ですっかり阿呆になっちゃった俺にはもう、せいぜいこうやって無駄話を物語ることでぐらいいしか出来やしないんだ。だから神様、ほんの少しばかりでいいから、俺にお情けをかけてくれ。だから神様、ほんの少しだけでいいんだ、俺にお情けをかけてくれ。

だからみんな、メリー・クリスマス、お休み。

第五章 死

我死なば 形見に残すものはなし 白雲悠々 山河遼々

— 夢野久作

泡風呂での対話

次に目を覚ました時、私は幸運にも生きていた。目覚めて暫くの間は、何が何やら分からず、恐らく自分はもう死んでしまったのだろうと思っていた―しかしよくよく考えてみれば、死んでいるならば目覚めるわけが無い。朝の冷気を足の先に感じた。悪寒ではない、冷気だ―。私はゆっくりと手を伸ばし、自分の額に触れた。汗が乾いた後に特有の、サラサラとした手触りを感じた。

私は、ようやくと心地よい夏の日差しを享受できる体に戻れた事を悟り、安堵の吐息を漏らした。枕もとの茶を一口飲み、この上ない満足感に浸り切った。部屋の隅に影が揺らめくのが見えた。大きな鎌のようなものを背負った黒づくめの大男が、部屋を出て行くところだった。

私は勝ったのだ！

退院の前日、(今度こそ) すっかり気分が良くなった私は、悪寒にうなされている間に見た幾つかの悪夢を基にし、何本か小説を書くことにした。悪夢、まさに悪夢である。あの厄介な家族が少しだけ装いを新たにして再登場したし、悪寒に包まれた私は季節を取り違えクリスマスを幻視する有様である。

午前中一杯かかって、二本の小説を書き上げた。書き上げてみると、殆ど夢の原型をどめていない、ややこしく込み入った話になったが、別にかまいはしない。私はこの二本をまとめて『クリスマス・キャロット』なる題名を付けた。それでもまだ物語が走り続けているような気がしたが、それはまた今度書くことにして(明日、帰りの新幹線の中でも片付ければよいのだ)、取り合えず昼飯を頂こう。

油揚げと菜っ葉を薄味で煮たもの、それから味の無いマッシュポテトサラダと少量のご飯、という如何にも健康によさそうな食品を、私は無表情でたிரらげた。東京に戻ったらまずビールの大ジョッキを、そして血の滴るようなステーキを、と心に決めた。

食後の散歩がてら病院内をうろついているうちに、私は自分の体が耐えがたく不潔であることに気がついた。そう言えば、もう何日も風呂に入っていない。ポマードを付けた訳でもないのに、髪の毛が光沢を放ちながら固定されているような有様だ。私は通りがかりの看護婦に、風呂はないかと尋ねた。看護婦は手術器具を抱えて走っていたので、急ぎの用があったのかも知れない(いや、あったのに違いない)。彼女は苛立ちを押し隠すことにもせず、別棟の二階にごさいますと吐き捨てるように言い放ち、また走り去った。その時に巻き起こった風は、強烈な大蒜とアルコールの臭いがした。もっと胃を大事にしろよ、看護婦なら、と私はぶつくさ言いながら、風呂を目指して旅に出た。

風呂は私の予想を遙かに上回る立派さ・仰々しさであった。ジャクジーがあり、薬湯があり、岩風呂を模した風呂があり、サウナがあり、水風呂があり、そしてでっぶり肥った中年男たちがいた。これはまさに、典型的な「1980年代後半に勢いで作られたレジャー施設」だ、と思った。人里離れた山間に佇むこの病院には、バブルの吐いた息がまだに沈殿しているのであろうか・・・？

私はジャグジーに浸かって、すぐ横にある薬湯に入っている中年男二人とたわいもない世間話をした。ご職業はなんですかと問われたので、小説を書いておりますと答えたところ、一人は興味を示しても一人は示さなかった。(便宜上、示したほうをフィッシュ、示さなかった方をチップスと名づけておく。特に深い意味は無い)フィッシュ&チップスは薬湯から上がり、ジャグジーに入ってきた。たちまち、泡の混ざった湯が大量に溢れた。「いやあ、実は私も昔、高校の時にですね、小説を書いていたことがあるんです」フィッシュ氏が顔を輝かせて言った。

「ほほう」と私は答えた。

「どんな小説を書いたんです？」とチップス氏が気の無さそうな声で尋ねた。

「いやあ、ちよつとした、青春物をね」フィッシュ氏の鼻の穴が、少し広がった。「部活内の三角関係を巡る、その、恋愛物と言いましようか」

中年男が、自作の青春小説について語ると言うシチュエーションは、この上なく痛々しく気色悪いものである。(チップス氏は困惑と軽蔑と恐怖が程よくブレンドされた表情を見せた)しかしフィッシュ氏は、そんなこと気にしない。

「私はテニス部だったんですが、実に魅力的なマネージャーがいましたね、その子をモデルに書きまして」

「ご自分のご経験も盛り込まれて、ですか？」私は下世話な顔を作って尋ねた。

「いやあ、さあ、それはどうかな。」フィッシュ氏はご満悦である。「とにかく、私はその小説を学校の文芸コンクールに応募したのですが、見事最優秀賞を獲得しましたよ」

私も来世では彼のように、何の躊躇いもなく自慢話をするような豪傑になりたいものである。まあ、それはともかくとして、そう言えば俺の高校でもあったなあ、小説のコンクールが。何をとち狂ったのか、俺も応募してみたものだ。あえなく玉砕したが。あの時に一等をとったのはどんな小説だったけなあ。そうそう、青春物だった。部活内の二股関係を巡る、恋愛物。たぶんフィッシュ氏が書いたのとほぼ同じような作品だったのだろう。

「私は小説を書くどころか、読むことすらあまりしない人間なんですがね」とチップス氏が言った。「この病院にいる間、あんまり退屈したんで一冊読んでみましたよ。」

「どんな本ですか？」とフィッシュ氏。

「タイトルは忘れました。主人公は、遺産で食ってる無職の男です。街へ行ってレストランドのバーに入ると、必ず女性をものにします。結果的に五人くらいの子と付き合うことになります。そんなに魅力的な男には思えんですがね……。さて、何不自由なく遊んで暮らしているのに、彼は色々精神的な問題で苦悩します。女たちは彼を一生懸命慰めます。彼は優しくされればされるほど、すげなく彼女たちに当たります」

「そういう小説はよくありますよ」と私は言った。「勞せずになを落とせる、無職の無神経男はひとつのロールモデルですな」

「何なのでしよつかね、そんな小説って」

「本当に、何なのでしよつかね」私はチップス氏に共感していた。

「恋愛小説、というのもよくわかりませんな。若い二人が出会えば物語が始まる、といった安直な話。何ですかあれは」

「愛を描く事は人間の業のようなものです。」と私は言った。「恐らく、芸術の歴史において最も多く取り上げられたテーマは、愛でしょうな。ですから恋愛小説は過去・現在を通

じ書かれ続けるわけです」

「愛を描くのは結構ですが、愛を描いていない恋愛小説というものが氾濫してやしませんか」とチップス氏。「私は先刻言ったように、あまり本を読む方ではないので、いい加減な意見かもしれません。しかし、私が今までにした数少ない読書体験から考えてみますと、恋愛小説は『恋愛』ではなく『恋愛の様式』を書いたものの方が多い気がします。様式化された恋愛など、恋愛と呼べるのでしょうか。」

「なるほど。では、恋愛小説ではなく、様式小説とでも称すべきですかね！」

フィッシュ氏が大笑いした。どうやら私が皮肉を言ったのだと勘違いしたらしい。

「まあ、それはごく些細な問題なのですがね」とチップス氏は泡の中に身をうずめた。

「複雑化した情報化社会に生きているせいかな、私には小説と言うものの意義がよくわからないのです。確かに十九世紀までは、小説という表現は世界を語るのにふさわしい手法だったことでしょう。二十世紀においては、世界を語る手段としての小説の価値は暴落してしまつたにせよ、破壊すべき遺産がまだ存在していました。しかし今は二十一世紀なのです。無秩序のフラクタルな世界なのです。そんな世界に対し、小説が何をし得るのか、わざわざ小説という表現を使う意義が何処にあるのか、いまいち私にはわかりません」

チップス氏は立ち上がった。「さてと、もうのぼせそうなので、お先に失礼します」

チップス氏が脱衣所に消えた後、フィッシュ氏は下卑た笑顔を浮かべて、私に囁いた。

「小説の意義を理解できないとは、彼は哀れな人種ですねえ！」

私は黙っていた。

暫くして、フィッシュ氏は私の執筆中の小説について質問した。

「今お書きになっているのは、短編小説ですか。長編小説ですか」

「短編といえば短編ですし、長編と言えば長編ですな」

「どっちなんですか」

「私にはわかりません」

フィッシュ氏は戸惑いの表情を見せた。

「ひと様にとつては大問題かもしれませんが。しかし私にとつてはね、短編なのか長編なのか、主人公は誰なのか、どのジャンルに分類されるものなのか、そんな事はどうでもよいのですよ。私とはかく一冊の本を書くことを考えているのです。」

もっとも、私は最初は短編集を意図していました。しかし、この病院で、隣に寝ていた老人から数珠をもらつて以来、へんな考えにとり憑かれるようになってね。互いに繋がっているんだかいらないんだか分からない話でいっぱいになった本、そんな書物を作ってみたと思つたのですよ。丁度、この世界の縮図のような。てんでばらばらに存在している雑多なものが、不確かな関連性でもって有機体を構成している、わけのわからないこの世界の縮図のようなものをね」

「なるほど」さっぱりわからん、という顔でフィッシュ氏が頷いた。

「では、その本の属性について教えてください」

「それも私が語るべき問題ではないですね。その仕事は、世の中に大勢いる、『物事を理解することが何よりも好きな人々』に任せておくことにしましょうよ。彼らは他人の言葉を借りて、他人の言葉について語ることが何より好きな人たちです。彼らはあらゆるものの属性に関して、幾つもの見てくれの良い名称を考え出しながら、必ずや素晴らしい説明を

してくれるはずですよ」

「では、荒筋を——」

「私の本の荒筋など、聞くに足らぬものですよ。代わりに、梶井基次郎の『檸檬』の荒筋を教えてあげましょう。男が、レモンを本屋に置いてゆく。はい、おしまい。次はドストエフスキーの『罪と罰』の荒筋を教えましょう。男が、老婆を殺して、自首する。はい、丁上り。次はカフカの変身です。男が、虫に変身して、色々困る。はい、次はプルーストの『失われた時を求めて』。男が、色々思い出す。さあ次は……」

「もう、もう結構です」フィッシュ氏は手を振って言った。

「良い荒筋を聞こうとするよりも、いっそ読んでしまったほうがいいですよ」私は立ち上がった。「とにかく、この世界は要約が不可能なものなのですよ」

私はフィッシュ氏を残し、ジャグジーを出た。

脱衣所に向かう途中で、私は水風呂の傍に座り込んでいる、異様な目の輝きをした痩せっぽちの男を見かけた。彼の今にも折れそうなアバラと、死滅した皮膚の色を見る限りでは、彼の余命は殆ど残されていないように思えた。彼が何処を見ているのか、私にはわからなかった。焦点が定まっていなかったのである。しかし、途方もなく遠くを見ているらしいということだけは、窺い知れた。

彼は私のほうを向いて、会釈をした。私も慌てて挨拶をした。

唐突に、彼は言った。

「私はつまらない人生を生きてきた者ですが、最近ようやくと、楽しみを見つけましてね。」

「それはなんですか」私は少々面食らいながら問い返した。

彼は答えた。「夢遊という散策です」

翌日、私は病院を後にした。ついでに、この田園都市も後にした。発車ベルが鳴り響く中、私は新幹線の座席に身を埋め、ビールの味を夢想していた。そのうちやってくるであろう売り子のお姉さんから安物の缶ビールを買うという手もあるが、それではどうして盛上れそうにないな、と思う。一揺れして、列車が動き出す。寂しいぐらにあっけなく遠ざかって行く窓の外の風景を横目で眺めつつ、私はパソコンを立ち上げ、小説を書き始める。入院中に構想した、とある怪僧が主人公の小説だ。彼の名前はソルガという。

くらげの骨に出逢った僧侶の物語

1

不穏な空気が立ち込めていた。村一番の高僧であるゾルガが、もう長くないようだという噂が広がりつつあったのである。村人たちは畑で、街角で、床屋で、居酒屋で、路上で、この芳しくない話題について語り合った。普段は彼をインチキ坊主呼ばわりしていた連中や、宗教には全くの無関心であると明言していた人々までが、ゾルガの容態を心配して浮かぬ顔をしていた。とどのつまり、彼は愛されていたのだ。

ゾルガは、名僧と称される一方、類まれなる奇僧であるとも目されていた。彼は専ら、その奇行によって村一番の有名人たる地位を獲得していた（もつとも、そんな地位は彼にとって煩わしいばかりであったのだが）。

幼年時代の彼は、釈迦の再来とすら思える数々の伝説（経文が書かれた珠玉を握って生まれてきた／頭から落馬した時、傷一つ負わなかった／七歳まで一言も口をきかず、最初に喋った言葉が「私は仏道に身を捧げるべく生まれて来た、選ばれし者です」であった）に彩られていた。また、出家して村の近くの僧院に入ってから、たちまちにして僧院一の学僧となり、村中にその名が知れ渡り、多大な尊敬を集めていた。その当時は誰も、彼が後年奇行で名を馳せるようになるなど、考えもしていなかったのである。

ゾルガが変貌してしまったのは、二十歳の時に三ヶ月、一人で山籠りをした後のことである。彼が山にいる間に何が起こったのか、誰も知る者はいない。ただひとつ言えるのは、山へ登って行った時の彼と、降りて来た時の彼は、まるで別人であったという事だ。

下山して来た時の彼の目は落ち窪んで異様な輝きを発し、髭はぼうぼうに伸びていた。彼は歩いて僧院に戻る途中で、来ていた法衣を次々と脱ぎ乞食たちに与えた。そのため彼は直に素っ裸となり、出迎えた村人たちを驚愕させた。子供たちは彼をぐるりと取り囲んで歩き、女たちは卒倒し、男たちは顎を外した。

「お坊様が、お坊様が、狂ってしまったわね！」村長は衝撃の余り涙すら見せた。

彼の奇行はこれに留まらなかった。僧院の規則では、「新入りの小僧が袋を持って村へ行き、施しを受けて来ること」と定められていた。ところがある日、僧院一の学僧であるゾルガが、汚い袋を持って村へ行くこうする姿が発見された。「お上人、何処へ行かれるのです」目撃した僧侶が思わず声をかけた。「ちよっと、托鉢に参るのですよ」僧侶は、ゾルガが手にしている袋が余りにみすばらしかったので、胸を締め付けられる心地がして、「何を申されるのです、そのような詰まらぬ仕事は小僧がいたしませんから」と叫んで、彼にすがりついた。ゾルガは「何を仰る。托鉢は尊い業ですぞ」と取り合わず、踊るような足取りで僧院を出て行った。

村に到着したゾルガは、一軒一軒家の前に立ち経をあげた。村人たちは、あの高名な学僧たるゾルガ自らが、粗末な法衣をまとい汚い袋をぶら下げて托鉢に来ているので、すっかり仰天してしまった。たちまち彼の汚い袋は食べ物で溢れかえった。ゾルガは大きな木を門の脇に植えている家の前で経を上げた後、出て来た主人に問うた。「この木の枝を二本ばかり頂けますか」

主人は、この不可思議な申出に戸惑ったが、(偉いお坊様の言うことなのだから、何か重大な意味があるに違いない)と考えて「どうぞどうぞ。お持ちください」と承諾した。

ゾルガは手を伸ばし、枝を二本ポキポキと折った。そして彼は往来の真ん中にどっかりと座り込み、件の枝を箸として使って、施された食べ物を食べ始めた。時折人馬が通ると、ゾルガは大きな声で休んでいくように言い、袋の中のご馳走を振舞った。

これはまだ、微笑ましい話である。それから後のこと、僧院において、仏典について議論をする大規模な会が催された。僧侶たちはゾルガの話を期待して集まったが、彼は姿を見せなかった。議論は空疎な言い争いを重ねた後に終了し、宴となった。夜も更け、宴もお開きとなり、山のような残飯が広間に溢れた。すぐ横の庭には、乞食たちが大勢集まっている。彼らは、今晩僧侶の会合があり、食べ物のおこぼれに預かれることをちゃんと知っているのだ。僧侶たちは残飯を掻き集め、庭の真ん中にぶちまけた。ワツとばかりに乞食たちはそのご馳走に群がった。その乞食の中に、ゾルガが混じっていた。

日に日に激しくなっていくゾルガの奇行に関して、誰よりも心を痛めていたのは、彼の師であるケペレ大師であった。ケペレ大師はある日ゾルガを自室に呼んで、「何故そのように、自分の評判を落とすような振る舞いばかりするのか」と問うた。「自分の評判を落とすためです」とゾルガは答えた。「評判だの名声だのは煩わしい、精進の妨げとなる手枷足枷に過ぎませぬ。」

「しかし、いくら何でも、このような無茶なやり方をする事も無いだろう」とケペレ大師は有めるように言った。「もう狂人の真似事はやめなさい」

「やめるつもりは御座いませぬ。それに、私の行ないは真似事では御座いませぬ。狂人の真似とて大路を走れば狂人なり、私は狂人そのものです。」ゾルガは躍り上がって叫んだ。「あなうれしや、ほっほっほ！」そして大笑いしながら大師の部屋を飛び出し、ついでに僧院も飛び出し、法衣を脱ぎ捨て生まれた時の姿になるや否や、出鱈目な方角へ走り去って行った。ケペレ大師はその後姿を眺め、ひとり泣き暮れた。

ケペレ大師がわざわざゾルガを自室に呼んで訓戒を垂れたのは、彼がもうすぐ僧院を離れる予定だったからである。ケペレ大師は都市部のある大寺院に行なった多額の寄付の見返りとして、その寺院の住職の地位を得ることに成功したのだ。自分がここを離れる前に、ゾルガを真つ当な僧侶に戻さねば・・・彼はそう考えて煩悶していたのだった。

とうとう(ゾルガの更生が成功せぬまま)ケペレ大師が僧院を出る日が来た。僧院は勿論のこと、村を上げての大騒動となった。村中の人間がパレードを行い、お祭り騒ぎとなった。ケペレ大師を乗せた牛車の前後には踊りを踊る若者たち、馬に乗った護衛たち、着飾った稚児たちが列を成し、村が誇るべき高僧の門出を祝っていた。

と、そこに思わぬ闖入者が現れて行列に突っ込み、大混乱となった。その闖入者はロバにまたがり、腰には(剣の代わりに)鱒の干物を差していた。言うまでも無く、それはゾルガだった。ゾルガは、村中に響くような大声でこう言った。

「この滑稽な行列の先導を務めるのにふさわしい人物は、村一番の気狂い坊主たる私、ゾルガを置いて他にはおりませぬぞ！」

かくの如き仕打ちを受けても、ケペレ大師はまだゾルガを買っていたようである。数年後、彼の大寺院において、讓位した国王の髪削式が行われた時、ゾルガを招いているのである。ケペレ大師は、あの気難しいゾルガが二つ返事で快諾しやって来たことに驚き(彼

は駄目元で出席を打診したのだ)、そして彼を呼んだことを心の底から後悔した。品の悪い話で恐縮だが、ゾルガは式の間中、非常に大きな音で放屁し続けたため、出席者は笑いをおこらせる為に死よりも苦しい責め苦を味わったのである。

ついにケペレ大師も愛想を尽かし、毎度毎度の奇行に困り果てた同僚たちの手によって、ゾルガは僧院から追放された。彼は大喜びで、村外れの廃屋に引っ越したのであった。

ゾルガは月に二回ばかり、ザラメン山に出かけることにしていた。幼い無縁仏たちの供養のためであったのだが、村人たちの間で、「ひよっとしてゾルガ様は昔、自分の子をお捨てになったことがあり、その供養に行っておられるのではないか」という噂が広がったことがある。しかし、直ぐに立ち消えになった。なにしろゾルガはやましい事を隠しているような素振りをひとつも見せなかったし、やましい事がないからこそ堂々とあの山に行けるのだろうと言う事になったからだ。

ある日、ゾルガがいつものように（奇怪な歌をがなりながら、踊るような足取りで）村外れを歩いていると、道端に座り込み、死んだように虚脱している男の姿が目にとまった。ゾルガはすぐに、この男が何らかの厄介な問題を抱えていることを見抜いた。男の空洞のような眼孔は、ゾルガがこれまでに見てきた何百人と言う乞食たちの誰とも似ていないものであった。

ゾルガはちょうどその時、農夫からもらった大根を持っていたので、これを折って男に与えた。そして、ゾルガと男は道端にしゃがみこんで、大根を齧った。たまらなく辛く、涙が出るような大根であった。食べ終わると、男の体力はほんの少し回復したようだった。

男は、自分はムタという者だと名乗った。ゾルガはしばらく取りとめのない世間話をした後で、それとなく彼の身の上について尋ねた。最初、ムタは躊躇したが、すぐに堰を切ったように喋り出した。可哀想に、誰かに話を聞いてもらいたいとずっと思っていたのだろう、とゾルガは思った。

ムタは、自分がかつては腕の良い猟師であったが、一晚だけのつもりで遊んだ女との間にできた我が子をザラメン山に捨てて行って以来、仕事を止めてしまったのだ、と語った。毎日、物思いに沈んだままで何もせず過ごし、得体の知れぬ不安に絶えず苛まれていたのだと言う。そんなある日、自分の家が火事になった。家の横には牧場があり、燃え移った火が牛舎を全焼させ、何十頭という牛が焼け死んでしまった。（さて、その火事なのだが、事故なのか、放火なのか、はたまたムタ自身が火をつけたのか、ムタ本人がそれについては何も語ろうとしないので、最後までわからず仕舞いであった。）ムタは牧場主に、牛舎の修理代及び死んでしまった牛の損害賠償を要求されたが、彼には支払い能力がなかった。そのため彼は村の掟に従って千回の笞刑に処せられ、生死の境をさまよった。今ではこうして乞食をやっているが、他の乞食たちには爪弾きにされ、行く当ても無く、途方に暮れているのです、ムタはそう語った。

ゾルガは暫く瞑目した後で、信じられぬようなことを言った。「時に、私はこれからザラメン山へ行くのだが、そなたもついて来てはどうだね？」

無論ムタは顔面蒼白になって、その申出を拒否した。もう二度とあの悪夢の場所には行きたくないのです。そうか、とゾルガは大きく頷き、それではさようなら、と言い残すなり、奇怪な踊りを踊りながらさつさと立ち去ってしまった。後に残されたムタは、狐につままれたような気分です。その後姿を見送った。

それから何度か、ムタはゾルガに出会うことがあった。その度にムタは思案に暮れた。久々に虚脱するのをやめて、頭から煙が出るほど悩みぬいた。そして、最初の出会いから半年経った後、ようやく決心が固まった。彼は、踊りながら歩いてくるゾルガを呼び止めて、静かな声で言った。「私もお供させてください。」

「そうか。」とゾルガは頷いた。「じゃあ、ついて来なさい。」

それから半年経った後、ムタは出家した。ゾルガとムタは月に二回、ザラメン山に登り、親の愛を知らない幾千もの赤ん坊たちの霊を慰めて回った。彼の背中にある鞭の傷は、ようやくと塞がり始めた。

※

ある日、ザラメン山の山頂で、読経に疲れた喉を癒すべく湧き水を飲んでいたムタは、背後に異様な気配を感じて振り返った。彼は思わず息を呑んだ。顔を緑色に塗った少女が、自分の方に向かってふらふらと歩いて来たのである。言葉を失ったムタの横で、少女は顔を湧き水で洗い始めた。しかし、彼女の顔の緑色は、全く落ちることがなかった。

この話をゾルガにすると、ゾルガは、どうもそのご婦人はこの世の方ではないようですな、と言った。一体どういうことですか、とムタは驚いて聞き返した。まあ、ついておいで、と言うと、ゾルガは立ち上がった。

彼らは山の険しい斜面を滑り降りた。ゾルガが、あれを御覧と言つて指差した先には、大きな洞窟が口を開けていた。この洞窟こそ、かつて子供を捨てに来たムタが迷い込み、その精神の深層に深い傷を残すきつかけとなった、あの場所であった。幸いなことに、ムタは心の平静さを保つことに成功した。ゾルガは頭をかがめて洞窟の中に入った。

「ほら」ゾルガは、洞窟の中の一角で立ち止まった。ムタが導かれるままに目を凝らして見ると、胎児の小さな骨に埋もれて、若い女のものと思われる白骨死体が転がっていた。不思議なことに、その頭蓋骨には、緑色の絵の具が塗りたくられていた。

「我が子を探しに来たのだろう」とゾルガは言った。

ゾルガは八十の誕生日を境に急激に体調が悪化し、床に伏せたままになってしまった。ムタは師匠の看病を引き受け、月二回のザラメン山での供養祭を引き継いだ。ゾルガは相変わらず陽気にその日その日を過ごしていたが、老いは着実に彼の身体を蝕みつつあった。

不穏な空気が立ち込めていた。ゾルガが、もう長くないようだという噂が広がりつつあったのである。村人たちは畑で、街角で、床屋で、居酒屋で、路上で、この芳しくない話題について語り合った。普段は彼をインチキ坊主呼ばわりしていた連中や、宗教には全くの無関心であると明言していた人々までが、ゾルガの容態を心配して浮かぬ顔をしていた。とどのつまり、彼は愛されてきたのだ。

「この村の人々は、実に不思議ですね」ゾルガの体を拭いてやりながら、ムタが言った。「あんなに熱心にクリスマススを祝うくせに、仏道も大いに信仰しているのですから」

「いいじゃないか」ゾルガは言った。「世界には、殉教者の仮面を被り、信仰を口実に人殺しや戦をする連中がいかに多いことか！そんな奴らに比べたら、この村の人間はずっと罪が無い。」

毎日、彼の元にたくさんの人々が見舞いに訪れた。ゾルガは彼らの心配顔を下世話な冗談によつて破顔させてから、説法をしてやったり、仏典に関する講義を行なったりと、実に精神的に振舞って見せたので、病気は本当に深刻なのだろうかと首を捻らせた。しかしその内に、ゾルガの肉体の衰えが著しく進行すると、首を捻る者もいなくなつた。僧侶はもう昔のように田園地帯を裸で駆け抜けることもせず、かつては村中に響き渡るかと思われた大声も、今では息苦しそうな喘ぎ声に変貌していた。ただ、あの異様な輝きを湛えた目だけは、変わることがなかった。

ある日のこと、ゾルガの元に一人の青年が訪ねて来た。彼は、素直そうな澄んだ眼をしていたが、顔には絶望と倦怠の陰が差し、全身に怒りにも似た苛立ちの感情が纏わりついていて。その青年は、ベゴと名乗った。

「初めまして、ベゴ」ゾルガは、やや苦労しながら上半身を起こし挨拶をした。

「師がご存命中に、どうしても教えて頂きたい事がありまして、やって参りました」と、青年は思いつめたように言った。「おいおい、そんなに急いでやって来なくても、私はあと一億年ばかり死なないつもりでいるよ」とゾルガは笑った。「で、質問はなんだね」

「人生の真理を、教えていただきたいのです」

ベゴは、ゾルガを見つめながら、切々と訴えた。

「私にはわからないのです。人間は誰しも、救いようの無い存在なのでしょうが、と。

いつも思うのです、自分の生きているこの世界は、本当は血に塗れたものではないのか、と。そして、この世界には、何千、何万という数の、信じられないくらいに残酷な出来事が起こり続けていくのではないかと。

世界は、愛されない子供たちで溢れかえっているのでしょうか。誰の愛も受けなくて死ぬということは、どれだけ悲惨なことなのか、私には想像もつきません・・・。

なぜ人間は、このような責め苦に耐え忍んで生きてゆかねばならないのでしょうか。なぜ私たちは背負いつくせない罪を犯しながら生きていかねばならないのでしょうか。一体、生きていくことに意味はあるのでしょうか。」

ゾルガは微笑んで言った。「私もずいぶん、そんなことを考えたさ。そして、ある時、結論を出した。」

「それをお聞かせください」ベゴは、思わず唾を飲み込んだ。

「そんなややこしい問題は、いくら考えたところで、わかるはずもない」

思わず激昂しかかった青年を手で制し、ゾルガは続けた。「本当にわからないんだよ。正直に言っただけ。誰一人として、君がした質問に答えられる人物はいないだろう。もし臆面もなく、人生の真理を要約するような奴がいたとしたら、そいつは山師に過ぎないよ。しかしねえ、そんな山師が今まで何千人、何万人といたんだから笑っちゃうね」

ゾルガは、ゆっくりと足を折り曲げ、寝台の上に胡坐をかいた。

「昔、お釈迦様の元に、君がしたような質問を持参した青年がいた。その話を知っているかい？」

「いいえ。存じません」

「そうか。それではその話をしてやろう。」

昔、お釈迦様のお弟子になったある青年が、人生の意味だとか、人生の真理だとかについての質問を、お釈迦様に尋ねた。お釈迦様はお答えにならなかった。青年は、諦めることなく毎日お釈迦様のところに行っただけは、質問を繰り返した。ところが、やっぱりお釈迦様は一向に答えようとしていない。

とうとうある日、痺れを切らした青年は、お釈迦様に向かってこのように宣言した。もし今日、私の質問にお答えして頂けないのなら、私はあなたの弟子を辞めます。

お釈迦様は静かに言われた：「マールクンデラプッタよ（これがその青年の名前だ）、あなたの目の前に、毒矢に射られた人が倒れているとする。その時、あなたは一体、何をすべきだと思いますか？」

あなたが日々考えている疑問は、『この毒矢はどこから飛んできたのか？この毒矢は誰が射ったのか？どんな理由で、彼は毒矢を突き立てられたのか？』というような質問と同じようなものです。確かに、そうしたことを考える事は大事なことでありましようが、真相が判明する前に、怪我人が毒が回って死んでしまうことでしょうか。

あなたがまずすべき事は、別にあります。何よりも先に、突き刺さっている矢を抜くことなのです。それがあなたが成すべき第一の功德なのです」

ベゴは、ようやくと落ち着きを取り戻した。ゾルガは茶を一口飲んで、続けた。

「まあ、これから君が矢を抜きに行くつもりなら、まずは執着というものを捨ててみるのだね。欲望は捨てられないが、執着は捨てられる。執着は諸悪の根源さ。一思いに矢を抜こうとする時、いつだって邪魔をしてくるものだ」

ゾルガは、悪戯っぽく微笑んだ。

「とは言え、執着を捨てる事もまた、一見容易そうに見えて、至難の業だ。一生の仕事かもしれんな。私は、見事に失敗してしまったよ。」

「あなたのような高僧が、失敗なさったんですか」ベゴは驚愕して叫んだ。

「私は高僧ではない、ただの愚僧だよ。」

私は丁度君くらいの年の時に、山に籠もって修業をした。その最中に、仏らしき存在と対話できたことがあるのだ。勿論、姿を見たわけではない。私の精神の中で、声が聞こえたのだ。

仏は私に仰った。今のあなたは執着にまみれています。執着をお捨てなさい。

私は大いに戸惑って問うた。私は俗世を離れ、禁欲的な生活を送り、厳しい戒律もきちんと守っております。一体、私のどこが執着にまみれていると仰るのでしようか。

仏はお答えになつた。あなたは名声というものに、少々こだわり過ぎの感があります。

私は赤面した。あの時ほど恥ずかしかつたことは生涯に無かつたね。裸で往来を走る羞恥心の非ではない。言われてみればその頃の私は、人に褒められることを何よりもぞみ、人の尊敬を集めることに至高の快感を覚えている青二才だった。私は僧院で一番熱心に学問に励んでいたが、それとて純粹な信仰心だけによるものでもなく、学友に一目置かれたという下世話な根性が大きく関係していた。私は名声欲の塊だったのだ。やはり、いくら取り繕つてみたところで、仏には隠しようが無い。

精進の妨げになる、名利の如きものは一切遠ざけてしまおう。そこで、山から下りた後の私は、奇行を繰り返すことで私の評判を徹底的に貶め、名声や世間の地位を完全に自分とは無縁のものにしてしまおうと試みたのだ。

しかしここで私は失敗してしまつたのだよ。確かに世俗的な名利からは遠ざかることが出来、「名声」に対する執着も捨てられたが、その結果私は「名声を捨てようとする」とに余りにも執着しすぎた人生を送ってしまったのだ。いやはや、まるで冗談のような話だね。」

ゾルガは笑い転げ、激しく咳き込んだ。

ベゴと入れ替わりに、一人の少女が入って来た。ゾルガは微笑んで言った。「やあ、ようこそ。久しぶりだね」

「こんにちは」少女ははにかんで笑つた。彼女の顔は緑色だった。

「今日は、山から降りて来たんだね。」

「ええ。」そう言つて、彼女は顔を曇らせた。「実は・・・」

「何か私に言いに来たんだろ。」

「はい。」

「よくない知らせだね」

「はい」彼女は俯いて、黙り込んだ。

「私にとつては、よくも悪くも無い知らせかもしれないよ」ゾルガは（一旦は横たえた）上半身を起こしながら言つた。「覚悟して、受け入れるしかない運命だからねえ。君の言うことに間違いないだろう。」

「間違いはありません」ぼろぼろと涙をこぼしながら、少女が言った。「私は、この世の者ではないのですから」

ゾルガは静かに頷いた。

少女は、俯いたままで続けた。

「あなたとお弟子さんが供養に来てくださるようになって、とても嬉しかったです。なにしろ10年前にあの山に登つて以来、ずっと一人ぼっちでしたから。」

何処かで、ヒョドリが鳴く声が聞こえた。

「あの山の存在は、悪い遊びをしていた友達が教えてくれたんです。愛されない子供はみんな、ザラメン山に捨てられるんだ、って。私は病院に行つて、我が子を捨ててしまいました。その後、医者がどんな処理をしたのかはわかりません。でも、その友達の話を聞いてから、私の子供・・・いえ、『私の』子供というのはおこがましい言い方ですね・・・は、あのザラメン山のどこかで、

私を呼び続けているのではないか、という考えが、頭から離れなくなったのです。私は子殺しなのです。」

少女は、ようやくと頭を上げた。緑色の顔に涙が光っていた。

「悪い知らせで、本当にすいません。明日、みなさんにお別れを言ってあげてください」
そして、少女はかき消すようにいなくなつた。

ゾルガは静かに眼を閉じた。

ゾルガは、最早ほとんど見えなくなった目を開いて、枕元に集まった信者たちを見回した。彼は、絶えず自分の肌にかたい雫が降り注いでいることに気がついた。みんな泣いている、と彼は薄れかけた意識の中でつぶやいた。彼の狭い庵に、村中の人間が詰め掛けていた。こんなにやって来るとは思いもよらなかった、とんでもない迷惑をかけてしまった、村中を悲しみで包むなぞ酷い悪行だと、ゾルガは申し訳なく感じた。

緑色の顔面をした少女が訪ねて来た日の翌日、ゾルガはムタを枕元に呼んで言った。「いよいよ、私は死ぬらしい。出来れば村の皆さんに、お別れを言いたい」

ムタは五分間虚脱状態に陥った後で、転がるように庵を飛び出した。数分後、信じられない、もしくは、いよいよか、という顔つきをした村人たちがめいめいの家から飛び出し、ゾルガの庵に向けて突進を開始した。狭い庵はすぐに人で溢れかえり、入れなかった者は庵の前でひしめき合っていた。それは壮観だった。

ゾルガは、目を凝らして辺りを見回し、ムタを探した。探しながら、「ムタ。ムタ。」と喘ぐように言った。ムタは直ぐに飛んで来て、師の言葉は一言たりとも聞き落とすまいと耳をそばだてた。ゾルガはムタの耳に口を寄せ、しゃがれた声で言った。

「あのな、ひとつお願いがあるのだ」

「なんなりとお申し付けください！」ゾルガは悲痛な叫びを上げた。

「馬の鞍を持って来てくれまいか」

ムタは、師が何を言っているのか咄嗟には理解できなかった。

「馬の鞍をな、持って来てくれ。大至急だ」ゾルガは再び要請した。

「馬の鞍、ですか」とムタ。

「そうだ。早くしないと死んでしまう」

ムタは立ち上がり、村人たちに向かって恫喝した。「どなたか、馬の鞍を持ってきてください！馬の鞍ですぞ！ゾルガ様の最期のお願いですぞ！急いで持ってきてください！大事ですぞ！！大事ですぞ！！」

一分もしない間に、村中の鞍という鞍が庵に集められた。うず高く積まれたその山を見て、ゾルガは「ひとつでよかったのに・・・」と呟いた。

「さあ師よ、馬の鞍です」とめどなく涙をこぼしながら、ムタが言った。

「ご苦労。私を抱き起こしてくれ」とゾルガは言った。

ムタは急いでその通りにした。

「その鞍をひとつとって、私の首へぶら下げてくれ」とゾルガは言った。

ムタは大いに戸惑いながらも、その通りにした。

「ありがとう」

ゾルガは深呼吸をひとつし、腕を天に差し伸べ、喘ぎ声で歌い出した。

「都々逸は野暮でもやりくりや 上手 今朝も七つ屋でほめられた」

ゾルガは歌い終わると鞍を外させ、「ああ疲れた」と言って目を閉じた。しばしの沈黙の後で、ムタが恐る恐る尋ねた。

「あの、一体何故、そのようなことを」

「ああ、不思議に思うわな。」ゾルガは目を開いて答えた。「昔まだ私が僧院にいた時のことだ。」

私が自室で経典を読んでいる時に、庭から笑い声が聞こえて来た。一体何事だろうと思つて行つて見ると、小僧の一人が馬の鞍を首からぶら下げて、滑稽な歌を歌い、集まつた者たちを大いに笑わせていた。それはそれは面白い眺めであつた。今、お集まりになつたみなさんの鬱陶しそうな顔を拝見しているうちに、その時のことを突然に思い出し、『そうだ。あの芸をやれば、少しはこの湿っぽい雰囲気が改善されるかもしれない』と思つたのですよ。」

村中に響き渡る泣き声がぴたりと止んだ。あまりの馬鹿馬鹿しさのために、全員の涙腺が締まつてしまつたのである。

ゾルガは、(まるで今までの重病が嘘であつたかのように) ひよろりと立ち上がった。「それでは、お先に失礼いたします」

そして、隣室に入り、後ろ手で戸を締め切つた。暫くして、(さっきの喘ぎ声が嘘であつたかのような) 朗々とした読経の音が響いてきた。

一同は、呆然とした面持ちのまま、空になつた寝台を取り囲んでいた。そのうち、誰かが吹き出した。それにつられて、皆笑い始めた。誰もが、泣きじやくりながら笑つていた。響き渡る読経の声と笑い声と泣き声が、三千世界をあまねく満たしたのであつた。

な。お詫びに、これをあげましょう」李白は腰につけていた瓢箪を外して、ゾルガに渡した。ゾルガは驚いて問うた。「大切な瓢箪だろう」

「なに、かまやしません」李白は豪快に笑って言った。「私も少しは、功德を積まないかね」

ゾルガは荒れ野原を歩き始めた。腰に、大きな瓢箪をぶら下げて。踊るような足取りで。後ろから、李白が詩を詠ずる声が聞こえて来た。

青山横北郭

白水遶東城

此地一爲別

孤蓬萬里征

浮雲遊子意

落日故人情

揮手自茲去

蕭蕭班馬鳴

しばし立ち止まり、ゾルガは瞑目してその詩に耳を傾けた。

再び歩き出そうとする彼を、呼び止める声が出た。

「すみません」

ゾルガは振り返った。

顔を緑色に塗った少女が立っていた。

「私もお供させてください」

ゾルガは笑って答えた。

「いいよ。ついておいで」

ゾルガは、李白からもらった瓢箪を手を取った。傾けると澄み切った水が一、二滴こぼれ落ち、地面に達するとたちまちにして小川になった。ゾルガは屈みこみ、その小川の中に手を浸した。ゾルガは手を引き抜くと、少女の顔にそっと触れた。

彼女の顔の緑色が流れ落ち、この上なく美しい素顔が現れた。

そして二人は歩き出した。五億年の道程を。

※

李白はゾルガの後姿を見送ると、そっとエプロンの端で涙を拭いた。そして立派なビール腹を揺すりながら、店内に戻った。

カウンターの間では浮浪者がへべれけに酔いながら、ぶしゅとひとり言を言っていた。彼は李白にもう一本ウキスキーを所望し、いつ果てるとも無く続く不毛なモノローグが店内を流れてゆく。

あるアル中のはなし

俺はできればローマ時代の貴族として生を受けたかった。高校の時、ひどい風邪に悩まされながら出席したある日の世界史の授業以来、そう思い続けている。その時、俺の喉は砂漠となり、俺の鼻は水道の蛇口となり、俺の頭は鉛の塊をねじこまれたようになっていて、黒板の上ではロベスピエールが恐怖政治を展開していたのだが、俺はどうにもその事件の概要と歴史的意義を学ぶ気になれなかった。そこで俺は手元の図版をばらばらめくって、乾隆帝の肖像画だのレンブラントの『夜警』だのをぼんやり眺めて過ごしていた。「進歩」だとか「革命」だとか「未来」だとかいったものが、まだ輝ける存在であった幸福な時代に生きていた人間たちの顔つきは、どれもこれも見ていて嫌にならないものであった。それなのに俺は、どんどん悪化してゆく風邪に集中力を触まれ続けていたので、そうした素晴らしい表情の数々をじっくり鑑賞することもままならぬまま、ただ機械的にページをはめくり続けていた。しかし俺の手と目はローマ時代のページにさしかかるとぴたりと止まった。

それはローマ貴族の食生活について書かれたページで、その挿絵が衝撃的だった。洗練された薄手の衣装を身にまとった彼らは傾斜のあるベッドに寝転がり、傍らにご馳走を山と積んだ皿を置いて華やかに晚餐を楽しんでいた。何人かは鳥の羽根を手に使っていた。鳥の羽根に関しては、挿絵の下のほうに簡潔な解説文が記されていた。要約すると、この鳥の羽根は、食後に喉に突っ込み、今しがた食べたばかりのご馳走を吐くのに使用していた。何故そんなもったいないことをしていたのかというと、貴族たちは料理の味を楽しむことのみを追求しており、食っては吐き食っては吐きしていれば満腹することなく際限なく美食に溺れていられたからだという。さらに貴族たちは、舌が焼けるように熱い料理をガツガツと食べられるスキルを身につけるべく、浴場の隅で熱湯に手をひたし、時に熱湯を口の中に入れるなどして熱さへの耐久力を鍛えていたのだという。

何という馬鹿で、意地汚く、恵まれた餓鬼共なのだろうか！！

むろんその図版は、こうした貴族の暮らしぶりを否定的に取り上げていた。(言うまでもないことだが、学校の歴史教材において、支配者層を肯定的に扱っていることはまずあり得ない) 奴隷に苦しい労働を押し付ける一方での享樂的生活、人間の欲望が肥大しすぎてしまった結果浮き彫りになった気色悪い異常性(横たわり嘔吐しながらの食事は現代の感覚からすると少々異常である)が強調され、ベッドに突っ伏して鳥の羽根を口に使っている貴族たちは蔑みの対象、哀れなピエロたちであった。しかし図版の編集者の意図は、俺に関しては見事に失敗した。俺は生まれる時代を間違えたと確信してしまったのだ。

俺は何をしているのだろう。胃袋に砂を詰め込まれたような気分で、学びたくもない他人の武勇伝を必死に暗記せんとしている。日々を無為に過ごし、来るべき無味乾燥な未来のために努力を重ねている。同じ無意味さの中で死んでいくならば、俺はローマ貴族のやり方を選びたい。たらく御馳走を腹に詰め込んで、鳥の羽根を喉に突っ込んで嘔吐する。自分の吐瀉物にまみれて、美しく死んで行きたい(生きたい)のだ。もし選べるのなら、俺は2000年以上も前に生まれたかったのだ。そして、そんな途方もない願いを抱いて、俺は生きてゆかねばならなかったのだ。

俺は鳥の羽根を持っていない。俺は酒を飲んで吐く。酒瓶は俺にとって、孔雀の羽根だ。正直なところ、一晩中飲み続けても、ほとんどの場合は吐けないのだが。俺は酒を飲むように出

来ているのだ。残念ながら、俺は酒を飲むように出来ているのだ。

幸運な夜、ようやくと吐き気がやって来た時は、穢れた胃袋をすっかり綺麗にしてしまうべくトイレに駆け込む。息苦しく狭い空間、清潔な便器の前にかがみこむ。さあ俺は生まれ変わるんだ。もう一度無垢なおぼっちゃんに戻るのだ。しかし結局うまくはいかない。真っ白な便器の中に真っ赤な血が飛び散る。嗚呼俺は出来損ないのホトトギスだ。啼きもせずに血ばかり吐いている。

このゴミだらけの街は美しい。このゴミだらけの街は美しい。どこかに素晴らしい図書館を隠している、このゴミだらけの街は美しい。俺は血を吐きながら、ピースサインをする。誰も俺をどうにか出来るわけでもないし、誰も俺をどうにかしようなどしない。それはなんて痛快なことなんだろう。このゴミだらけの街は腐っている。このゴミだらけの街は腐っている。このゴミだらけの街と一緒に俺も腐っていく。泣く気も失せるほどに笑いがこみ上げてくる。ドブに頭を突っ込んでみたらよく眠れるかもしれない。出来れば俺はみんなを愛したいと思っているし、そしてことによるとみんなに愛されたいと思っているのかもしれない。

サンドイッチ・ウーマンと共に一夜を過ごす。外套を燃やした夜は特別寒い。俺は屋台にへばりつき、いつも飲んでいる安い酒を飲んで飲んで飲み倒す。生きていくのが辛いからではない。(そんな馬鹿馬鹿しい理由で、血を吐いたりするものか。)知り尽くした安酒の芳香が俺の中を駆け抜けていくと、幸せなのだ。もう何もわかりやしないよ。なんの意味も探せやしないよ。もうやめたんだ、生きること以外の全ては。

俺は素っ裸で生まれて来て素っ裸で死んでゆく。あの世には何も持っていけないし、この世には何も残せない。それならば何を恐れる必要があるのだろうか、何のために悲しむ必要があるのだろうか。愛は究極の無意味。意味が無いことの限らない尊さ。

俺は羽根を傍らに置き、食事を中断する。貴婦人の一人が俺に問いかける。「アピキウス、どちらへ？」俺は微笑んで言う。「ちよっと、浴場へ行ってきます」

俺は酒と食べ物と吐瀉物にまみれた、美しい衣装をはためかせて歩く。海の如く広がる浴槽からは、さかんに湯気が立ち上っている。俺はその熱湯の中に、ゆつくりと腕を浸す。もはや熱さも感じない。俺は湯をひと掬いして、口の中に流し込む。もはや熱さも感じない。

俺はゆつくりと、酒と食べ物と吐瀉物にまみれた、美しい衣装を脱ぎ捨てる。そして、何百回と袖を通した、お馴染みの衣装を身につける。それはロメオの衣装。俺の職業はしがないシェイクスピア役者。今夜もみなさんお待ちかねの「伝説の愛」を演じに行くのだ。そこに、俺が吐いた真っ赤な血を見て、死神がやって来る。

ロメオ「あなたは？」

死神「俺は死神だよ」

ロメオ「俺を連れて行くこうとしたって無駄ですよ」

死神「何故」

ロメオ「俺はもうすでに舞台の上で、何百回となく死んだことがありますからね」

死神は肩をすくめて立ち去り、俺も再び歩き出す。

やがて俺はバルコニーの下にたどり着く。今夜こそは、ジュリエットが来てくれるのだろうか……。俺は地べたへ座り込み、ジュリエットが出てくるのを待っている。

街角に、駅から出て来たばかりのあの人物が佇んでいるのが見えた。彼は信号が変わると通りの向こうに横断し、そして乱立しているビルの中のひとつに入った。おそらく、屋上のビアガーデンが目当てなのだろう。

※作者からみまやかな報告

ゾルガの物語を書き終えたところで、列車が一揺れして停まった。東京駅だった。私はようやく、この街に帰ってくるのが出来たのだ。医者は私にアルコール飲料の摂取を禁じている。しかし私はその忠告を謹んで無視させていた。こんな気分のいい夕暮れ時に一杯やらないほうが間違っている。私は駅を出た後で即座に通りの向こうに渡り、乱立しているビルの中のひとつに入った。目的は、屋上のビアガーデンである。

私はビアガーデンに到着すると、ビールと巨大なステーキを注文した。そこから見渡せる、あまりにも鮮やかな都市の眺めに言葉を失ってしまった私は、取りとめもない物思いに耽り始める。

トーキョー

もしこの街の心臓が偽物で、私が風船だったとしたら、あつと言う間に皺だらけになってしまふことだろう。嘘をつかれっぱなしだとかねがね思っていたのだが、嘘だと思っていた全ては結局のところ真実で、しかしそれをどうしても受け入れることが出来ず、その日その日を生きてきた。何とかうまく折り合いをつけてゆく術を体得し、その結果、何が真実で何が嘘かなどどうでもよくなつた。

(突然に思い出した、昔読んだとある小説からの引用。出典不明。どうしても思い出せない)

都市の風景を俯瞰しながら、今の私を感じているのは、黒ビールの苦さと、ステークの脂身、それに湿気をたっぷり含んだ熱風だけである。ちらほらと電飾の看板が自己を主張し出した。死んだ魚の目をした人間達が電車から降りて来た。もしこの街の心臓が偽物で、私が風船だったとしたらー？

私は、とある建物に目を留める——疲れ果てたロメオが、バルコニーの下に座り込んでいる。手には空っぽの酒瓶。ジュリエットの姿は見えない。何千人もの役者によって、何百年もこの劇は演じ続けられている。飽きもせず、観客達はジュリエットの登場を待ち、「おお、ロメオ、どうしてあなたはロメオなの」と言うのを待っている。しかしロメオとジュリエットはもう疲れ果ててしまった。ジュリエットの姿ははまだ見えず、彼女もまた空っぽの酒瓶を手を虚脱しているのかもしれない。それでも私達が不幸である限り、私達は舞台の上にある不幸を求め、劇場の切符は売れ続け、そしてロメオとジュリエットは愛に殉じて死に続ける。ここで昔の私なら「それが宿命と言うものだ」と書いたかもしれない、しかし今ではそんなブッキラボウなことは書く気にもならない。ロメオは何を見ているのだろうか。バルコニーの向こうにあるものは、本当のところ何なのだろうか。風が吹いている。湿気をたっぷり含んだ熱風である。バルコニーを吹き抜けてゆき、古びたベージュ色のカーテンがかすかに揺れる。

私は目をテーブルの上で落とす。そして、傍らに投げ捨てられていた新聞に何気なく目を通して見た。それによると、今日も子供が殺され、中学生が放火をし、猫が轢かれたそうだ。そうした出来事は足音とともに舞い上がる砂埃にかき消され、スクランブル交差点で起こった一瞬の静寂に飲み込まれ、万引きをした後の後ろめたさのように都市を覆い尽くす。何一つ問題は解決していない。私はジョッキを傾けて、もはや泡も冷たさも無くなったビールを一気に飲み干す。そして切斷された牛の焼死体をむさぼる。すると何だか幸せな気分になって、大概のことは許せるように思えてくる。人間の体は母親の外に出て以来腐り続け、そして何処に帰っていくのか、私は知らない。しかし何だか幸せな気分になっているので、大概のことは知らずにいても大丈夫のように思えてくる。

そしてだしぬけに、私は古い警句を思い出す(出典は忘れた)。

豊かな国には三種類の人間がいる。甘えん坊の役立たずと、強いふりした弱虫と、痛みを知らないお馬鹿さん。

産卵のために、死に場所を定めるために、鮭は生まれた川に戻ってくる。環状道路をひしめき合う車の群れを見て、そんな鮭たちのことを考えた。私も鮭だ。またここに帰って来た。風が吹いてくる。スモッグと排気ガスをたっぷり吸い込んだ、心地の良い風だ。私はジョッキを持ち上げて、無事に帰って来られたこと、けれどもまた退屈な明日がやって来ること、次の章が最終章であること、そしてこの見晴らしの良いビアガーデンのために乾杯をした。サラリーマン風の男が一人、ジュリエットが出てくるはずのバルコニーの真下を通りかかった。彼は道路に投げ出されたロメオの脚にひっかかって、危うく転倒しうになった。彼はロメオの首根っこを掴んで直立させ（それはアメリカの無声喜劇映画の1シーンのようだった）、その尻を思いっきり蹴飛ばした。今更ながら私は、ロメオが履いているズボンの膝頭と尻の部分が擦り切れてポロポロになっていることに気がついた。彼はジュリエットを待っている間は、喜劇役者になって、今しがた展開されたような哀しくも愉快な寸劇を延々と演じ続けているに違いない。

そう、丁度こんな日だったのかも知れない。（黒ビールの御代わりがやって来た）私が最後に金魚屋へ行ったのは、丁度こんな日だったのかも知れない、湿気の多い、暑い日。私は背中を丸めて、固い石畳の歩道を歩いてきた。靴擦れが痛かった。私は巨大な水槽を抱えており、その中には一匹の醜いらんちゅうが泳いでいた。十年前の私は、今よりもずっと嫌な人間だった。そしてらんちゅうの濁った目は、私の目に恐ろしいほどよく似ていた。老人のように節だらけの手に青筋を浮べ、埃まみれの靴を引き摺って、私はビルとビルの間を歩いてきた。太陽がからからと笑った。不愉快だった。私は突然革命が勃発して、ロベスピエールが巨大な刀を振り回しながら街中を駆け巡り、自警団が雑巾を繋ぎ合わせて作った「自由の旗」を振り回している光景を幻視した。卵好きの国王の息子は首を刎ねられ、ある小男の登場でもって興奮は最高潮となり、そしてその男が潰瘍を患ったことで消滅してゆく―それは、らんちゅうが見せた夢かもしれない。或いは水槽を通して見える世界の一端なのかもしれない。そして、馬鹿笑いを続ける太陽を直視しようと顔を上げた私は、ビアガーデンで黒ビールを飲んで十年後の私と目が合った。そう、丁度こんな日だったのかも知れない。あれ以来私は金魚を飼ったことがない。あんなに金魚が好きだったのに。私は二杯目の黒ビールを一口飲んで（ちなみにそれは最後の一口であった）、口の周りに付着して髭のようになっていいる泡を拭い取った。私は、下の通りに突っ立って私を見上げている、水槽を抱えた十年前の自分を見つめていた。人はみんな変わってしまふんだなあ。わたしは戯れに出鱈目な歌を心の中で歌い始める。

僕は今でもああやって。さ迷い続けているんだなあ。金魚の憂鬱抱きながら。さ迷い続けているんだなあ。夕暮れ時の街並みに。背びれを探してさ迷えば。からから笑う太陽が。僕の背中を嘲笑う。復員兵の一団が。背囊を背負い行軍す。傷痕軍人の楽団が。軍艦マーチを演奏す。愛されなかつた嬰兒が。折れ重なってかくれんぼ。見つかりやしない背びれ追い。今日も一日無駄話。明日はふて寝を決め込んで。風の音だけ聞いていよう。吹きぬける風を受け止める。水槽の中に受け止める。猫背の僕が受け止める。らんちゅうの背が受け止める。僕は今でもああやって。さ迷い続けているんだなあ。金魚の憂鬱抱きながら。さ迷い続けているんだなあ。

(あつと言う間に飲み干してしまった二杯のビールのせいで、わたしはすでに出来上がっていた。さつきから、頭に浮かぶ言葉の断片も、ずいぶんと訳の分からないものになってしまっている)

ところで、昔読んだ本によると、東京にはほんたうの空がないという。成る程、ほんたうの空はこの都市には有りそうにもない。初めてここへやって来た夜、なかなか寝付けないうで出たベランダから見たあの風景は、忘れることが出来ないだろう。夜十二時であるにも関わらず、空が薄明るかったのだ！何棟もの高層ビル、そして巨大なタワーに灯った毒々しいネオンが、漆黒の闇を下世話に塗り上げていた。何ということだ。私は頭がくらくらするのを感じた。この街は不眠症に違いない。とんでもない場所にきてしまったものだ。

とは言え、私自身は「ほんたうの空」を眺めるのに値するような、「ほんたうの人間」であるという自信は全くない。そもそも何をもってして「ほんたう」なのだろうか。私は人格形成期の大半を片田舎で過ごし、とにかく空には不自由しない生活を送っていた。私の故郷は高層ビルも高い山もなかったもので、表へ出ると視界の四分の三は空だった。さて、その四分の三の空は「ほんたうの空」なのだろうか。私にはわからないし、わかりたくもない。私は空を眺めるのが大好きだ。だから「あんたの見える空は、偽物だ」などと断言されても、肩をすくめて見せるだけだろう。そして、もし何処かにほんたうの空などというものがあって、「君、これこそが話に聞くほんたうの空なのですよ。どうです。やはり一味もふた味も違うものですよ」などと訳知り顔のいやな奴に言われたら、「それはまことに結構ですよなあ。しかしこの^ほんたうの空^は、私がいままで散々見てきた偽物の空とも繋がっているのですよ」と言ってやりたい。ともかく、私はこの偽者の空の下に、もう一度戻ってこられたことがたまらなく嬉しいのだ。この、吐き気を催すような、無機質で、毒々しく、粗野な、スモッグに覆われた空！もうすぐ日没だが電気のせいで星は見えないだろう。ここは夜ですら星が見えない街だ。

とにかく急ぐことはやめた。急がなければ追いつかないのに、私は急ぎたくないのだ。ビールのジョッキから、虚空に泡が溶け出てゆく。何を急ぐ必要があるのだろう。やらなければならぬことは、取るに足らぬことばかりだ。私は暫く瞑目し、吹いてきた風の冷たさを存分に味わう。そうしていると、昔聴いたロックの名曲群が、アルコールによって混沌となった頭の中を回転し始めた。

ここへ座り込んで

青年のまま年老いた男の話を聞く―彼の名はルー・リード

マンハッタンを埋め尽くすカラクタの山の山の上

ルー・リードが語るのを聞きたい

正反対の海岸からは、騒々しい管楽器とギターの音

フランク・ザッパのおでました

フランク・ザッパがやって来る

フランク・ザッパの冗談が宇宙に飛び散ってゆく

それからフラミンゴになったフルート吹き

(彼は昔「肥りたくない」と歌ったものだが、願いは叶わなかった・・・)

イアン、今夜もバッハを激怒させてやれ

浮浪者や蒸気機関車の喘ぎ声を聞かせてくれ

今夜のモリッシーの歌はとくべつ美しい

XTCは疲れたロック狂の琴線をねじくれながらも優しく愛撫する

磨り潰した南瓜 (Smashing Pumpkins) は元に戻るのか？

そして何よりも、レッド・ホット・チリ・ペッパーズに乾杯を！！

そう、レッド・ホット・チリ・ペッパーズに乾杯を。彼らは今年、待望の新作アルバムを発表したのだ。

薄暗い闇が、滑るような足取りでビアガーデンに入ってきた。彼は血のこびりついた大鎌を担いでいた。誰もが影法師を伸ばす夕暮れ時であるのに、彼の足元からは何も伸びていなかった。彼は影そのものだったのである。

彼はオレンジ色の空の中に崩れて行く街の情景を一瞥すると、私の方に歩いて来た。そして私の横に立つと、欠けた歯を裂けた唇の間から覗かせて(笑顔を作ったつもりらしい)紳士的に言った。

「ご相席をお願いしたいのですが」

「これはこれは、死神さん」と私は椅子を引いて言った。「どうぞどうぞ」

死神はゆっくりと腰を下ろした。暫くの間私たちは、無言のままじっと向き合っていた。そのうちにどちらかが吹き出し、下卑た大笑いが虚空に響き渡った。(まったく訳が分からないが、可笑しくて仕方が無かったのである。)

「ああ、運のいい奴だ！」と死神は言った。

「まさに『死ぬ』かと思っただけ、あの悪寒ときたら！」と私。「それで、今日こそは俺を連れに来たってわけかい？」

「いや、あんたを連れて行く予定は延期になったよ」と死神は、私のステーキを勝手に食べながら言った。

「今日はもう少し、でかい仕事があつて来たんだ。」

私は彼のために大ジョッキを注文してやり、改めて乾杯した。死神は一息で飲み干した。素晴らしい飲みっぷりだ、と私は感嘆した。

我々はたわいも無い与太話に興じた。生と死についてだとか、存在と無についてだとか、そんな古惚け黄ばんだテーマについて、大学生が食堂で展開するような粗雑なディスカッションを行なった。話を振ったのは私の方である。死神と対話するのだから、やはりそうした話題がよろしかろうと考えたのだ。しかし、議論は長くは続かなかった。有耶無耶になつたまま、中断されてしまった。何故なら死神は、そのような問答がどれ程不毛なものであるかを、誰よりもよく知っていたからである。

途切れた会話の接木として、私はひとつの疑問を死神にぶつけてみた。「なあ、あんたは俺が入院していた時に、俺を連れに来たんだらう？」

「そうとも」と死神は頷いた。

「何で見逃してくれたんだ？」

『「あの人を連れて行くのは、止めてあげて下さい」って、ある人に頼まれたんだよ」死神は△笑顔を作つてV言った。

「ある人とは？」私は、山のようなクエスチョンマークを頭上に噴き出させながら問うた。死神は、空に向かって言った。「なあ、この男に、もう一度あれを見せてやってくれ」

スモッグに覆われた夕暮れの空が、たちまちにして満天の星空になった。私は全てを了解した……。かつて真昼の静かな森の中で見た、降るような星々が、ほんたうの空が無いつつという東京の街並みを穏やかな光で包み込んでいた。

死神はばちんと指を鳴らした。途端に、星は消え、いつもの汚い空に戻った。

「彼女の恩返しさ」死神は言った。「漆黒のジャケットを羽織った、気高き人のね」

私たちは黙り込んだ。街は黄昏時。恐ろしいほどに美しい静けさが、都市の喧騒を引き裂いて、私たちのテーブルの上を駆け抜けて行った。

その静けさの中、轟音が響き渡った。何重にも重なった、車の急ブレーキ音、甲高い悲鳴、巨大な爆発音、一瞬の静寂の後に、人々が驚き騒ぐ声。やがて、救急車とパトカーのけたたましいサイレンの響き。

「さあ、時間だ。仕事に行かねば。」死神は立ち上がった。「あんたのおごりって事でいいね？」

私は頷いた。死神は軽く頭を下げ、かき消すようにいなくなった。

私は、泡のへばりついたジョッキの底を見つめていた。私はあまりにもこの小説の中に入り込みすぎてしまったな、と心の中で呟いた。私は自分の事を、この虚構空間の創造主であり、言わば全能の神のような存在であるのだ、と思っていた。大それた思い違いであった。結局のところ、私はこの小説の作中人物の一人に過ぎなかった。しかし、それは私の本望だと思う。

私は空を仰ぐ。ああ、すっかり酔っ払っちゃった。一体この小説は、本当は誰が書いているのやら……。

日没が迫っていた。私は重い腰を上げた（どっちみち、そろそろここを離れるつもりだったのだ。ジョッキも空になっていくことだし、ステーキは死神が食べてしまったし）。さあ、行かねば。一作中人物として、私はこれから、この第五章と次の第六章をつなぎ合わせるという仕事を遂行せねばならぬ。

私は勘定を払い、ビアガーデンを後にした。店員がレジを叩いている間、哀愁に誘われて振り返った。少しずつつ灯り始めたネオンサインの背景として、私を取り囲むこの世界を覆い尽くしている「ほんたうでない空」が、果てしなく広がっているのが見えた。

もしこの街の心臓が偽物で、私が風船だったとしたら、あつと言う間に皺だらけになつてしまうことだろう。嘘をつかれっぱなしだとかねがね思っていたのだが、嘘だと思つていた全ては結局のところ真実で、しかしそれをどうしても受け入れることが出来ず、その日その日を生きてきた。何となくうまく折り合いをつけてゆく術を体得し、その結果、何が真実で何が嘘かなどどうでもよくなった。

そんなわけでトーキョー、この絶望的に汚い街。行けと言われるなら、私は何処へでも行くさ。トーキョー、偽者の心臓がリズムを刻む街。こぼれ落ちる、腐った葡萄酒の歡び。トーキョー、どれだけ私がお前の美しさを愛していることか。トーキョー、宇宙がひとし咳をする間に、我々は瞬いて消えてしまっただろう。トーキョー。その上でくると踊り出すー。

第六章 お茶漬けで乾杯を

メヒコ街の書齋に、私はキャンバスを置いている。何千年もの後、今はこの星のあちこちにちらばっている素材を掻き集めて、ある人間がこのキャンバスに絵を描くことになるのだ。

—ホルヘ・ルイス・ボルヘス

ビアガーデンを出た私は、まだ何をやるべきか見当もついていない有様であったが、取り合えずその辺を歩いてみることにした。犬も歩けば棒に当たる、その棒がどんな棒なのかなど、知ったことではないが。

溢れんばかりの好奇心に心を躍らせた野次馬たちが、ばらばらと事故現場へ走ってゆくのが見えた。車道は大混雑となり、けたたましいクラクションが際限なく鳴り響いている。サイレンの音が、次々と近づいて来る。純白のドレスにスパゲッティをぶちまけたような、狂騒たる光景だった。

私は道を折れ、裏通りに入った。表の喧騒が、冗談のように聞こえなくなった。排気ガスの染み込んだ冷たい風が心地よかった。私は暫くの間棒杭のように突っ立って、静寂に身を包ませた。

「よう」

誰かが私を呼ぶ声がした。私は辺りを見回してみたが、それらしい人影は見つからなかった。不思議に思っていると、「つま先を御覧」と、声が告げた。私はそれに従った。身長十センチの女の子が、私の靴に腰掛けていた。

私は言いようのない懐かしさを覚えた。「今晚は、アシッド・クイーン！」

「今晚は」彼女はすると大きくなり、普通の背丈に戻って言った。「退院おめでとう」

「有難う。君のほうは元気にしてるかい」

「相変わらずの、不健康よ」彼女はやつれた顔に笑顔を浮かべた。「さ、行きましょう。みんな待ってるわよ」

「みんなとは？」

「来ればわかるわ」

アシッド・クイーンは踵を返し、自在に背丈を変えながら足早に歩き始めた。私も慌てて、その後を追った。我々は、入り組んだ路地を何かに導かれるように（事実、私は彼女に導かれていたわけだが）歩き続けた。どれだけ歩いたことだろう。いつの間にか、私は方向の感覚も時間の感覚も失ってしまったようで、正確な記述はできない。しかしアシッド・クイーンが立ち止まり「ここよ」と指し示した場所には、見覚えがあった。

それは、この本の最初の方で、土曜日の夜を楽しみ損ねた失意の「僕」が訪れた店だった。彼（＝僕）が、ここで働いていた[△]君_▽を我が家に招待したところから、あの出鱈目な物語が始まったわけだ。

「ずいぶんと懐かしい所だね」と私は言った。

「さ、入りましょう」アシッド・クイーンはドアを開けて、私を中に入れた。私はてっきり、店の中にはカウンターがあり、テーブルがあり、酒があり、照明があるものと思っていた。しかし、そうではなかった。

ドアの向こうには、荒涼たる野原が、果てしなく広がっていた。

国境線の近く、荒野原が広がっている。山は遠く灰色に霞んで、時折吹く風は枯れかけ

の木を気紛れに揺さぶっている。そこに一軒の居酒屋が（置き忘れたかばんのように）ひっそりと在った。私とアシッド・クイーンは、その居酒屋を指して歩き出した。

「へいらっしやいませ！」

ドアを開くと、騒々しいお喋りの声の間を縫って、李白の威勢のよい声が聞こえて来た。「えらく混んでるわねえ！」とアシッド・クイーンが歓声を上げた。

「そりやそうですよ。」と李白は満面の笑みで頷いた。「なんてったって、今夜はサタデー・ナイトですからなあ！」

私は息を呑んだ。吞まずにいられようか。本作品の作中人物が全員、この小さな居酒屋に集合していたのである。それは実に壮観だった。鮪詰とはまさにこのことだ。とは言え、空間に関しては問題はなかっただろう。ここは、三次元空間でも四次元空間でもない、虚構内空間なのだから。

「今から打ち上げパーティーなのよ」

グラスにウオッカを注ぎながら、サンドイッチ・ウーマンが言った。「みんな、あなたが乾杯の音頭をとるのを待ってるのよ」

「それは実に素晴らしい！いやいや、待たせて悪かったね！」私はそそくさと、店内に入り込んだ。「さあ、私も今夜は倒れるまで飲むとしよう！」

私は躍り上がりながら言った。

「李大人よ、ご自慢の樽酒をくれ給え！！」

しかし、李白が持つて来たのは、酒ではなくて海苔茶漬けであった。

「これは？」

「シメですよ」と李白は言った。

「そんな、殺生な！」と私は叫んだ。

「まだ来たばかりで、一滴も飲んでいないじゃないか、私は」

「嘘をつきなさい。ビアガーデンで大ジョッキ二杯も空けて来たくせに」李白は髭をしごきながら言った。

「たいした酒量でもないだろう」

「それだけ飲めば上等ですよ。おまけに旦那は、病み上がりでしょう。悪い事は言わない。大人しくお茶漬けを食べなさいよ。」

私は、ぶつくさ不平を漏らしながらも、結局は彼の忠告を聞き入れた。（私の如き青二才が、彼に逆らえるはずもない）

「それでは」ルイ十五世が、ワイングラスを掲げて言った。「乾杯の後で、かの有名な『卵剥き』を御覧に入れよう。」

歓声が巻き起こった。

私は、お茶漬けの入った茶碗を掲げて立ち上がった。

「乾杯の音頭を取らせていただきます。しかし、特に挨拶はございません。したかった話のみならず、この本の中に書いてしまったのですから。今はただ、皆さんの肝臓が清純なまままでいられることを願うばかりです。では、皆さんのために、乾杯。」

怒号のような合唱が響き渡った。

「乾杯！！！」

グラスのぶつかり合う音が聞こえ、コルク栓が勢いよく弾けとび、卵の殻が店内に雪のごとく舞い散り、トナカイは床一面に撒かれた牧草に鼻面を突つ込み、そしてアルキメデスは石版を投げ捨てて高歌放吟した。私はそんな喧騒に身を浸しながら、背中を丸めてお茶漬を啜っていた。酒を飲ませてもらえぬ悲しさを一瞬にして忘れさせてくれるような、最高に美味しい一品であった。

このお茶漬は、李白畢生の詩篇に違いない。私はそう思った。



さて、この小説はひとまず終わるのであるが、おてまいたもう一つだけ、エピソードを加えておくことにしよう。それはこの狂気の打ち上げの翌日、すなわち日曜日の出来事である。この小説は日曜日の物語で始まり、日曜日の物語で終わるのだ。

日曜日の安心

今日はとてもいい天気なので、何の意味も加えたくない。

だから僕は△君▽を連れて、ぼろ靴を履き潰しに出かけた。別に目的地があるわけでもない。ただ、何の面白みも無い町並みをたゆたいながら、のんびりと一日を無駄にしてみたという思いが僕を満たしていたのだ。

僕と△君▽は最寄の駅に行き、環状線に乗った。△君▽は、今日はしわくちやになったパスポートも要りやしないね、と言って笑った。そう、最早、しわくちやになったパスポートは要りやしないわけだ。どこまでも続く線路の上で、そんなものを提示する義務なんてあるはずがない。

僕らは古びたプラットホームの端に立つて、電車が来るのを待っていた。このまま環状線に乗って都市を旋回し続ければ、と僕は空想した、どこか別の世界に行けるかもしれない。

いや、そんなことをするまでもないな、と思い直す。疲れた身体をベッドに横たえれば、事足りるのだから。

電車の中は親子連れで賑わっていた。車窓の外では、窮屈そうに立ち並ぶ家の屋根が、眩い日差しを受けて瞬きを繰り返している。この電車は（昔見た子供向け映画のワンシーンのように）空に飛びたつこともなく、退屈な速度で廃墟の街中をすり抜けて行く。その時に巻き起こる風によって、あれだけ大量の洗濯物が乾いているのだろう。ああ、今日は本当に休みの日なんだ、と僕は独りごちた。

作業服を着込んだお兄さんがやって来て、車内の中吊り広告を取り替えている。お兄さんのシルエットが、陽炎のように揺らめいて見える。そして、誰に握られることもなくぶら下がっている吊革が、電車の躍動に煽られてジルバを踊り出す。どれ一つとして、同一のリズムに身を弾ませている吊革は無い。それなのに、踊る吊革たちは一糸乱れぬ美しい調和を保っているように見えた。

そう、今日は日曜日、休みの日だ。昨夜は少しく飲みすぎってしまったが、そんなことはどうでもよい。△君▽が人形になってしまった日の翌朝はひどい宿酔に悩まされたものだったが、今朝はそれとは打って変わって、こんな清々しい日曜日の朝を迎えることが出来ただから、気分は上々だ。

「この前やってた仕事はもうすんだの？」と△君▽が尋ねる。

「ああ、無事済んだよ。」

この前の仕事というのは、エルンスト・エリアス・ベスラーなる人物が書いた『語り得ぬ者たちの沈黙』という薄っぺらな本の翻訳である。今まで言い忘れていたが、僕は翻訳家なのだ。僕はその本との格闘に没頭している間中、ひとつの問いを繰り返し考え続けていた**「こんな本を一体誰が読むのだろうか・・・？」**

とは言え、運命の神はどんな悪戯をするかわかったものではない。ひよっとすると、偶然その本を手にとったどこかの変人が、何らかの啓示を受けたりするかもしれない。よっ

ぼどの変人であればの話だが……。それにしても一体、どんな奴が僕の訳した本を買うのだろうか？

走り続ける電車が刻むリズムが、まるで羊水の中で聞こえてくる母体の鼓動のようで、実に心地よかった。僕は電車と一緒に揺れながら、この愛すべき架空の変人について、あれこれ思いを巡らせてみた。どうしたわけだか、やけに彼の姿を鮮明に想像することが出来た。小説家は、こんな風にして登場人物を作り出すものなのだろうか、などと思いつながら、僕はその空想の遊戯を心行くまで楽しんだ。

僕らは出鱈目に選んだ駅で下車し、名も知らぬ町を当ても無く歩いた。シャツターの降りた自転車屋、準備中の札を掲げた（本当は、ずっと前に閉店している）定食屋、青く変色したビールの広告を表に張ったスーパー、壁一面に蔦を絡ませた小さな喫茶店、巡査が居眠りをしている交番、もはや内部が物置と化してしまっている雑貨店、そして……。

裏路地に入ってみると、やや急な石の階段が二十メートルほど下へ続いていた。見下ろしてみると、胃袋のすぐ下の辺りに寒風が吹き抜けていくような気分になった。ずいぶんと高低差のある地形の町であること！

△君▽は歓声を上げて、カクカクと奇妙なステップを踏みながら石段を駆け降りて行った。慌てて僕も、後を追う。転んでバラバラになりでもされたら、後が面倒だ（いつぞやの、美術館での時のように）。まるで誰かに小突かれているような、巨大な力に引っ張られているような感覚を覚えながら、僕らは石段を走り続ける。僕らはこんな風にして胎内から滑り出て来たのだろうか、と思った。

階段を下りたところには少し広い空間があり、降り注いできた太陽光線が溜まっていた。その空間が余りにも眩しかったので、すっかり幻惑されてしまった僕らが無言で佇んでいると、幾羽もの鳩が足元に寄ってきた。△君▽はカバンの中から齧りかけのコッペパンを取り出し、千切っては投げ、千切っては投げしていた。

パンがすっかりなくなった後で、鳩たちが耳を聳するばかりの羽音の集合体となって飛び去ってしまうと、△君▽は小さなカメラを取り出して言った。

「記念写真を撮ろう」

しかし、△君▽は、僕らの姿をフィルムに留めようとはしなかった。代わりに、誰もいない陽だまりの空間――一面に、パンくずが散らばっている――を撮影した。

「それを記念写真というのかい」と僕が笑うと、△君▽は大真面目に言った。

「背景だけで十分よ。今日が懐かしくなった時に、その上に思い思いの像を描けばいいじゃない」

そんなわけで、誰も写っていない記念写真が完成した。

行く手に、大きな川が見えた。土手の上を子供たちが走って行った。彼らはあと何年か経った後、疲弊して傷だらけになった身体をさすりつつ、どんな気分か今日の事を思い出すのだろうか？

いや、今はそんなことを考えるべきではない、なにしろこんなにいい天気なのだから。

あの土手の上を歩いてみようか、と僕は思いつきで提案した。いいね、と△君▽は関節をカタカタと鳴らして答えた。

土手の上を、足の裏の感触を慈しむが如くゆっくり歩く。靴の下で、生い茂った草が擦れる音がする。川の流れば穏やかなままだった。空の青色を映して流れる、あの川は本当に穏やかなままであった。

僕は川の向こう岸を眺めてみる。古惚け黄ばんだアパートの側面が見える。時折吹く風が、ベランダに吊り下げられた洗濯物をはためかせていた。遠くの鉄橋の上を、四両連結の電車が走って行く。こんな風にして日曜日の昼下がりはこわれてゆくのだな、と僕はA君Vに言った。A君Vは零コンマ一秒単位でその表情を変え続けている、太陽の光を反射した川の水面を飽きることなく眺めていて、かなしいくらいにいい眺めだねえ、と呟いた。そこで僕は、かなしい気分を胸に貼り付けて、静かな日差しに身を任せてみることにした。

僕とA君Vは立ち止まって、土手にしゃがみこむ。柔らかい日差しを受けた草がほんのりと暖まっている。冬、この草が全部枯れていたとは信じがたいことだ、と僕は思った。この土手沿いを木枯らしが駆け抜けていったというのも、想像のつかないことだった。心地よい夏の休日だけが、この土手に似つかわしいものに思えた。

A君Vはカバンの中から水筒を取り出した。フッ素加工の水筒だから歯にいいよ、とA君Vは不思議な事を言いながら、香ばしい麦茶を注ぐ。続いて、石のような物を包んだハンカチと、丸々として真っ赤な林檎を二つ取り出す。ライター持つてる？とA君Vが尋ねる。僕がポケットからそれを取り出して渡すと、A君Vはハンカチの中身を地面に移して火をつけた。

「その石、何？」

「石炭よ。」

そしてA君Vは、猶予迫らぬ見事なお手並みで、林檎を二つ焼き始めた。

焼き林檎を食べ終えた後で、僕とA君Vは土手の斜面に寝そべり、空を見上げた。今日はずっともいい天気なので、叢も心地よく暖かいものに思えた。そして今日の空は余りにも澄み渡っていたので、まるで自分が死んでしまったような気分がした。あまりにそれが心地よい気分だったので、いつの日かまたよく晴れた日曜日にめぐり合うことができたならば、こんな風にして林檎を食べて過ごしたい、と心の底から思った。

口の中には、まだ林檎の味が残っていた。風が吹いた。僕はそっと身体を動かし、A君Vを探り当てた。僕と同じように、A君Vの口の中にも林檎の味が残っているのがわかった。

A君Vを抱くなんて、と僕は思った、本当に久しぶりだ。全身が火照るのを感じたが、不思議と心は静かだった。あまりに今日の空が青すぎるからかもしれない、と思った。

「昔見たイタリア映画の終わりのシーンを思い出すよ」と僕は言った。

「どんな場面？」

「老いぼれた主人公が人形と踊るのさ」

さて、その時僕の頭をふと横切ったのは、こんなに熱いことをしていたら、木偶人形ゆえにA君Vが燃えてしまい、全てが終わった後には炭になってしまうのではないかという馬鹿馬鹿しい不安だった。しかし心配は無用だった。僕は、A君Vの体から、花に似た肌の香りが立ち上って来ていることに気がついた。青すぎる空のせいなのか、僕と繋がったせい

なのか、いつの間にか△君▽は生身の人間に戻っていたのだった。

「戻ったんだね」僕は顔を埋めながら言った。

「戻った？」△君▽は笑った。「私はいつだって私だったわよ。堂々巡りの中にいるだけよ。」

「また振り出しに戻ったみたいだ」

「そうよ。何度でも振り出しに戻る。何度でも堂々めぐり。そうやって生きてくのよ」

「夢だったのかな」

「全部が、ね。」△君▽は押し殺した声で言った。「これまでの全部も、これからの全部も。」

泥と汗にまみれたご大層な儀式が終わった後で、僕は抜けるように青い空を見ながら、さっきの馬鹿馬鹿しい不安を思い起こし思わず笑ってしまった。考えてみれば、いつだって僕はそうした取るに足らない心配事をいくつも抱えて生きてきた気がする。何がそんなに不安だったのだろう。なんであんなに阿呆だったのだろう。こんなにも空が大きいものだったとは、今まで気付いたこともなかった。そして、こんなにも人生が美しいものだったということも。

さて、これから何をしよう。

小説でも書いてみようか、と僕は思った。さっき戯れに空想してみた、僕の本を買った男を主人公に据えて。夢見がちな変わり者が、街を散策している時に、古本屋の店先で僕の訳した本を偶然に手に取る。そこから物語が始まる……。そんな小説を書いてみるのはどうだろうか。思い切り、無意味な小説を。

タイトルはどうしよう。散策に始まり、散策に終わる小説。虚構空間内を絶えず散策し続ける物語。「夢遊という散策」というのがいいかもしれない、と思った。

僕らはみんな、夢遊という散策で日々を浪費して生き、そして死んでゆくのだ。

なんて素敵な無意味さだろう。

意味が無いことの、限らない尊さよ！

傍らで、△君▽がかすかな鼾をかいて眠っている。

△君▽が目覚めたら、空っぽの水筒にこの大空を詰めて、家に帰ろうか。

そんなことを考えながら、僕もかすかな鼾をかき始める。

今日はとてもいい天気なので、なんの意味も加えたくない。

今日があんまりいい天気だから、意味ある事はしないでおう。

今日はとてもいい天気だから。

今日があんまりいい天気だから。